

宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈四

信時 哲郎

17 「遠く琥珀のいろなして」

①遠く琥珀のいろなして、
枯草をひたして雪げ水、

春べと見えしこの原は、
さざめきしげく奔るなり。

②峯には青き雪けむり、
雪げの水はきらめきて、

裾は柏の赤ばやし、
たゞひたすらにまろぶなり。

大意

遙か彼方まで琥珀色で、春先かと思われるこの原では、
枯草の下からこんこんと雪解け水が流れ、そのせせらぎの音も激しい。

峯には青い雪煙がたち、裾野には赤い枯葉をつけたままの柏林、
雪解け水はきらきらと輝き、ただひたすらに下方に向って転がり
落ちていく。

モチーフ

岩手山北東部の春先の様子を描いた作品。標高二〇三八mの山から雪解け水が流れてくるのであるから、必ずしもそれはのどかなものではない。「さざめきしげく」「奔る」わけであり、「水はきらめきて」「たゞひたすらにまろぶ」のである。下書の段階では恋愛のモチーフを入れようとしたり、あるいは雪解け水の勢いを強調しようとする段階もあったが、定稿は岩手山の壮大な景観を遠方

から視覚的に表す奇数行と、雪解け水を近景で表す偶数行をバランスよく配することになっている。

語注

琥珀 地質時代の樹脂が地中で化石になったもの。黄色や褐色で半透明、脂肪光沢がある。非晶質の有機鉱物。耐久性に欠けるが、美しさと希少性から世界各地で珍重され、しばしば昆虫などの入ったものも見つかる。ここでは春先の枯草が琥珀色に見えたというのである。岩手県久慈市は国内最大の琥珀産地として知られ、「未定稿」の「八戸」では、「さやかなる夏の衣して／ひとびとは汽車を待てども／疾みはてしわれはさびしく／琥珀もて客を待つめり」と書かれている。

柏の赤ばやし 下書稿(一)に岩手山北東部にある「三つ森」があることから、岩手山の北東部がモデルになっていると思われる。この周辺にはカシワの木が自生していたという。カシワは秋になって葉が枯れても落葉せずに春を迎えることから、春先の柏林が赤く色づいていたとされるのだろう。

評釈

黄野(260行)詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(タイトルは手入れ段階で「標本採集者」。藍インクで①)、その裏面に書かれた下書稿(二)、黄野(220行)詩稿用紙に書かれた下書稿(三)、その裏面に書かれた下書稿(四)、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存(⑤はいずれにも付されていない)。生前発表なし。

『新校本全集』に先行作品は示されていないが、菊池善男（後掲）は関連しそうな短歌を数首あげながら、「この地での重層的体験から成立に至った」のだろうとする。おそらくそのとおりであろう。したがって関連すると思われる作品も数多く、ことに「五十篇」の「きみにならびて野にたてば」は場所、季節もほぼ同じで、用いられる言葉にも共通点が多い。

①きみにならびて野にたてば、 風きららかに吹ききたり、
柏ばやしをとゞろかし、 枯葉を雪にまろばしぬ。

②げにもひかりの群青や、 山のけむりのこなたにも、
鳥はその巢やつくろはん、 ちぎれの艸をついばみぬ。

「遠く琥珀のいろなして」における「峯には青き雪けむり」は、「きみにならびて野にたてば」における「山のけむりのこなたにも」に対応している。同じく「水はきらめきて」は、「風きららかに」に。「柏の赤ばやし」は、「柏ばやしをとゞろかし」。「ひたすらにまろぶなり」は「枯葉を雪にまろばしぬ」といったような関係である。「遠く琥珀のいろなして」では水を描いているのに対し、「きみにならびて野にたてば」では風を描いており、意識的にそうしたのではないかと思われる。島田隆輔（「26「きみにならびて野にたてば」」宮沢賢治研究 文語詩稿訳注・稿2009年版」〔未刊行〕平成二十一年三月）は、「姉妹稿に位置付けてみてもよいかもしれない」と提案しているが、その通りかと思う。「きみにならびて野にたてば」には、定稿ではわかりにくくなっているものの、下書稿段階では「ロマンツェロ」と題されるような恋愛のモチーフがあったが、「遠く琥珀のいろなして」の下書稿（一）も次のようなものであった。

白樺たてるこの原の

偏光のなかをながれたる
雪融の清き水なれば
なれがひねもすよもすがら
はがねの針に綴りたる
青くつ下もぬらしつゝ
かの三つ森にわたり行きなん

小野隆祥（後掲）は、賢治の恋人である可能性を模索し、佐藤勝治（後掲）は、「たぶん妹のうちの一人であろう」とするが、「きみにならびて野にたてば」と同じく、虚構性が高いように思われる。いずれにせよ、下書稿（二）の段階で、人間が描かれることが少なくなり、以降、浮上することがない。自然詩として推敲する方針に改めたのであろう。

関連作品というところで言えば、「人民の敵」というタイトル案が取られたこともある。「一百篇」の「かれ草の雪とけたれば」も、社会詩のようでありながら、岩手山の雄大な自然を賛美した作品であり、関連は深そうだ。

かれ草の雪とけたれば
裾野はゆめのごとくなり
みぢかきマント肩はねて
濁酒をさぐる税務吏や
はた兄弟の馬喰の
驚いろによそほへる
さては「陰気の狼」と
あだなをもてる三百も
みな恍惚とのぞみある

このように関連作品、もしくは似た用語、似た舞台での作品をあげればきりが無い。

下書稿(二)は、次のようなものである。

遠く春べと見えにつゝ
草かゞよへるこの原は
玉をあざむく雪げ水
たゞいちめん鳴りわたる
雪げの水のさゞめきて
まなじのかぎり雪げ水
うちさゞめきて奔るなり
山には青き雪けむり
そらはひそまる玻璃の板
白樺たてるこの原は
さあれわたらんすべもなき

圧倒的な水の量である。今まで雪の力に抑圧されていた生命力が、水と一緒にほとぼしっている感じだ。下書稿(一)における「青くつ下」や「三つ森」などという要素が省かれたのも、水の量、早さ、激しさを強調するためであったのかもしれない。しかし、下書稿(三)になると、描写が抑制され、動きも、水が湧き出る音も抑えられる感じである。

遠く枯草かゞやきて
春べと見えしこの原は
泉をまがふ雪げ水
たゞさゞめきて奔るなり

山には青き山けむり
天はひそまる瑠璃の椀
白樺たてるこの原の
あやしき沼をなせりけり

文語とはいえ饒舌だった下書稿(二)から一転して、様式の中に嵌め込まれている感じである。この後、下書稿(四)で語句が整えられ、定稿としてまとめられる。もう一度、定稿をあげよう。

① 遠く琥珀のいろなして、
枯草をひたして雪げ水、
春べと見えしこの原は、
さゞめきしげく奔るなり。

② 峯には青き雪けむり、
雪げの水はきらめきて、
裾は柏の赤ばやし、
たゞひたすらにまるぶなり。

各連の一行目には遠景を配し、二行目は近景を描き、水の量と勢いのはなはだしい様子を描いている。一連と二連はきれいに対をなしており、形式としてはかなり洗練されたと言うべきだろう。ただ、下書稿(一)にあった物語性、下書稿(二)にあった生命力といったものが、様式美・形式美に囚われることによって、失われてしまっている気もする。できるだけ自分を出さないようにするというのは、文語詩定稿のスタイルであったのかもしれないが、「定型の魔」(天沢退二郎『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』帯カバー 柏プラーノ 平成十二年九月)とでもいうべきものに毒されている印象がある。様式や形式を守ることによって、定型詩は人々の記憶に残り、口誦される機会も増えたのかもしれないが、その反面、突出したのも平均化されてしまうのはやむを得ないことなのかもしれない。文語詩は、やはり下書稿も一緒に読んだ方がいいのかもしれない。

先行研究

小野隆祥 A 「賢治の和賀時代の恋 大正八年成立仮説の幻想的展開」(『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッチ」探究』 洋々社 昭和五十七年十二月)

小野隆祥B「幻想的展開の吟味」(『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と

「冬のスケッチ」探究』洋々社 昭和五十七年十二月)

佐藤勝治『「三つ森山」のこっけい極まる推理』(『宮沢賢治青春の

秘唱 冬のスケッチ』研究』十字屋書店 昭和五十九年四月)

菊池善男「遠く琥珀のいろなして」(『宮沢賢治 文語詩の森』

柏プラーノ 平成十一年六月)

赤田秀子「文語詩を読む その4 「かれ草の雪とけたれば」を中

心に」(『ワルトラワラ15』ワルトラワラの会 平成十三年十一

月)

18 心相

① ころの師とはならんとも、
いましめ古りしさながらに、
ころを師とはなさざれと、
たよりなきこそころなれ。

② はじめは潜む蒼穹に、
面さへ映えて仰ぎしを、
あはれ鷲王の影供ぞと、
いまは酸えしておぞましき、
澱粉堆とあざわらひ、
いたゞきすべる雪雲を、
腐せし馬鈴薯とさげすみぬ。

大意

自分の心を操ることはあつても、心に操られることがあつてはならないと、古びてしまった戒めにもあるとおりに、たよりにならないものこそが心というものである。

はじめは青空の底に、ああ、仏の御姿が現れたのかと、輝かしいばかりの山容を仰いだというのに、今は古びておぞましい、

デンブンが沈殿した山ではないかと嘲笑い、頂からすべりおりる雪雲も、腐った馬鈴薯のようだと蔑んでしまふ。

モチーフ

第二連は『春と修羅(第一集)』の「岩手山」を文語詩化したもの
のようだが、第一連も『春と修羅(第一集)』の「序」を文語詩化
したものだと言えるかもしれない。若き日の賢治は、この本を
「歴史や宗教の位置を全く変換」(大正十四年二月九日 森莊巳池
宛書簡)しようと刊行し、多くの人に配ったが、晩年の賢治は、
それを若気の至り(慢)であったと認識していたのではないかと
思う。しかし、本作では、時が経ち、表現の方法こそ変えても、
本質は変わっていないということを宣言しようとしているのかも
しれない。

語注

心相 ころのすがた、あり方。

ころの師とはならんとも、ころを師とはなさざれ 『大般涅槃

經』や源信の『往生要集』、鴨長明の『發心集』などにも引用
される言葉で、自分の心を制御する必要はあつても、うつろい
やすい心に引きずられてはいけないという意味。小倉豊文(後
掲)は、日蓮の「義浄坊御書」にこの句を見つけているが、文永十
二年の「曾谷入道殿御返書」や「兄弟鈔」にも使用例がある。

水野達朗(後掲A、B)は、田中智学の『妙宗式目講義録』(現
在は『日蓮主義教学大観』)にこの言葉を見つけている。智学の
説明は次のとおり。「吾人は宿習として惑心多く罪障の力強くあ
るから動もすれば、自己の心にて自己の道心を破ることもある、
仮し道念を失はない迄も、一分も自己を主として法を第二義と
する心あるときは、魔、茲に便を得て、吾人の智解の中に現れ、
或は宿癖の欲情から這入ッて来るなど、順より逆より種々八方

から道心を惑乱せんとするのである、彼の 聖祖御在世、御直弟の中にも、聖祖を疑ひ参らせ、背き参らせ、捨まゐらせた者などみなこれ心を師とした誤である」。

さながらに 「そのように」という意味での副詞「宛ら^{さながら}」のように思えるが、関連作品であると思われる「未定稿」の「(一)ろの影を恐るなど」を見ると、「しかしながら」という意味に取るべきかもしれない。

駕王 『広説仏教語大辞典』によれば、「鷲鳥の王」という意味で、仏に喩えた名。仏の三十二相中に手足縵網相があり、手指・足指の間に縵網（水かきのような網）があるのが鷲鳥の足に似ているから、こういう」とある。中谷俊雄（後掲）は、「人が生きる糧としての宗教は、たいへん真面目なものである。ガチョウのような滑稽なものはいつしか排除されてきた。文語詩「心相」は、その滑稽味を生かした手法である。ほのかなユーモアが感じられる」とし、水野（後掲B）も「大きなガチョウが空いっばいに聳えている情景とか、ジャガイモが雲の替わりに浮かんでいる光景とかの、奇抜さや可笑しさをまず感じ取るのがいいだろう」とするが、特にユーモアを読み取る必要はないように思う。

影供 「えいぐ」と読み、「神仏や故人の像に供物をささげて供養の気持ちを表すこと」（『広説仏教語大辞典』）を表すが、ここでは水野（後掲B）の言うように「お供えを受ける仏の映像の方を指している」と思われる。賢治は下書稿(三)で「すがた」とルビを振っている。

澱粉堆 「でんぷんたい」と読ませたかったのだろう。下書稿(三)に「堆」とルビが振られている。デンブンの粉が堆積している様子。馬鈴薯などをすりおろして水に漬けておくと、十分ほどで白いデンブンが沈殿するが、一時は仏の御姿かとも思えたものが、時間がたつと、デンブンの堆積した白い粉のように見えたとのこと。

馬鈴薯 下書稿に「いも」とルビがあり、音数からもそう読ませたかったのだろう。バレイショは、ジャガイモの別名。日本での本格的な栽培は明治以降。寒冷でやせた土地でも育つために救荒作物としても貴重であった。

評釈

黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿(一)（手入れ時に「心相」のタイトル、以下も同じ。赤インクで①）、同じ紙面に下書稿(二)、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(三)（鉛筆で②）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。「未定稿」の「(一)ろの影を恐るなど」は本作の関連作品、もしくは下書稿かと思われる。

まず、不揃いな形式が目につく。自筆の丸番号が付されているが一連と二連が対をなしていない。そして水野達朗（後掲A）が言うように、本作の内容は「理屈と思弁そのものである点」で極めて異例だ。しかも、二連は『春と修羅（第一集）』の「岩手山」と重なる部分が多い（『新校本全集』に指摘はない）。賢治の文語詩は、書き溜められた短歌や心象スケッチを元にして改稿される場合がほとんどだが、『春と修羅（第一集）』所収の作品から発展したとされるものはほとんどなく、その意味でも異例である。また、第一集由来の作品だと言えそうなものは岩手山を扱った本作と、早池峰山を扱った「コバルト山地。」（「二百篇」）であることから、なんらかの意図が背景にあったように思えてしまう。『春と修羅（第一集）』の「岩手山」の原文をあげるが、関連性は明らかであろう。

その散乱^{さんらん}反射^{はんしや}のなかに古ぼけて黒く^{くろく}えぐるものひかりの微塵^{みじん}系列^{けいれつ}の底にきたなくしるく澱むもの

これについて浜垣誠司（「岩手山と澱粉堆」 「宮沢賢治の詩の世界」 <http://www.ihatov.co/> 平成十七年十二月十六日）が、

1・2行目においては「山」が実体としてとらえられるのではなく、逆に「そら」をえぐる欠如態として、やはりネガティブに認識されているのが特徴的です。普通は、山というものの形をこのように見る人はいませんよね。ちよūd「ルビンの盃」のように、「図」と「地」が逆転しているのです。

さらに3・4行目では、山の形姿は空からの沈殿（上↓下）として描かれます。これも、山は地殻が隆起して生まれる（下↑上）という、実際の地質学的な成因の逆になっています。

と書いているように、きわめて興味深い作品なのだが、本作で賢治がこだわっているのは、岩手山を同じ人物が見ても、複数の印象が生まれてしまうという事態で、少しポイントがずれている。本論で「岩手山」を文語詩「心相」の関連作品とはしても、先行作品だと言っていないのも、そのためだ。

さて、小倉豊文（後掲）は、「雨ニモマケズ手帳」の裏扉と裏表紙見返し（『新校本全集』の呼称では「裏見返し1・裏見返し

2」）に書かれた賢治のメモ「警 貢高心」、「警 散乱心」に深い意味があったのではないかとして本作をあげ、晩年の心境を考察している。貢高心とはおごりたかぶる心、つまり慢心であり、散乱心とは善悪さまざまにゆれうごく心のことである。

青山和憲（後掲）は、「自然に託する人の思いの定めなきが嘆かれているが、同時にそれは自然が人間の思惑とは関わりのない、それそのものとしての自然でしかないことへの慨嘆でもある」とする。

中谷俊雄（後掲）は、「詩集『春と修羅』を上梓したことは「ある心理学的な仕事の支度」のために、ここに写ったものをその

ままスケッチしておくのだと言っている」だが、「ここでは変わりやすい心を嘆き、常にそれをコントロールすることを自分に求めている。「心象スケッチ」という方法にも賢治の生涯では紆余曲折があったのだ」とする。

近藤晴彦（後掲）は、「空想的詩作を貶し」「賢治特有のものであった「心象」をパロディ化して揶揄」しているのだとする。ただ、水野（後掲B）は、「右の四氏ともこの点、この詩に描かれた状態を、克服されるべき否定的なものとして捉えている。賢治は心の定めなきを離れ、動揺しない堅固な心を、或は逆に人の主観に左右されない自然の实在を、求めていると見るのである。「但し表現意識という点から見れば」、「詩人は堅固な心や实在の自然の方に踏み出す手前で、決めない心を見つめたまま立ち尽くしているように思われる」とし、「未定稿」の「こゝろの影を恐るなと」をあげる。

こゝろの影を恐るなと

まことにさなり さりながら

こゝろの影のしばしなる

そをこそ世界現実といふ

いかにも賢治は日蓮や智学が説くような心の影が見せる誘惑や悪を超越し、心の強さを志向しているように見える。しかし、水野が言うとおり、「それらかりそめの「こゝろの影」こそが自分には世界であり現実なのだから、簡単にそれを超えて向こう側に出ることはできないと答え」ているのだ。だからこそ、『春と修羅（第一集）』の「序」で、次のように書いたのである。

これらについて人や銀河や修羅や海胆は
宇宙塵をたべ、または空気や塩水を呼吸しながら
それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟こゝろのひとつの風物です
たゞたしかに記録されたこれらのけしきは
記録されたそのとほりのこのけしきで
それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで
ある程度まではみんなに共通いたします

賢治は心が見せる様々な「風物」に正邪をつけようとしたので
はなく、むしろ「あなたのためになるところもあるでせうし、た
だそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわ
けがよくつきません」(「序」 『注文の多い料理店』) という事情
から、「そのとほり」に記述するしかなかったのである。

多くの論者が、賢治は心の影に惑わされる生き方を否定して、
文語詩「心相」を書いたと考えたのは、経典に説かれているよう
なことを引用しながら、賢治がそれを否定するはずはないと思っ
ていたからではないだろうか。しかし、さまざまな心の風景を描
くという賢治の表現行為は、そもそもそれと相反するところに始
まっている。そこで若き日に書いた心象スケッチを否定する気にな
って、「心相」が描かれたのだという解釈も生まれたのだろう。
しかし、賢治が自らの「散乱心」を自己批判したという解釈が
生まれた原因はこれにとどまらず、文語詩定稿の二行目にある
「さながらに」を「そうであるから」の意味に取っているのでは
ないかと思う。しかし、ここは「そうではあるけれども」という
意味で解釈していかないからではないだろうか(水野も、これに関
しては他の論者と同じ読み方をしているようだ)。

つまり、ここは「古くからの戒めのとおり、まことにもつてた
よりのないのが心である」と解されているが、実は「古くからの戒
めはあるのだけれども、たよりない性質こそが心というもののなの
だ」と解するべきだと思われる。

とすると、第一連は、「未定稿」の「こゝろの影を恐るなと」
の内容と一致する。つまり、「こゝろの影を恐るなと」と、仏説に

は説かれている。「さりながら」、自分は「そこそ世界現実とい
ふ」という内容にピッタリと合致するのである。いや、合致する
どころか、第一連と全く同じ内容であり、これは「未定稿」では
なく、本作「心相」の下書稿(一)以前の下書稿(0)とも位置付ける
べきものかもしれない(『新校本全集』に関連稿の指摘はなく、下
書もないという)。

さて、水野(後掲B)は、『春と修羅(第一集)』の「序」を
「心相」の関連作品と言ってもよいのではないかと提案している
が、賛成である。ただ、

「心象スケッチ」の「心象」は、詩人個人の主観であると同時に
に、「風景やみんな」の実相、世界そのものの実相をも包摂する
ものとして、各自の「こゝろの風物」よりも高い次元に設定さ
れている。

これに対し晩年の賢治は、各自の「こゝろの風物」こそが世
界であると考え、向こう側の世界そのものへと越え出ようとは
しない。むしろ「たよりなき」ものの内に留まることを選び、
「そのとほり」の確実なものを急いで求めることはしないので
ある。

とする点には違和感が残る。

これについては島田隆輔(後掲)も違和感を指摘し、「古き教」
(下書稿(二))は「古きいましめ」(下書稿(三)手入れ)にまで高めら
れており、「戒律を保持すようとする意思」を感じとろうとする。
しかし、これでは水野以前の四氏と同じ読み方である。

ここで指摘しておきたい水野への違和感は、たしかに、賢治は
ただたよりない「こゝろの風物」を提出するのみでなく、「みんな
に共通」する何かを提出したかったとは思うのだが、それは、や
はり「世界そのものの実相」であるとは思えなかったはずだ、
ということである。

先にあげた『春と修羅（第一集）』の「序」にもあるように、「たゞたしかに記録されたこれらのけしきは／記録されたそのとほりのこのけしきで／それが虚無ならば虚無自身がこのとほりである程度まではみんなに共通いたします」とある。つまり、賢治は「このろのひとつの風物」ではないものを書きたいと思っはいるが、それも、かつての本体論者（宗教学や哲学者）が提出してきた様々な説と同じように、やはり虚無であるとされる可能性が高いということを認識していたのだろう。自分の書きとった言葉が、実相そのものだとは思い込めなかったのだと思う。自ら「正しくうつされた筈のこれらのことばが／わづかその一點にも均しい明暗のうち／（あるひは修羅の十億年）／すではやくもその組立や質を變じ／しかもわたくしも印刷者も／それを変らないとして感ずることは／傾向としてはあり得ます」とも書いているように、

おそらくこれから二千年もたつたころはそれ相當のちがつた地質学が流用され相当した証拠もまた次次過去から現出しみんなは二千年ぐらゐ前には青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層きらびやかな氷室素のあたりからすてきな化石を発掘したりあるひは白堊紀砂岩の層面に透明な人類の巨大な足跡を発見するかもしれません

と賢治は書いている。しかし、それでも、ある程度まではみんなに共通するのではないか。みんなで共通部分を確認し合いながら、少しずつ精度を高めていけば、いつの日か、実相にまで至ること

もできるのではないか。その日のために、賢治は心象スケッチを書き連ねているというのだろう。水野は心象スケッチ時代の「心象」と文語詩時代の「心相」に分けて捉えようと試みているようだが、昭和七年六月二十一日の母木光宛書簡にも、

こんな世の中に心象スケッチなんといふものを、大衆めあてで決して書いてゐる次第でありません。全くさびしくてたまらず、美しいものがほしくてたまらず、ただ幾人かの完全な同感者から「あれはさうですね。」といふやうなことを、ぼつんと云はれる位がまづのぞみといふところですよ。

と書いているように、文語詩を改稿していたのとはぼ同じ頃にも、賢治は心象スケッチのアイディアから全面撤退したわけではない。とすれば、文語詩「心相」において賢治が述べていることは、やはり『春と修羅（第一集）』の「序」と同じなのだと言うべきではないだろうか。

それでは、心象スケッチ時代の賢治と文語詩時代の賢治に全く変化はなかったのか、と問われるかもしれない。

変化はあつたと思う。しかし、表現者として自らが残してきたものについて、賢治は改める気はなかったように思うのである。ただ、そうした作品たちを、自ら公刊し、「宗教学やいろいろの人たちに贈り」、「歴史や宗教の位置を全く変換」（大正十四年二月九日 森莊巳池宛書簡）しようなどとは、もう思わないように変化した、と言うべきだろう。

教え子・柳原昌悦に宛てた生前最後の手紙で、「私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します」と告白しているように、自らの作品を押し付けるような高慢な態度ではなく、一つ一つの作品を口誦しては、確実に作品世界に共感し、「あれはさ

うですぬ」とぼつんとつぶやいてくれるような読者が現れてくれること、そして、誰がいつ作ったともわからない万葉集の東歌や平安時代の今様のように、口伝えで歌い継がれ、誦み継がれることを望むようになったのではないかと思うのである。

先行研究

- 小倉豊文「チャイコフスキー」・「警貢高心」(『雨ニモマケズ手帳』新考) 東京創元社 昭和五十三年十二月)
青山和憲「文語詩に関する独善的妄言」(『宮沢賢治9』 洋々社 平成元年十一月)
中谷俊雄「ガチョウ 仏の三三相」(『賢治鳥類学』 新曜社 平成十年五月)
近藤晴彦「死の視点IV」(『宮沢賢治への接近』 河出書房新社 平成十三年十月)
榊昌子「転生する風景」(『宮沢賢治「春と修羅 第二集」の風景』 無明舎 平成十六年二月)
水野達朗A「心相」考 賢治文語詩の一断面」(『比較文学・文化論集19』 東京大学比較文学・文化研究会 平成十四年三月)
水野達朗B「心相」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ 平成十四年七月)
赤田秀子「文語詩を読む その7 酸っぱいのは南風? 虹? 「酸虹」他」(『ワルトラワラ18』 ワルトラワラの会 平成十五年六月)
島田隆輔「初期論」(『宮沢賢治論 文語詩稿叙説』 朝文社 平成十七年十二月)

19 山月像

①朝のテニスを慨^{なげ}ひて、
額^{なげ}は貢^{たか}し 雪の風。

②入りて原簿を閲すれば、
その手砒硫の香にけぶる。

大意

朝からテニスをされるのは腹立たしいものだ、額にしわが寄って盛り上がる。外は吹雪だというのに。

職員室で原簿をチェックしていると、その手からは砒素や硫酸の匂いが漂う。

モチーフ

農学校教員時代に書かれたスケッチから派生した作品。賢治の運動音痴はよく知られるところで、それゆえに他の教員のように生徒と一緒にテニスをして親睦を深めることができず、一人で悶々と仕事をしていたことがあるのだろう。言外には、体を鍛えるためには、あるいは頭を鍛えるためには、もっと他にやるべきことがあるはずだ。といった思いが込められているのであろう。しかし、賢治は他者を批判してスツキリとできるタイプではない。こんなことで気分を害している自分というのが一番許せない存在だと思っていたのだろう。逐次形(清書後手入稿)には、「修羅」という言葉も見えているとおりに、こうした日常生活の中の「慨ひ」が、やがて「おれはひとりの修羅なのだ」(「春と修羅」という認識に繋がっていったのかもしれない)。

語注

額^{なげ}は貢^{たか}し 逐次形(清書後手入稿)の文語詩を口語詩化した

「松の針はいま白光に溶ける」には、「なぜテニスをやるか。／おれの額がこんなに高くなったのに。」とある。「おれ」を怒らせたのであるから、額にしわを寄せたということであろう。ただし「額が高い」という表現をしている例は、管見の限り、

他に見つからない。「春と修羅 第三集」の「表彰者」(下書稿(三))などでは、「額はきざみ」という言い方をしている。「頁」という字をあてているが、みつぐ、ささげる、すすめるなどの意味で用いるのが普通で、なぜこの字を使うことにしたのかわからない。

原簿 農学校時代の経験を元にしていられると思われるため、成績や出席の原簿であろう。ただ、下書稿(二)、(三)では、医者が主人公になって虚構化を意識した形跡もあることから、患者の名簿(カルテ?)を指しているのかもしれない。

砒硫 板谷栄城(「ヒ素」『賢治博物誌』れんが書房新社 昭和五十四年七月)はヒ素は猛毒だが自然界には硫黄と化合した形でよく産し、そのうちの雌黄を指すのではないかとし、これは朱墨の材料として使われるため、本作に登場する砒硫は雌黄ではないかという。『定本語彙辞典』は、硫化砒素の略だろつとし、「原簿」には朱墨による訂正が入っていて、その朱が手についたのを「砒硫の香にけぶる」と書いたのではないかとする。また、榊昌子(後掲)は、『春と修羅(第一集)』所収の「小岩井農場」の清書後手入稿に「砒素」があることから、なんらかの関係があったのではないかとしている。朱墨説は魅力的だが、下書稿(二)や(三)の段階で、対象となる人物を医者としてということから、治療や実験のために薬品の匂いが手についていたということなのかもしれない。ともあれ「ひりゆう」という語が登場した第一の理由は、音数を整えるためであったことに違いはなさそうだ。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」と同じ1020(広)イーグル印原稿紙に「修羅白日。」のタイトルで書かれた逐次形(「〔冬のスケッチ〕」とは綴じ穴が一致しないものが多く、書式も収録方法も異なる。なお、同じ紙面の下部には口語詩化が試みられている)、黄野(220行)

詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(タイトルは「松の針」)、その裏面に書かれた下書稿(二)(タイトルは「病院主」)、その余白に書かれた下書稿(三)(タイトルは「M氏肖像」)⑤は下書稿に見当たらない。定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。なお、逐次形は口語詩化されており、『新校本全集5』に「補遺詩篇I」の「〔松の針はいま白光に溶ける〕」として収録されている。まず逐次形(清書後手入稿)とされる「修羅白日。」から見ていきたい。

松の針 白光に溶け
尊き金はなゝめに流る
人のテニスはいきどほろし
われの額は いと高し

日輪雲に入りませば
雲まさしく白金の環
松の実とその松の枝
黒くしていともあきらけし

雲とくれば日は水銀
天盤碎けてゆらめけり
なにゆゑにこゝになげくや
針葉つやゝかに波だち、

横雲来れば雲は灼焼
ふたたび人はいきどほろし
横雲去れば日は光耀
郡役所の屋根ほどもなし。

あゝ修羅のなかにたゆたひ

また 青青と かなしめり。

わが手にはかれ草のほひ
まなこには黄の 天の川
黄水晶の砂利もわたりなん
うつろもひとつにはあらぬを。

風のひのきをてらしつゝ

太陽は落ち

春の透明の中より

人のことばは 身を責む。

(あしたはかれくさのどてを
黄いろのマントひるがへり
ひるすぎは やなぎ並木を
上席書記 わらひ来る。)

農学校時代の記述であると思われるが、「郡役所」とあることから、移転する前の稗貫農学校時代(大正十年十二月〜大正十二年三月)の所感であろうと思われる。

『新校本全集1』には、「『冬のスケッチ』」の第四六・四七葉に「共通の発想が見られる」と指摘があるが、このようなものである。

※ 光燿礼讃

白光をおくりまし
にがきなみだをほしたまへり
さらに琥珀のかけらを賜ひ
忿りの青さへゆるしませり。

白光のなかなれば
隣光ゆがむ 妖精も
ころものひださへととのへず
ほのぼのとしてたゞ消え行けり。

なにが「なみだ」を流させるほどの「忿り」の対象になったのかはわからない。四六葉の別の箇所には「日輪光燿したまふを／かたくななるわれは泣けり」ともある。また、「『冬のスケッチ』」の第四四葉には「灰いろはがねのいかりをいだき」と、『春と修羅(第一集)』の標題作でもある「春と修羅」の「心象のはいいろはがねから／あけびのつるはくもにからまり」をも思わせる言葉があり、どうも農学校に勤務した時代に、自分は怒ってばかりいる存在なのだという意識が生まれ、このモチーフがその後の詩作にまで長く影響したようである。逐次形のタイトルに「修羅」の語がふくまれることから、「春と修羅」の関係は浅くないと思われる。

いずれにせよ「『冬のスケッチ』」ではあまりにも断片的なので、「修羅白日」からその怒りの原因を探っていくことにしたいが、それが見出せるのは「人のテニス」であるとしか言いようがない。空を見上げて、「ふたたび人はいきどほろし」とあるが、それは「ふたたび」であるから、全編に漲っているのは、やはり「テニス」に対する憤りだということになる。もちろん、賢治の修羅意識の源流がここにあるのだなどは軽々に言えない。深層には宗教の問題、家業の問題、あるいは女性について、教師という仕事について：さまざまな思いがあったと思われるからだ。しかし、その思いが噴き出た一つの例として、本編においてはテニスに興じる同僚(生徒?)がターゲットになったようである。

概して運動神経のない人間にとって、スポーツに興じる人々を見ることは苦痛以外の何ものでもない。生徒を連れて散歩や水泳

に出かけ、学校に絵を飾り、演劇をさせ、自作の歌を歌わせるなど、様々な活動を通して生徒の感性を向上させようとした賢治だが、テニスの相手をしてやることはできなかったのだろう。運動神経が鈍かったと言われる賢治が、テニスをやっている人々に対してかくも憤っていたとしたら、それは音のうるささでもあったかもしれないが、むしろ自分の人格や能力を否定するもののように聞こえ、それ故の拒絶であり憤りだったとすべきだと思う。

たしかに盛岡中学時代の友人で、賢治の大沢温泉におけるイタズラの数々を告白する相手でもあった藤原健次郎は、野球部で四番バッターを務める人物であった（ただし、藤原は早世してしました）。また、教え子の平野長英は、稗貫農学校時代の「唯一面しか無かった学校のテニス・コートで毎日練習し」、岩手県代表として大内金助と共にダブルスで出場したともいう（「テニスのダブルスに、県代表として出場する」『マコトノ草ノ種マケリ 師父賢治先生回顧』岩手県立花巻農業高等学校同窓会 平成八年五月）。「五十篇」の「翔けりゆく冬のフェノール」では、盛岡高等農林の教員であった小泉多三郎と思われる人物が、「中庭にテニス拍つ人」として登場し、童話「風野又三郎」では、木村栄と思われる人物が、「木村博士は痩せて眼のキョロキョロした人だけども僕はまあ好きだねえ、それに非常にテニスがうまいんだよ」として登場し、スポーツすべてを嫌ってはいなかったように思う。しかし、賢治がスポーツの楽しさやスポーツによる人間性の向上といったことに重きを置いていたという記録は見当たらない。

逆に昭和二年七月に書かれた「稲作挿話（未定稿）」では、「これからの本統の勉強はねえ／テニスをしながら商売の先生から／義理で教はることでないんだ」とあり、童話「ポラーノの広場」でも、最終的には削除されたキユーストの演説の中に、「町の学生たちは仕事に勉強はしてゐる。けれども何のために勉強してゐるかもう忘れてゐる。そしてテニスだのランニングも必要だと云つて盛んにやつてゐる。諸君はテニスだの野球の競争だなんてことは

やらない。けれどももうやりすぎるくらゐやつてゐる」とある。

また、「自分を外のものとくらべることが一番はずかしいことになつてゐるんだ」（「風野又三郎」）、「必ず比較をされなければならぬいままの学童たちの内奥からの反響です」（「どんぐりと山猫」説明文）なども書いているから、余計な体力を使って、他人との競争に明け暮れることを奨励したとは考えにくい。賢治作品に於けるスポーツといえば、「けだもの運動会」の鉄棒ぶらさがり競争や「飢餓陣営」の生産体操くらいであろうか。

賢治は森荘己池に向つて次のように言つたとされている（「昭和六年七月七日の日記」『宮沢賢治の肖像』 津軽書房 昭和四十九年十月三十日）

労働と性欲と思索、思索と労働、こんなように二つづつならびうまい具合に調和すれば、まあ辛うじて成立しますね。肉体労働と精神労働それに性欲と、この三つを一度に生活のなかに成り立たせるといふことは、まずまずできません。

こんなことを考えていた賢治なので、なおさらスポーツをするこゝとになど、価値を見出していたとは思ひにくい。

稗貫農学校には狭い敷地の中にテニスコートが一面あり、移転して花巻農学校と改称されてからも、移転した年の「六月には養蚕室の前に生徒の自主的作業でテニスコートが一面つくられ、生徒も先生も白球を追つて走りまわつた」という。しかし、「賢治はテニスに興ずるでもなく、実習が終るとサツサと職員室にひきあげて翌日の教材研究をすませると、自分の創作に取り掛かることが多かった」らしい（「楽しかったこの四ヶ年」『証言 宮沢賢治先生』 農山漁村文化協会 平成四年六月）。

中学時代の同級生であった阿部孝（「中学生の頃」『四次元100』 宮沢賢治研究会 昭和三十四年一月）は、

運動神経のぶさにかけては、いつもクラスの筆頭であった彼は、軍人あがりの体操教師のかつこうななぶり物であった。ねこぜでがにまたの彼の姿勢は、教練の度毎に、ばりさんぼうの的となつた。鉄棒や木馬など器械体操の時間には、しよつちゆう彼はまるで猫ににらまれた鼠のようにおどおどしていた。野球庭球、柔道剣道、その他もろもろのスポーツ体育にも、彼は一切縁がなかつた。ボールを投げる時の彼のかつこうは女の子そっくりだつた。

と書く。学校生活において、成績や素行が悪いことは、時に英雄化されて語られることもあるが、運動神経のなさについては、これは努力不足でもやる気不足でもないのに、徹底的に嘲笑され、面罵され、評価されることは決してない。したがって運動が苦手な者にとって、スポーツの時間とは、誠に居る場所もないくらいに憂鬱な、しかし、それについては誰も理解してくれないという不条理で陰惨なイジメの時間である。努力と才能は認められても、生まれつきの性質のために差別され、イジメられるという意味で、賢治はまさに童話「猫の事務所」のかま猫と同じ境遇にあつたのだ。

賢治が教員になつて間もない大正十年十二月に、賢治は友人の保阪嘉内に向つて「毎日学校へ出て居ります。何からすつかり下等になりました」。学校で文芸を主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。けむたがられて居ります。笑はれて居ります。授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。「といった手紙を書き送っている。これが直接テニスに由来するものであつたとは言えないにしても、こうした書簡を書いた時期と「冬のスケッチ」にメモを残した時期が近いことは確かである。いずれにせよ、賢治が赴任当初から天馬空を駆けるがごとくに自分の個性を発揮し、生徒たちもついてきたわけではないということは考えてみるべきであらうし、そうした心境から作品が

生まれた可能性についても考えてみてよいだろう。

「松の針」とタイトルのある文語詩の下書稿(一)をあげてみよう。

溶けてまばゆき松の針
ながれてとほき雪の風

人のテニスはいきどほろし

われの額ひたはいと高し

白金ハクキンの雲日をとりに

あきらけいかも松の針

わが手はけぶる砒硫の香

まなこはむなし銀河の黄

水銀の盤雲去りて

つやゝに奔れ松の針

やはりここにも憤りの対象はテニスだとしか書いていない。この後、下書稿(二)では、「病院主」とタイトルが付けられ、下書稿(三)では「M氏肖像」(「患の名簿を閲すれば」という一節がある)とタイトルが付けられ、虚構化が施されるが、基本的に下書稿(一)が圧縮されただけで、定稿の「肖像」と内容はほぼ同じである。

語注に書いたことの繰り返しになるが、定稿には、ただ「肖像」とあるだけなので、病院主やM氏のことを指しているのか、あるいは元の農学校教師である自分に近い存在を語ろうとしたのかはわからない。いずれにしろテニスに対して怒っているという点では同じである。

ところで阿部(前掲)は、こうも書いている。

彼は一面なかなかの不平家で憤慨屋でもあつた。他人の不愉快な態度にも、彼はすぐにぴんと反発して、蔭ではぶつぶつと不平をならべた。しかしどんなに他人の悪口を言い、蔭口をはく時でも、結局彼は自分を批判し、自分を反省し、自分を卑下す

ることを忘れなかつた。

テニスに興じる人々に対し、賢治は不平を述べ、憤る。しかし、結局、賢治はそこで世界の不条理ではなく、修羅である自分の方に意識を移している。その苦い自覚が、やがて農学校において「芝居やをどり」を認めさせるまでに精力を費やし、また、『春と修羅』や『注文の多い料理店』を生む原動力ともなったと考えることもできるかもしれない。

先行研究

榊昌子「宮沢賢治と小岩井農場」(『秋田県立西仙北高等学校紀要』)

要「秋田県立西仙北高等学校 平成九年四月」

吉本隆明A「孤独と風童」(『初期ノート』) 光文社文庫 平成十八年七月)

吉本隆明B「再び宮沢賢治の系譜について」(『初期ノート』) 光文社文庫 平成十八年七月)

20 暁眠

① 微けき霜のかけらもて、
街の燈の黄のひとつ、

西風ひばに鳴りくれば、
ふるえて弱く落ちんとす。

② そは瞳ゆらく翁^{をきなめん}面、
かのうらぶれの贖物師、

おもてとなして世をわたる、
木藤^{うづたけ}がかりの門なれや。

③ 写楽が雲母^{きんぼ}を揉み削^こげ、
春はちかしとしかすがに、

芭蕉の像にけぶりしつ、
雪の雲こそかぐるなれ。

④ ちいさきびやうや失ひし、

あかりまたたくこの門に、

あしたの風はとどろきて、 ひととはかなくなほ眠るらし。

大意

細かい霜のかけらをまじえて、西風が吹いてヒバをゴトゴトならし、街の黄色いあかりの一つが、弱々しくふるえていまにも落ちてしまいうさだ。

おだやかに瞳がゆれる翁面のように、おだやかな顔で生きてきた、あのうらぶれたインチキ師の名もある、木藤の仮住まいの門である。

写楽のピカピカとした雲母を揉んでこそぎ落したり、芭蕉の像をけむりでいぶしながら、春は近いというものの、雪を落とす雲は真黒である。

隣接する小さな病舎は失われて、あかりだけがまたたいているこの門だが、早朝の風が轟いても、木藤は静かに眠りについたままのようだ。

モチーフ

既に指摘があるように本作は「(冬のスケッチ)」を先行作品とし、花巻で新聞取次店を営んでいた斎藤宗次郎をモデルとしたものだと思われる。斎藤はキリスト教の信仰を貫いたために、町の人々に嫌われ、文字通りに石を投げられるような存在であったが、清廉で温和、雨風の日も新聞を配り続け、静かに信仰を貫いた人柄はいっしょか人々に愛されるようになったという。賢治も宗教の違いを越えて、斎藤を慕い、尊敬していたようだ。そんな斎藤を「贖物師」と呼ぶのは、辛辣であるようにも思えるが、当時、天

才的な浮世絵修復師のことが話題になっていたことなどを考えれば、ここでは反社会的な人間であるという意味ではなく、世の中に理解されない芸術家といったニュアンスであろうと思う。また、「一百篇」の「翁面 おもてとなして世経るなど」には共通する詩句があるが、こちらは賢治自身が自分の人生を振り返っているものである。自分の人生と斎藤の人生を二重映しにした面もあるようだ。

語注

翁面 をきなめん 能面の一つ。ひげをはやして笑みを浮かべた老人の面。

不老長寿などを願った初期の猿楽にもあったと言われる。神が老人の姿で舞った姿ともされ、ご神体とする神社も多い。「二百篇」の「翁面 おもてとなして世経るなど」でも、同じフレーズが用いられている。

贋物師 いかに にせものを作ったり、売ったりして儲けようとする詐欺師のこと。明治から大正にかけて活躍した天才的浮世絵師に高見沢遠治があり、歌麿や写楽を超人的な技巧で修復した。浮世絵のコレクターとしても知られる建築家のフランク・ロイド・ライトは、高見沢の手によるものと知らずに手に入れたことがあり、激怒したという。問題があったのは画商であって高見沢ではなかったが、修復の是非は当時の浮世絵協会を二分し、結局、高見沢は修復から手を引いて、浮世絵の複製に専念することになった。大正十四年には浮世絵の複製について時の東大教授で浮世絵研究者だった藤懸静也との間で論争したこともあったが、その藤懸に「高見沢が入念に作ったものは真物か、贋物か鑑別がつかない」と脱帽させるほどの腕前であったらしい（高見沢たか子『ある浮世絵師の遺産 高見沢遠治おぼえ書』東京書籍 昭和五十三年七月）。同時代の浮世絵愛好家だった賢治なら、一連の事件についても知っていたはずだ。贋物師というと、人を騙す反社会的な存在であるはずなのに、文語詩では

特に批判的な描かれ方がされていないのは、賢治の頭の中に、高見沢をはじめとした浮世絵の修復家や複製家がイメージされており、彼らが世間からは蔑まれ、誤解されながらも、浮世絵の美を後代に伝えようとした孤高の職人だと認識されていたからだと思われる。また、「二百篇」の「浮世絵」には、実在の人物であるプジェー神父が「にせの赤富士」を点検するという作品がある。

木藤がかりの門

『定本語彙辞典』に「木藤が、仮の門」とあるように、木藤という人物が仮の住まいにしている家の門のことだろう。木藤とあるのは、栗原敦（斎藤宗次郎『二荊自叙伝』解題）『二荊自叙伝』岩波書店 平成十七年六月）らが指摘するように、本作の先行作品である「冬のスケッチ」第十九葉に「贋物師、加藤宗二郎」とある斎藤宗次郎であろう。斎藤↓加藤↓木藤という変遷を遂げていることになる。

写楽が雲母

寛政年間の一年足らずの間に百四十ほどの絵を残して消息を絶った天才浮世絵師・東洲斎写楽は、役者大首絵に背地に雲母を塗ってキラキラとした光沢を出す「雲母擦り」をよく用いた。賢治の父・政次郎や賢治、そして本作のモデルとされる斎藤宗次郎とも交流のあった浄土真宗の僧で仏教学者だった暁烏敏のコレクション（金沢大学の暁烏文庫）には、「巨匠写楽」と表書きされた化粧箱に収められた十五枚の浮世絵があり、これは高見沢遠治が大正中期に制作したものであったという

（「暁烏文庫から見つかった謎の浮世絵」『こだち176』金沢大学付属図書館報「こだま」平成二十四年一月）。このあたりの事情についても賢治が知っていた可能性があり、もしかしたら本作の成立とも関わりがあるのかもしれない。

しかすがに

副詞の「シカ」に動詞「ス」、助詞の「ガニ」が付いたもの。万葉時代によく使われた語。「そうはいうものの」の意味。『岩波古語辞典』によれば「シカは然。スは有りの意の古語。ガは所の意。アリカの力の転。ニは助詞。平安時代以降、サス

ガニとなる」とのこと。

びやうや 『定本語彙辞典』には「びやう」として、「小さな鉾がとれたか、の意。鉾は頭を大きくした釘の意で、画鉾と言うが、ここでは街燈（灯）の金具の鉾であろう」とある。が、病舎のことかもしれない。というのも、モデルとなった齋藤宗次郎の家の庭続きには折居医院（「二百篇」の「医院」のモデル候補で、神農の掛軸があつたと言われる）があり、その病棟のことかもしれないが、外側から屏風は見えない。「廟」や「苗」かもしれないが、旧かな表記すると「べう」となってしまう。ただ、齋藤はトマトやイチゴの栽培をしたともいわれるので、苗舎、苗屋の意味で、これを用いた可能性もある。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」第十九葉を元にした下書稿(一)（タイトルは「朝」、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(二)、その裏面上部に書かれた下書稿(三)（タイトルは「贖物師」、鉛筆で⑤）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。『新校本全集』には、「歌稿〔A〕〔B〕」280、「歌稿〔B〕」280^a281には、すでに本篇の題材の一部が含まれている」とある。また、「二百篇」の「〔翁面 おもてとなして世経るなど〕」には、「翁面 おもてとなして世経るなど」という、本作と同じ詩句がある。まず「〔冬のスケッチ〕」第十九葉から見ていきたい。

※ 朝

みちにはかたきしもしきて
きたかぜ檜葉をならしたり
贖物師、加藤宗二郎の門口に
まことの祈りのこゑきこゆ

栗原敦（「齋藤宗次郎『二荊自叙伝』解題」『二荊自叙伝』岩

波書店 平成十七年六月）が言うように、この「加藤」は、花巻で新聞取次店を営んだ齋藤宗次郎がモデルだったように思う。

齋藤は明治十年二月に東和賀郡笹間村（現・花巻市）で曹洞宗の住職・轟木東林とさだ（旧姓・齋藤）の三男として生まれた。十四歳の時に母方の齋藤家の養子となり、十六歳で稗貫高等小学校を卒業し、十七歳で岩手県尋常師範学校に進学。二十一歳で同校を卒業すると、稗貫郡里川口小学校の訓導となった。内村鑑三の著書からキリスト教に接近し、明治三十三年、二十三歳の時に受洗。イエスの荊を再び負うという意味から「二荊」を号とする。キリスト教信仰から実父・実兄から絶縁状を突き付けられ、小学校でもキリスト教の信仰を貫こうとしたために忌避され、石を投げられることもあったという。日本とロシアの関係が悪化すると、兵役と納税を拒否すると決意するが、師である内村鑑三の説得によつてこれを収めた。明治三十七年、二十七歳の時に小学校を依願退職してイチゴ栽培を開始。翌年、内村との相談もあつて書籍雑誌商店・求康堂を開店。明治四十三年に新聞取次も始めた。反骨精神と共に清廉潔白な生き方は賢治をはじめ多くの人に敬愛され、例えば里川口小学校で先輩教員であつた後の湯口村村長・阿部晃は、自らの浄土真宗に対する信仰もあつて、はじめは齋藤を激しく攻撃したが、大正十五年に齋藤が内村に招かれて花巻を引き払う際には慰労会を催すほどに敬愛するようになっていた。

齋藤は賢治との間で、「二人互の信仰に就て語つたことの一回も無かつた」と回想する一方、賢治が大正十年一月に家出上京する直前に齋藤を訪ねて「田中智学の人物と其活動に就て問わるる」（「懐かしき親好」『四次元12』宮沢賢治友の会 昭和二十五年十月）こともあつたという。齋藤は佐藤泰正にあてた書簡の中で「自身の率直な考えを述べ、それは純一なる宗教人として欠くるところあるを端的に語つたものであり、賢治は深く諒するところがあつたという」（「宮沢賢治とキリスト教」内村鑑三・齋藤宗次

郎にふれつつ」『佐藤泰正著作集⑥ 宮沢賢治論』翰林書房 昭和六十一年五月)。斎藤の残した文章や『二荊自叙伝』には、宗教論を戦わせたといった記述が見えないことから、相互の宗教を尊重し合いながらの交流があったようである。斎藤は農学校に賢治を訪ね、ともにベーターペンなどのレコードを聴いたり、園芸について語り合ったり、賢治は宗次郎に詩を朗読し、また学校劇への招待も行っている。「雨ニモマケズ」が斎藤をモデルにしていると言われることもあるが、にわかには賛成しがたいものの、敬愛する人物の一人であったことには違いあるまい。

小林俊子(「宮沢賢治の文語詩における八風Vの意味 第二章 その1」 <http://ce9.easymweb.jp/member/michia/> 平成二十四年十月十五日)は、「宗次郎の裏の一面も近年発掘されていて、地元の身近な人の評価はまた別であったかもしれない」とし、「この詩で描きたかったのは、かつては親交のあったものへの、絶望の気持ちかもしれない」とするが、おそらくはそうしたマイナス面も含めて、賢治は斎藤宗次郎を、人々から「贖物師」と揶揄されながらも、簡素な生活を送り、静かに「まことの祈り」を捧げている人物として取り上げたのではないかと思う。ただ、斎藤が贖物の浮世絵等売っていたという話はないので、なぜここで「贖物師」が出てきたのかはわからない。「大正五年三月より」としてまとめられた短歌にも斎藤宗次郎をモデルにしたと思われるものがあり、「歌稿〔B〕」から引用すれば次のとおりである。

280 さわやかに／朝のいのりの鐘鳴れと／ねがひて過ぎぬ／
君が教会
280 a プジェー師よ／かのにせものの赤富士を／稲田宗二や
281 持ち行きしとか

ただ 280 a 281 は、「歌稿〔B〕」が成立して時間がたってからの書入

れであり、また、大正五年は盛岡高等農林時代で、まだ斎藤との交流もあまり深くなかったと思われるため、「〔冬のスケッチ〕」の先行作品ということでもないように思われる。

それにしても「一百篇」では、「岩手公園」でタッピング一家、「けむりは時に丘丘の」でミス・ギフォード、「浮世絵」ではプジェー神父というように、「五十篇」には登場しなかったキリスト教徒たちが多く登場し、「五十篇」よりも扱う範囲が広がっている感じがする。いずれにも非難の調子は読み取りにくいだが、賢治の文語詩は、自分自身の生活や心情などを描くよりも、岩手に生きる様々な人を描いた人間カタログの趣があるので、そのためであるのかもしれない。

ただ、斎藤宗次郎は、ただキリスト教の信者であったというだけでなく、「幼少の頃から禅宗の門に育ち、毎朝未明から父の法衣の袖に身を蔽われて、般若心経・観音経・学道要心集などを耳にし、自然に大聖釈尊を拝し道元を敬うようにな」(斎藤 前掲)り、キリスト教を奉じるようになってからも日蓮を敬愛したという。また、斎藤は洋画家で書家でもあった中村不折(今もその字は「新宿中村屋」の看板や清酒の「真澄」、「日本盛」、また「神州一味噌」のラベルなどに使われている)や日本画家の小川芋銭との交流もあり、そうしたことをふまえて考えてみれば、「木藤」を浮世絵に関わりのある人間として描いた背景も見えてくるように思う。

しかし、賢治自身がモデルだという見方もできるかもしれない。賢治の実妹である岩田しげ(「思い出の記」 「宮沢賢治全集第六巻 月報9」 筑摩書房 昭和三十一年十二月)がこんなことを書いているからだ。

浮世絵を好きになつた頃の兄が、どこから持つて来るのか、古い汚いのや破れたのや変なのを見つけ来て来る様になりました。それを水に漬けたり薬をかけて見たり、今度は新しい複製を東

京から買つて来て、油煙をとかした水に漬けて寂さびをつけたり、雲母きららを糊でつけて見たりしている楽しさうな日がありました。そのうちにどうして分るのでしようか、どう見ても人柄の良くなさそうな、町とも在ともつかない様な人が何人か兄を訪ねて来る様になりました。

そして、かねてから「これはいいものだよ。」と云つていた様な浮世絵と、汚ないつまらない様に見えるものを取換えて行く事が度々ありました。今日もまた騙しに来たなど憤つておりますと、果してボロボロの紙切れを持つた兄がニコニコ機嫌よく笑つて、「おこるな、おこるな。今の人は随分ずるそうには見えるけれども、ほんとうは人がいいんだよ。何とか得をしよう、俺の顔色をチラツチラツと見るのが、どうもあんまり気の毒だったから、いいのも悪いのもみんな交ぜて、好きなものを取つて下さい、と云つたらすつかり喜んで了つて、これでもいいかと複製のなんか取つているんだよ。」

そんならこれも添えて上げましようと言つたら、びつくりしてしまつて、ほんとか、ほんとか、とあんまり嬉しくて笑いだいのを止めるのに困つて居たもな、あの人のあんなに人のいい顔を見たら、お前だつてどんないいのをやつたつて、一向惜しくなくなるだろう。」と、兄こそ腹の底から嬉しくてたまらない様に笑つたものでした。しかし私は、そんなに損なことをしてと、兄が気の毒でたまりませんでした。

童話「どんぐりと山猫」で、山猫の馬車別当が小学生の一郎にお世辞を言われて喜ぶシーンを彷彿させるエピソードだが、「写楽が雲母を揉み削げ、芭蕉の像にけぶりしつ」というのが、まさに賢治がやっていたことであるから、斎藤を描いていながらも、本作における斎藤には、実際の賢治の経験も重ねられているとすべきだろう。

また、鈴木健司「童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐつて

発行者・近森善一の談をもとに」(宮沢賢治という現象 読みと受容への試論) 蒼丘書林 平成十四年五月)は、盛岡高等農林学校の後輩にして『注文の多い料理店』の発行者である近森が、「浮世絵をね。あれをうんと集めてきてね。どうして集めたかというと、親父がどうしたこうしたと言つて、やつぱり、お父さんの関係で買ったものだと思うが。すすけて真つ黒になつてゐるわね。そんなものを何とかお父さんが、あいつを洗つてきれいにし、何とかこう、まあ本当はあんなことしたらいかんのだけれど、水洗といつてね、そんなことをして商売もしていたように思う。」

「あれは商売だった。「商売におやじさんが集めて来る」と言つたように思う」などと語つていたことを紹介している。

賢治自身が本作のモデルとなつてゐる可能性といえ、「二百篇」の「翁面 おもてとなして世経るなど」との語句の一致も気になる処である。これは、下書稿(一)に「自嘲」というタイトル案が付されたことからわかるとおり、文語詩制作当時の賢治の心境を描いたと思われる作品だが、文語詩の一般的な傾向として、賢治自身を語るような語句が省かれることがよく指摘されるのに、そうした指摘を全くひっくり返してしまうような、珍しい作品である。定稿は次のとおり。

翁面、 おもてとなして世経るなど、 ひとをあざみしそのひまに、
やみほゝけたれつかれたれ、 われは三十ちをなかばにて、
緊那羅面とはなりにけらしな。

『新校本全集』には、「冒頭の詩句は文語詩「曉眠」第二連を承けて書かれてゐる」とあり、山口遼子(「賢治「文語詩篇定稿」の成立」「大谷女子大学紀要2012」大谷女子大学志学会 昭和六十一年一月)も、「賢治が自己凝視の心を贖物師の姿に託したと思える」と、どちらもあつさりと言つて書くのみだが、賢治自身の視点が

第三者のそれに変わることはよくあることだとしても、同じ「百篇」の中に、同じ詩句を使った自分を視点人物としたもの（「翁面 おもてとなして世経るなど」）と第三者を視点人物にしたもの（「晝眠」）の二作があるのは珍しいと思う。しかも、一方では「自嘲」として「翁面」をかぶって生きることを浅ましいことのように描きながら、もう一方では自分を押し殺して清廉潔白に生きることを称揚しているように思えるのも、どう解釈したらよいのか迷うところである。

本作が斎藤宗次郎（あるいは似た生き方をした人物）を称揚するものだという点については確かだとしても、右に書いたことかからずれば、やはり信仰を重んじ、羅須地人協会の試みなどでは、「贖物師」のような扱いを受けた賢治自身の「自嘲」も、本作には紛れこんでいるとするのが妥当であるように思う。

それにしても、翁面を付けたように生きていく者の生について、肯定的なのか否定的なのか、あるいは斎藤と自分のどちらか一方のみを良しとし、他方を悪しとするものだったのか等については、もう少し時間をかけて考える必要があるように思う。

先行研究

島田隆輔「原詩集の輪郭」（『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク△写稿▽による過程』〔未刊行〕 平成二十二年六月）

21 日千俣

① 雲の鎖やむら立ちや、
鳥はさながら禍津日を、
森はた森のしろけむり、
はなるとばかり群れ去りぬ。

② 野を野のかぎり旱割れ田の、
術をもしらに家長たち、
白き空穂のなかにして、
むなしく風をみまもりぬ。

大意

雲が鎖のようにつながって立ち、森から森に白いけむりがたなびいている、
鳥はまるで災厄の神から、逃れたいとでもいうように群れだつて飛び去っていく。

野は見渡す限り日割れした田が続き、実の入っていない白い穂の中で、
なしうる手段もしらない農家の家長たちは、ただむなしく風を見守っているばかりである。

モチーフ

東北地方の農村は絶えず自然災害に脅かされていたが、大正末年には早害が続き、花巻農学校の教員だった賢治も、実習水田地の水ひきのために夜通し樋番をする日もあった。本作では、妖しい雲の動きや鳥の飛び方から、人々に災厄をもたらす超自然の存在としての神（＝禍津日）が静かに、不気味に描かれ、人間は自然災害に対して全く無力なまま、ただ風を見守るのみだともいうようである。

語注

早俣 日照りで作物が育たないこと。『大漢和辞典』に『北史』の用例が載っている。『定本語彙辞典』は、「禍津日」、「旱割れ田」、「白き空穂（↓うつぼ）」「術をも知らに」（なすすべも知らず）といった絶望的なイメージが並んでいる」とする。

禍津日 日本神話にみえる神の名で「まがつび」と読む。マガはよくないこと、ツは助詞で「の」の意味。ヒは神霊を示す。古

事記や日本書紀によれば、伊弉諾尊が黄泉国のけがれを清めるための禊をした際に生まれたとされる。凶事を引き起こす神とされるが、後にこの神を祀ることで災厄から逃れられると考えられるようになり、厄除けの守護神として信仰されるようになった。『定本語彙辞典』によれば、早魃の「魃」とは、漢籍によれば早の鬼神を指すのだともいう。奥山文幸（後掲）は、先行作品「三一 昏い秋 一九二四、一〇、四」の制作日付が「銀河鉄道の夜」との関連が指摘される「北いつぱいの星ぞらに」「薙露青」などの制作日とも近いことから、妹トシの死が影響している可能性を指摘する。そして本作「早儉」についても、「死んでしまった最愛の妻イザナミを黄泉の国に尋ねていくイザナキを、死後のとし子との通信を求めようとした兄賢治に重ねるのは深読みに過ぎるかもしれないが。しかし、「禍津日」の三文字は、黄泉の国から逃げ帰ったイザナキのイメージを呼び出さずにはいない」とする。たしかに先行作品の制作時に妹の死が影響していた可能性については考えておくべきかもしれないが、晩年の文語詩にまで影響を及ぼしていたかどうかとなると判断は難しい。というのも、「まがつび」（あるいは禍津日）の語は、本作の他にも、「百篇」の「みちべの苔にまどろめば」、「日本球根商會が」に登場しており、本作における「禍津日」と同じように、これらの詩篇にも妹の死を関与させるのは難しいように思うからだ。

早割れ田 日照りによって水が枯れ、表面の土が割れた田のこと。

白き空穂 稲が結実せずに穂だけになったもののこと。

評釈

黄野（220行）詩稿用紙に書かれた口語詩「三一 昏い秋 一九二四、一〇、四」の下書稿(三)の上に書きつけられたが、冒頭と末尾が破棄されたために断片となっている下書稿(一)（断片）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(二)（「早儉」のタイトル）

鉛筆で⑤、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。定稿における丸番号①は、文字の書かれる一行前の行頭に付されている。先行作品は「春と修羅 第二集」所収の「三一 昏い秋」。

まず、先行作品である口語詩「三一 昏い秋」の下書稿(二)を示そう。

雲の鎖やむら立ちや
また木醋をそらが充てたり
はかない悔いを湛えたり
黒塚森の一群が
風の向ふにけむりを吐けば
そんなつめたい白い火むらは
北いつぱいに飛んでゐる

……あ(以下不明)
(二行不明)

(十数字不明)ある……

最後のわびしい望みも消えて
楊は堅いブリキにかはり
たいていの潤葉樹のへりも
(約二字不明)れた雨に黄いろにされる

……いったい鳥は避難でもするつもりだらうか
群になったり大きなやつらは一疋づつ
せわしく南へ渡って行く……

雲の鎖やむら立ちや
白いうつぼの稲田にたつて
ひとは幽霊写真のやうに
ぼんやりとして風を見送る

奥山文幸（後掲）は、「三一 昏い秋」の制作時は妹トシの死か

ら日もたたず、「銀河鉄道の夜」の第一次稿の構想を練っている最中だったことから関連を見出そうとするが、晩年の文語詩作成の最中にまでそれが及んでいたとは考えにくい。「禍津日」の三文字は、黄泉の国から逃げ帰ったイザナキのイメージを呼び出さずにはいない」と言うが、「二百篇」にこの語は三回もちいられていることを思うと、この作における「禍津日」ばかりを特別視するのも問題があるかと思う。

さて、東北の農村において旱魃は冷害とともに大きな災厄であり、避けては通れない大問題であった。取材年である大正十三年は、日照りが四十日ほど続き、旱害のために畑作は五割減収だったという。

岩手県は大正十三年の旱害に続いて、大正十四年にも日照りが続き、賢治は「二五八 濁水と座禅 一九二五、六、一二、」で、次のように書いている。

夜どほしの蛙の声のまま
ねむくわびしい朝間になった
さうして今日も雨はふらず
みんなはあっちにもこっちにも
植えたばかりの田のくろを
じつとうごかず座ってゐて
めいめい同じ公案を
これで二昼夜商量する

早になると自分の田になるだけ多く水を引き込もうとして水喧嘩がよく起こったというが、賢治も農学校の実習水田地のために、夜通し「樋番」をした。散文「或る農学生の日誌」にも、こうした体験が生かされているようで、「一千九百二十六年三月廿（二文字分空白）日」の章には次のようにある。

今年こそきつといふのだ。あんなひどい旱魃が二年続いたことさへいままでの気象の統計にはなかったといふくらゐなもの、どんな偶然が集ったって今年まで続くなつてことはない筈だ。気候さへあたり前だったら今年に僕はきつといままでの旱魃の損害を恢復して見せる。

「今年まで続くなつてことはない」と書かれているが、旱魃は三年目の大正十五年にも起こり、「水が来なくなつて下田の代掻ができなくなつてから今日で恰度十二日雨が降らない」（一千九百二十六年六月十四日）という状況に見舞われ、この後、水どろぼうにまで遭うことになる。

昭和七年に発表された「グスコブドリの伝記」にも、次のような箇所がある。

植多付けの頃からさつぱり雨が降らなかつたために、水路は乾いてしまひ、沼にはひびが入つて、秋のとりいれはやつと冬ぢゆう食べるくらゐでした。来年こそと思つてゐましたが、次の年もまた同じやうなひでりでした。それから、来年こそ来年こそと思ひながら、ブドリの主人は、だんだんこやしを入れることができなくなり、馬も売り、沼はたけもだんだん売つてしまつたのでした。

たしかに「ヒデリに不作なし」や「旱魃に飢饉なし」といった言い伝えもあり、賢治自身も「旱魃なら何でもないが、寒さとなると仕方ない」（「グスコブドリの伝記」）と作中でクーパー大博士に言わせてもいるが、例えば昭和二年一月九日の「岩手日報」には、「紫波地方昨夏の旱魃は古老の言にもいまだ聞かざる程度のものであつた水田は全く変じて荒野と化し農村の人たちはたゞ天を仰いで長大息するのみであつた」とあり、「弁当をもたづにくるものが十二三人あり三年以上五百五十人中八十九人は弁当をもた

ずに来て昼の休み時間は他人の弁当を食べてゐるのを見かねて屋外で遊んで居る姿は実際可愛想です、弁当を持つてきても夫々見られるのがいやで新聞紙の中に顔を埋づめる様にして時々周囲の眼を見渡しながらマルデ盗んだものでもたべてる風にして居」たのだという(224 未曾有の紫波の早害) 『宮沢賢治の里より』
<http://blog.goo.ne.jp/suzukikeimori/> 平成二十二年四月一日)。賢治にもそうしたようなインパクトを与える事件であつたように思われるが、昭和三十六年になつて豊沢ダムができるまで、この地方には早害が続いたのだという(栗原敦 「理念と現実①」 『NHKカルチャーアワー 文学探訪 宮沢賢治』 日本放送出版協会 平成十七年十月)。

ところで、「五十篇」と「一百篇」が扱うテーマ、頻出する語句に違いがあることについてはこれまでに何度か書いてきたとおりで、早害については「五十篇」において、少なくとも定稿には残っていないが(例えば「五十篇」の「水と濃きなだれの風や」の下書稿(一)には「ひでり」の語がある)、「一百篇」では本作をはじめ、「早害地帯」、「朝」等に早害が登場している。

また、「一百篇」の「みちべの苔にまどろめば」の評釈でも書いたとおり、「五十篇」には登場しない「まがつび」の語が、「日本球根商會が」をも含めた三篇に登場しているのも気になるところだ。

「五十篇」の定稿を書き終わつてから「一百篇」をまとめるまでのわずか一週間ほどの間に、大きな思想的な変化があつたとは思えない。また、賢治が急に日本の神話に興味を持ち始めたとも考えにくい。ただ「鳥はさながら禍津日を、 はなるとばかり群れ去りぬ。」といった言葉には、超自然的なもの影があり、「術をもしらに家長たち、 むなしく風をみまもりぬ。」という言葉の裏にも、やはり人間たちにはもはやなすすべがなく、超自然的な存在に期待が寄せられているように読める。奇しくも先行作品の口語詩「三十一 昏い秋」には、「幽霊写真」の語(今日でいう心

霊写真)が登場していることから、ここではただ早を迎えた農村を描いているだけでなく、この世界を超越した存在に頼らざるを得ない人間の限界を描いているようにも思える。

先にもあげたブログ「宮沢賢治の里より」(223 紫波の農民の苦闘と苦悩) <http://blog.goo.ne.jp/suzukikeimori/> 平成二十二年三月三十一日)では、大正十五年七月十三日の「岩手日報」に「果しなくつゞく旱天に禍ひされた紫波郡民は天神のいかりを和ぐるため今十三日午後十時から同十一時まで翌十四日午前二時から同三時まで県社志和イナリ神社に於て伊勢外宮の五穀豊穰祈願の古式に則り、莊嚴に雨乞ひ祈禱をすることになつた」との記事コピーをあげているから、そんな農民たちの意識をそのまま書いているのかもしれない。

昭和六年十一月三日、「雨ニモマケズ」に「ヒデリノトキハナミダヲナガシ」という言葉を書き付けた際、賢治の脳裏には大正末年の早害があつたと思われるが、早に對しては「ナミダヲナガすこと、そして「雨ニモマケズ」の末尾に南無妙法蓮華經と共に諸菩薩の名前を書くことしかできなかった。いざという時には神仏頼みなのかと憎まれ口をたたくこともできようが、賢治にしてみれば、自らの「慢」を自覚し、人間が大自然に對して謙虚に接し、神仏にむけて祈ることを書くのは、単純に敗北宣言であると思ふことは出来ないように思うのである。

先行研究

奥山文幸 「八幽霊写真Vというフレーム 「春と修羅」第二集と「銀河鉄道の夜」(『日本文学』51-11) 日本文学協会 平成十四年十一月)

榊昌子 「転生する風景」(『宮沢賢治「春と修羅」第二集」の風景』無明舎出版 平成十六年二月)

22 「老いては冬の孔雀を守る」

①老いては冬の孔雀を守る、
園の広場の午後二時は、
蒲の脛巾はばきとかはごろも、
湯管のむせびたゞほのか。

②あるひはくらみまた燃えて、
さは遠からぬ雲影の、
降りくる雪の縞なすは、
日を越し行くに外ならず。

大意

年をとっては冬の動物園で孔雀を守る係となった男は、蒲の脚絆と皮のコートを身に付けて、動物園の広場の午後二時は、湯の通る管がかすかに音を立てるのみ。

ある場所は日差しが暗くまたある場所は燃えて、雪は縞のように見えているが、遠からぬところにある雲が、陽光をさえぎっているからに他ならない。

モチーフ

花巻温泉のクジャクの世話を、雪の降る中でしているという老人を描いた詩。「五十篇」の「毘沙門の堂は古びて」にも、胸を病んだために役場を辞めて毘沙門堂の堂守になった人物を描いた詩があり、共通する部分が多い。ただ、「毘沙門の堂は古びて」では肺病のために宗教施設で働いているのに対し、本作では老齢のために温泉で働いている。しかも南国の鳥であるクジャクを雪の降る中を檻に閉じ込めている。そして花巻温泉といえど、日本一を獲得したレジャーランドでもあるが、たくさんの「うたひめ」が働いていた大歓楽街でもあった。ただ、この老人にしても「うたひめ」にしても、生活のために働いているわけであり、彼ら

批判することはできない。第二連では、光と雲との動きが、ただ描写されるのみだが、積極的には何もできないというイメージを印象付けるためなのかもしれない。

語注

孔雀 クジャクはキジ科の大型鳥類。インドや東南アジアなどに生息する。オスの長い上尾筒は、先端に目玉のような模様があり光沢のある美しいもので、求愛のディスプレイの際などに広げられる。仏教ではこの美しいクジャクが毒蛇を食べるといふことから神格化され、密教においては孔雀明王を本尊として除災・祈雨を願った。賢治はその美しさと共に、仏典からの知識からクジャクを多くの作品で幻想的に使い、たとえば童話「インドラの網」では、「インドラの網のむかふ、数しらず鳴りわたる天鼓のかなたに空一ぱいの不思議な大きな蒼い孔雀が宝石製の尾ばねをひろげかすかにクウクウ鳴きました。その孔雀はたしかに空には居りました。けれども少しも見えなかったのです。たしかに鳴いて居りました。けれども少しも聞えなかったのです」とあり、『春と修羅（第一集）』の「序」では「みんなは二千年ぐらゐ前には／青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ」と書いている。花巻温泉の水禽園では、ペリカン、鷹、フクロウ、七面鳥、ホロホロ鳥、コウノトリなどと共にクジャクも飼われており、賢治はここをイメージしながら本作を作っているものと思われる。「守る」は、音数の関係から「もる」と読ませたかったのだろう。

蒲の脛巾 蒲の葉で編んだすねあてのこと。脚絆きまはん。旅行や作業の際に脛にまきつけ、ひもで結んで用いる。

湯管 花巻温泉は一大レジャーセンターとして日本中にその名を知られていたが、湯はさらに奥まった台温泉から引いていた。ここでは、その湯を通す管の音のことを指すのだろう。

評釈

黄野(260行)詩稿用紙に書かれた下書稿(タイトルは「幻想」↓「幻」↓「幻想」↓「断片」↓「老蘇」と変遷し、書入れ段階で「園丁」。右肩に赤インクで①、中央に鉛筆で②)と定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。

先行作品は指摘されていないが、『新校本全集5』に収められている口語詩「冗語」には舞台となった花巻温泉とともに水禽園のクジャクも登場することから、広い意味での関連作品だと言えるように思う。

また降ってくる

コキヤや羽衣甘藍、

植えるのはあとだ

堆肥を埋めてしまってくれ

啼いてる啼いてる

水禽園で、

頭の上に雲の来るのが嬉しいらしい

孔雀もまじって鳴いてゐる

北緯三十九度六月十日の孔雀だな

ははは 熊熊の堆肥

かういふものをこさえたのは

恐らく日本できみ一人

どういふカンナが咲くかなあ

何だあ 雨が来るでもないぞ

羽山で降って

滝から奥へ外れたのか

電車が着いて

イムバネスだの

ぞろぞろあるく

光の加減で

みんなずるぶん人相がわるい

さあこんどこそいよいよくるぞ

南がまるでまっ白だ

胆沢の方の地平線が

西はんぶんを消されてゐる

おゝい堆肥をはやく、

ぬれてしまふととても始末が悪いから

栗の林がざあざあ鳴る

風だけでない

東をまはって降ってきた

また、花巻共立病院長・佐藤隆房(発句)との連句も、花巻温泉での経験から作られたもののように、ここで「水禽園の鳥」と書かれているのも、孔雀であったかもしれない。

(湯あがりの肌や羽山に初紅葉)

滝のこなたに邪魔な堂あり

或は、水禽園の鳥ひとしきり

文語詩の下書稿は、初期段階で次のようなものであった。

老いては過ぎし日を追はず

雪の岐山の山裾に

見上ぐるそらはいや白し

まのあたりあるひはくらく
またはあかるく織りなすは
雪のなかにて雲影の
日を越し行くに外ならず

富樫均（後掲）は、「花巻温泉らしき場も、孔雀のような生き物も全くあらわれ」ないとし、「岐山」（手入れ段階で「眉山」が何を意味するのかも分からないとしている。タイトル案にあった「老蘇」は「眉山」出身の学者のことだが、それが何を意味するのかも分からないという。ただ、花巻温泉の近くには「羽山」があり（「冗語」や連句にも登場する）、ここをイメージしながらそれらしい地名を作ったのではないかと思う。とすれば、「幻想」というタイトル案が取られたことから虚構が交っている可能性は高いにしても、下書稿の段階からずっと花巻温泉が頭にあつたと考えることもできそうだ。

この段階でモチーフとなつてゐるのは年老いた男が、雪の降る花巻温泉で働いていたといふことのようなのだ。「五十篇」には「毘沙門の堂は古びて」があり、こちらでは肺病のために役所勤めをやめ、「孔雀」ではなく「毘沙門堂」を守つてゐるといふ男が登場している。

① 毘沙門の堂は古びて、
胸疾みてつかさをやめし、
梨白く花咲きちれば、
堂守の眼やさしき。

② 中ぞらにうかべる雲の、
川水はすべりてくらく、
蓋やまた椀まじのさまなる、
草火のみほのに燃えたれ。

どちらも転職した男性についての詩だが、「〔毘沙門の堂は古びて〕」は肺病のために公的機関での仕事から宗教施設で働くことになつたわけであり、幾分か賢治自身の生涯に重なるところがある。しかし、「老いては冬の孔雀守る」だと、おそらくは元は農民で、学歴も不確か、仕事の場所も遊興施設だということであり、賢治たち町に育つた人間の人生とは少々重ねにくい。

花巻温泉は、花巻駅から電車が通じ、動物園の他に、貸別荘や大弓場、室内遊技場、テニスコートなどを擁し、昭和二年に新聞社主催で行われた「日本新八景」なるコンテストで全国一位の栄冠を獲得するようない大リゾートであつた。ここには花巻農学校の卒業生・富手一がおり、賢治は花壇設計を依頼され、「南斜花壇」「日時計花壇」などを設計している。先にあげた口語詩「冗語」は、実際に花壇を作つてゐる時の作品だろう。

賢治はここを「賤舞の園」（「歳は世紀に會て見ぬ」）、「未定稿」と呼び、また「魔窟」（「二〇三三 悪意 一九二七、四、八」）、「春と修羅 第三集」とも呼んだ。

例えば「花巻温泉ニュース 創刊号」（昭和四年七月十五日）には、次のような記事が載つてゐる。

息づまる様な、モダンガールの汗臭い匂いから逃れて、山間のいで湯に一浴して一盞傾け乍ら、欲しいのは矢つ張り女だ。
湯女!! なんて古代名詞をつけるには、あまりにも現代化したにしろ、花巻温泉にも毎日何百人となく入り込むお客様方のために朝夕の御機嫌を奉仕する湯女が約七十人から居るこの七十何人かの湯女は大抵附近料理店の抱でお線香で各旅館へ送り込まれる。送り三本つなぎ二本で芸者は二円五〇銭、酌婦は一円五〇銭相場とある。

記事は続けて、富貴子（この温泉花柳界の主？至つて愛嬌ものゝ芸も相当に男を手玉に取る事も相当に上手）、京子（スポーツ芸者

の称あり。スキーよし、自転車オーライ。野球もつて来い、テニス御座れお負けに腹芸のチャンピオンとか鼻下長連御用心の事)、八重子(若い男から来る甘つたるい手紙は三度の飯よりも好き、若い男は尚更好き)を紹介している。

「詩ノート」の「一〇三四」 「ちぢれてすがすがしい雲の朝」
一九二七、四、八、に、賢治は「遊園地ちかくに立ちしに／
村のむすめらみな遊び女のすがたとかはりぬ／そのあるものは／
なかばなれるポーズをなし／あるものはほとんど完きかたちをな
せり」と書いているが、ただ温泉や遊園地があったというだけで
なく、そこは「賤舞の園」になつてしまつてゐるのだ。しかも、
いくら卒業生の依頼だからとはいえ、賢治自身も、その「賤舞の
園」の造営に加担してしまつており、賢治にとつての花巻温泉と
は、苦々しい思いなくしては語れない場所であつたと思われる。
では、そんな花巻温泉の動物園に飼われていた孔雀について、
賢治はどう思つていたのだろう。「未定稿」の「対酌」は、次のよ
うな作品である。

嘆きあひ 酌みかうひまに
灯はとぼり 雑木は昏れて
滝やまた 稜立つ巖や
雪あめの ひたに降りきぬ

「ただかしこ 淀むそらのみ
かくてわが ふるさとにこそ」
そのひとり かこちて哭けば
狸とも 眼はよぼみぬ

「すだけるは 孔雀ならずや
ああなんぞ 南の鳥を
ここにして 悲しましむる」

酒ふくみ ひとりも泣きぬ

いくたびか 鷹はすだきて
手拭は 雫をおとし
玻璃の戸の 山なみをたゞ
三月のみぞれば 翔けぬ

盛岡高等農林学校時代の友人・保阪嘉内は、卒業間際になつて賢治たちと活動していた同人誌「アザリア」に寄せた文章が問題となつたようで除名処分となつた。大明敦「保阪嘉内の生涯」
〔心友 宮沢賢治と保阪嘉内 花園農村の理想をかかげて〕山梨ふるさと文庫 平成十九年九月)によれば、「賢治は、嘉内を花巻の大沢温泉に誘つた。そこで志半ばで学校を追われ失意に暮れる友と盃を交わし」、その時に作られたのがこれなのだという。が、大沢温泉に孔雀はおらず、大正七年にはまだ花巻温泉のリゾート開発も進んでいなかったことから、原体験はあつたかもしれないが、フィクションの要素は強いと思われる。また、「東京」ノート」には、東京の上野動物園か浅草の花屋敷かで見つた「白孔雀」の様子が詳細に記されているので、舞台が東京であつた可能性もなくはない。が、いづれにしても気になるのは「ああなんぞ 南の鳥を／ここにして 悲しましむる」という箇所である。対酌してお互いの不幸を嘆きあい、涙を流しあつてゐるようだが、「三月のみぞれ」が降る中で、「南の鳥」である孔雀の運命も憐れまれているのだ。
檻の中で暮らす南国の鳥の哀れさと言えば、高村光太郎の「ぼるぼるな駝鳥」が頭に浮かぶ。

何が面白くて駝鳥を飼ふのだ。
動物園の四坪半のぬかるみの中では、
脚が大股過ぎるぢやないか。

頸があんまり長過ぎるぢやないか。

雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろ過ぎるぢやないか。

腹がへるから堅パンも食ふだらうが、

駝鳥の眼は遠くばかり見てゐるぢやないか。

身も世もない様に燃えてゐるぢやないか。

瑠璃色の風が今にも吹いて来るのを待ちかまへてゐるぢやないか。

あの小さな素朴な頭が無辺大の夢で逆まいてゐるぢやないか。

これはもう駝鳥ぢやないぢやないか。

人間よ、

もう止せ、こんな事は。

昭和三年三月に草野心平の「銅鑼14」に発表したものだ。賢治は「銅鑼」の四、十、十二、十三号に作品を発表しているから、光太郎のこの作品の載った十四号も手にしたはずである。さらに、賢治は大正十五年十二月に光太郎を訪問していると推定されていることから、敬愛していた光太郎のこの詩を読んでいたことはほぼ確実だ。いや、なにも賢治が光太郎の影響を受けたと言いたいわけではない。こうした感性が、大正期の詩人たちに共有されていたことを確認したいまでである。

さて、賢治には、美しい鳥が檻に入れられていることを悲しむ感受性があったということを書いたが、花巻温泉と言えば、美しい女性たちが囚われになつてゐる場所でもあった。「五十篇」の「萎花」の「評釈」(信時哲郎 『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」の評釈』朝文社 平成二十二年十二月)で、萎れた花に譬えられているのは花巻温泉で働く「うたひめ」たちであったのではないかと書いたが、本作における「孔雀」も、「うたひめ」のアナロジーであった可能性があるのではないだろうか。

赤田秀子(後掲)は「美の象徴としてのクジャク、天上の鳥としてのクジャクが地上に囚われて、雪降る行楽地の訪れる人もい

ないゲージのなかで、蒲の脛巾とかわごろもを着た老人に管理されているのである。さぞ孔雀も老人も冷たかろう。なんと浄土と遠い情景であろう」と書くが、富樫(後掲)は、雪の中にあつても孔雀は美しく、老人には憂いも悲しみもない。「最後のときを孔雀たちと共有しているようにみえる。むしろ、これほど豪華な老いの情景はないといつてもよいのではないだろうか」と書く。テクストを忠実に読めば、赤田のような、あるいはそれを逆転させた富樫のような読み方になるだろう。

しかし、賢治が選んだ言葉が、どのような意味、どのようなイメージで運用されていたのかまでも含めて検討しようとするならば、モデル地や時代状況といったテクスト外の情報もできるだけ活用する読み方もあつてよいだろう。とすれば、花巻温泉で美しい存在の象徴を檻の中に閉じ込め、それを守る人の詩であつたと読む道も開かれているのではないかと思う。

では、この老人を農村に巢食う悪者であるとして賢治が咎めようとしているのかと言うと、おそらくそうではない。雪の降る中を客引きのためのクジャクの世話(あるいは「うたひめ」の管理?)で生きていかなければならないというのは、必ずしも幸せな老後として描かれているわけではないだろう。

「五十篇」所収の「毘沙門の堂は古びて」における「堂守」は、役場勤めをしていたということから、そこそこに高学歴で高給取り。自然災害に一喜一憂することもなく生きてくることのできた町の人間である。「胸疾みて」早期退職せざるを得なかつたとはいえ、経済的にも恵まれていたために堂守になるという高潔な生き方ができたのだと言うこともできるかと思う。一方、孔雀守りの老人は、まず生活のために老齢であつても、肉体的に負担のある仕事をしなくてはならなかつたということと、とても高潔な仕事などを選んでゐる暇がなかつたということではないだろうか。花巻温泉で働いていたという「うたひめ」たちも、おそらく状況は似たようなものだったのだろう。老人が必ずしも動物が好き

で、その仕事をしているのではないだろうことと同じで、彼女らも「遊び」や「歌」が好きで「あそびめ」になっているわけではないと思われるからである。

読者には自身の想像力を最大限に生かしてテキストを読む自由がある。が、当時の東北の状況を念頭に置いたうえで読み直してみると、現代の読者には思いもよらない風景が見えてくることもあるように思う。

先行研究

赤田秀子「クジャク 天の鳥、地の鳥」『賢治鳥類学』新曜社
平成十年五月

富樫均「老いては冬の孔雀守る」『宮沢賢治 文語詩の森』柏
プラーノ 平成十一年六月

大角修「青い孔雀のものがたり」『宮沢賢治』の誕生』河出書
房新社 平成二十二年五月

23 七七 曲辰

①火雲むらがり翔べば、 そのまなこはばみてうつろ。

②火雲あつまり去れば、 麦の束遠く散り映ふ。

大意

真つ赤な雲が群がって飛ぶと、その眼は人を閉ざすように空ろなものとなる。

真つ赤な雲があつまって去っていくと、収穫の終わった麦の束が遠くに散在するのが映る。

モチーフ

本作は、賢治が盛岡中学校を卒業し、友人たちが進学する中を自分分は家業を継ぐために花巻に残り、岩手病院入院時の看護婦に対する失恋の傷も癒えない頃（大正三年初夏頃）の短歌に出発点があるが、改稿が進むにつれ、文語詩の通例どおり、第三者化されて描かれている。しかし、昭和七年六月には、再び自分を視点としたものに書き変えられ、定稿ではまた第三者化されている。自分を視点とした下書稿(A)への改作は、宛先不明の書簡下書きにしたためられたものだが、この書簡には岩手の農業に対する不安と、何もできない自分への諦めが書かれている。ただ、その諦めの念を文語詩に託したことを思えば、農村活動での失敗にかわるものとして文語詩を考えていた証拠ともなりそうだ。

語注

老農 大沢正善（後掲）は、『論語』に「弟子が「稼を学ばんと請」い孔子は「吾れ老農に如かず」と答え」たとあることをあげる。『世界大百科事典』には「農事に熟達し識見が優れた篤農のうち、とくに明治時代の全国的な指導者をいう」とあり、「著名な老農には、イネの品種改良や耕種改善に功のあった中村直三や奈良専二、勸農社を組織して馬耕教師と抱持立犁（かかえもちたちすき）を全国にひろめた林遠里、駒場農学校から農商務省の巡回教師となった船津伝次平、勤儉力行を鼓吹した石川理紀之助などがあり、とくに中村、船津、奈良（あるいは林）を明治三老農という。しかし老農も、90年代に農科大学や農事試験場などが整備され、近代的な輸入農学が消化されると、しだいに活躍の場も狭くなっていった」とある。賢治がここにこうした「老農」を重視したという指摘はされていないが、近代農学とは違った立場から農業を実践する老人たちに敬意を抱いていたことは、「春と修羅 第三集」の「二〇二〇 野の師父」に、「師父よもしもやそのことが／口耳の学をわづかに修め／鳥の

ごとくに軽佻な／わたくしに関することでありますならば」とあることから窺える。ちなみにこの作品には「あなたの瞳は洞よりうつろ／この野とそらのあらゆる相は／あなたのなかに復本をもち／それらの変化の方向や／その作物への影響は／たとへば風のことばのやうに／あなたののどにつぶやかれます」ともあり、大沢（後掲）も指摘するように、本作と発想に共通性があるように思う。

火雲 「かうん」とも読むが、下書稿には「ほぐも」のルビがあることから、ここでも「ほぐも」と読むことにしたい。『定本語彙辞典』では、「かうん」の項に、「夏の雲。「ほぐも」とも。ことに雷雲（↓積乱雲）をこう呼ぶ。俳句では夏の季語」とし、本作について「夏ではないとすれば、冬の美しい夕焼け雲であろうか」とする。『新語彙辞典』では、「それが飛び去り日が暮れば、小指からひきつるやうに手がかじかみはじめるさま」とあった。宮沢清六（後掲）は、「日どり雲」のこととし、島田隆輔（後掲）も、「これは夕焼け雲でなく、乱れ飛ぶひどり雲とみたほうがよいのではないか」とする。また、小野隆祥（後掲A、B）のように、これを「灼熱の石灰粉」ととり、和賀仙人鉱山の製鉄高炉の鉱滓排出口での作品だろうとする指摘もある。先行作品と思われる「歌稿〔A〕」に「¹⁸⁷たそがれの葡萄に降れる石灰のひかりのこなは小指ひきつる」とあったことから、ただニュートラルに火のように赤い雲、夕日に染まった雲を意味していたと思われるが、「¹⁰⁰早魃をテーマにするものが多く、また、昭和七年六月に賢治が書いた書簡下書きに「¹⁰⁰早魃の心配」があったことから、ひどり雲だと解する方が相応しいかもしれない。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」第四九葉として1020（広）イーグル印原稿用紙に書かれた下書稿（一）、「歌稿〔B〕」2162の下段余白に書かれた

下書稿（二）、黄野（240行）詩稿用紙に書かれた下書稿（三）（タイトルは手入れ段階で「施肥」、後に「肖像」。タイトルの上に鉛筆で①、右肩にも藍インクで①）、黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿（四）（タイトルは「肖像」）、下書稿（三）の裏面に書かれた下書稿（五）（タイトルは「肖像」、後に「老農」）、無罫紙に書かれた習字稿、昭和七年六月の宛先不明書簡下書きに挿入された下書稿（六）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（七）（タイトルは「老農」。鉛筆で②）、定稿用紙に書かれた定稿の九種が現存。生前発表なし。なお、『校本全集』であげられている下書稿の順序は、『新校本全集』における順序と大きく異なっている。

『新校本全集』に記述はないが、大沢正善（後掲）は、本作の祖形が「歌稿〔A〕」の大正三年初夏頃の短歌にあるとする。

187 たそがれの葡萄に降れる石灰のひかりのこなは小指ひきつる

大沢は「夕景の中で葡萄の周囲に降る灰白の光の粒子を浴びて、主人公は何か「ひきつる」ような思いを抱いている」とするが、賢治には「²⁶白きそらは一すぢごとにわが髪を引くこゝちにてせまり来りぬ」という歌もある。小指がひきつっているのは、自然の景観が自分の体に働きかけてきたという体験を描いているのかもしれない。

そもそも、この頃の賢治は、盛岡中学を卒業したが進学が許されず、岩手病院に入院した時の看護婦への思いも絶たれて悶々としており、同時期の短歌を見ても、精神的な安定を欠いていたように思えるので、少なくともこの頃の「ひきつる」に関しては、青春期特有の心理や感傷が含まれていた可能性が高いように思う。

159 なつかしき地球はいつこいまははやふせど仰げどありかもわかず

162 病 162 なにの為に物を食ふらんそらは熱病馬はほふられわれは脳

165 病 165 ぼんやりと脳もからだもうす白く消え行くことの近くある

170 らし いさゝかの奇蹟を起す力欲しこの大空に魔はあらざるか

本作の出発点にあつたと思われる短歌が、この他にもあつたのではないかと大沢は書いているが、中でも「歌稿〔A〕」の158は、本文語詩との関係が深いように思う（より関連が明らかかな「歌稿〔B〕」に書かれた形態をあげる）。

158 かな 火のごときむら雲飛びて薄明はわれもわが手もたよりなき

大沢は158と187が合体して、「〔冬のスケッチ〕」第四九葉の下書稿（-）になつたとし、それが昭和五年後半に「歌稿〔B〕」の216の下端余白に書かれた下書稿（二）になつたのだらうという。

火雲むらがり飛べば

わが手たよりなし

灼の石灰 光のこな

葡萄の葉と蔓とに降らす

火雲飛び去れば

わが小指ひきつる

「歌稿〔B〕」の編集時期、「〔冬のスケッチ〕」の創作時期、「歌稿〔B〕」の余白への書入れ時期が、それぞれいつなのかはつきりしないが、中学卒業直後、農学校に勤務し始めた頃、文語詩制作を始めた頃の三期に、その時々感慨を含めながらまとめ直し、

それが定稿で完結したということなのだろう。

さて、初期段階での集大成である下書稿（二）を定稿と比べてみると、「火雲」を冒頭に持つてくるスタイルがここに始まっていること、また、視点が「わが」になっていることが注目されよう。賢治が文語詩を書き始めた頃は、自分史を文語で綴ることを目的としていたというのはよく指摘されるところだが、この段階では、その条件がほぼ備わっていたことがよくわかる。続いて下書稿（三）である。

火雲むらがり飛べば

わが眼まなこたよりなし

火雲むらがり去れば

わがのんどしづにひきつる

タイトルは、手入れ段階で「施肥」とされているが、おそらくは下書稿（二）への手入れにあつた「ボルドー液」（生石灰と硫酸銅より調製される農薬で、殺菌・殺虫に効果があつた）という言葉から引き継がれているのだろう。

「たよりなし」かつた「わが手」は、「わが眼」になり、「ひきつる」のも「小指」から「のんど」に変わっている。これまでは不安定な時期に詠んだ短歌を文語詩化することに専念していた賢治だが、この段階では、農村活動時代の体験として、新しく文語詩を構成し直そうという意図があつたのかもしれない。

タイトルはその後、「施肥」から「肖像」に変わり、手入れ段階では、「わが眼」「わがのんど」とあつたものが、それぞれ「その眼」「そののんど」に改められている。つまり、この手入れで、いまままで自伝的に書き上げようとしていた方向から、自分自身の影を匂わせない三人称化の方向に改められたということができる。

火雲むらがり翔べば
そのまなこうつろに遠し

火雲むらがり去れば
そののんどしづにひきつる

下書稿(Ⅴ)では「肖像」と付けられていたタイトルが「老農」になる。下書稿(Ⅲ)の手入れ段階で三人称化されていたが、「肖像」というタイトルだけでは、自分自身の像(つまり自伝)であると読み取られてしまうことを恐れて、虚構化された第三人称の人物として「老農」が造形されたのかもしれない。また、手入れ段階では「そのまなこ」が「黄のまなこ」に変えられたり、「そののんどしづにふるへり」という段階もあることから、「老い」の視点が加わっていると考えられる。

習字稿を経て、その次に書かれた下書稿(Ⅵ)では、「そのまなこ」が「わがまなこ」に逆戻りしているという不思議な変化がなされている。せつかく自分自身を語る段階から、第三者を書くように改変したのに、再び賢治自身の視点に戻ってしまったのである。が、これは後退でもなかったと思うし、単なる書き間違いでも、全集編集者のミスでもないだろう。というのも、これは昭和七年六月(推定)の宛先不明書簡下書の文中に挟まれていたものだからである。全文を引用しよう。

お歌によればご息もおからだおすぐれにならぬご様子、何ともお傷はしく存じます。何卒一日も早くご快癒、ご両親のご心配も除かるるやう、衷心祈りたてまつります。

からだが丈夫になつて親どもの云ふ通りも一度何でも働けるなら、下らない詩も世間への見栄も、何もかもみんな捨てゝもいと存じ居ります。病気はこんども結核の徴候は現はさず、気管支炎だけがいつまでも頑固に残つて、咳と息切れが動作を

阻げます。

火雲 むらがり翔べば
わがまなこはばみてうつろ。

火雲 むらがり却れば
のんどこそしづにたゆたへ。

当地方旱魃の心配がちよつとございましたが一昨日昨日相降り、稲も麦もまづよく、ご想像の通り盛んにかくこうが啼いて居ります。けれども只今の県下の惨状が今年麦や稲がとれる位の処でどうかなるとは思はれません。まあかうなつては村も町も丈夫な人も病人も一日生きれば一日の幸と思ふより仕方ないやうに存じます。殊によれば順境の三十年五十年より身にしみた一日が重いやうにも存じます。それにしてもどうしてもこのまゝではいけないと思ひながら、敗残の私にはもう物を云ふ資格ありません。

鉛筆書きの乱筆切にお容しをねがひあげます。まづは。

大明敦(「宮沢賢治と保阪嘉内の「訣別」をめぐって」(「宮沢賢治研究Annual20」 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成二十一年三月)は、この書簡を保阪嘉内宛のものだったのではないかということが、賢治に歌を送っていること、「当地方」の農業に関心があること、この時節の岩手では「かくこうが啼く」ことを想像できること、などから、盛岡高等農林で賢治と共に同人誌「アザリア」に原稿を書いていた保阪は最有力候補であろう。

嘉内と賢治は宗教的な対立から、晩年には仲違いしたという見方もあるが、嘉内の長男・庸夫は、「グスコープドリの伝記」(昭和七年三月に「児童文学」に発表)を父親から読み聞かせられたと語っていることからわかるように、保阪と賢治は、晩年にも

交流があり、この書簡が嘉内に宛てられたものである可能性は高いように思われる（もちろん下書が残るだけで、本当に清書されて書き送られたかどうかは分からない）。

ともあれ、賢治は送ってもらった短歌への返しとして、また、当時の岩手県状況や自らの近況、心情などを伝えるのに最も適したものとして、この文語詩を選んだようである。第三者を描いているように改変したのに、再び賢治自身の視点に戻ってしまっているように書いたが、それはつまり、文語詩の推敲過程における文学的事情よりむしろ社交的事情の方を優先したのだということになる。「われ」の視点による改変は、次の段階の下書稿(七)では破棄されて、それが定稿にまで続いていることから、下書稿(六)における改変は、例外的な措置であったことが分かるのだが、注意しておきたいのは下書稿(六)が記された昭和七年六月の書簡の内容である。

この書簡では、賢治が早魃のおそれこそなくなったものの、「只今の県下の惨状が今年麦や稲がとれる位の処でどうかなるとは思はれません」と、岩手の農業についての絶望的な未来について語っている。短期的に見れば、まずまずの状況かもしれないが、岩手の農業を中長期的に見れば絶望的で、自分には改善のためのアイデアが浮かばないどころか、「敗残の私にはもう物を云ふ資格もありません」とまで書いている。

もちろん書簡の通例として、社交辞令もあるうし、謙遜もあるうとは思いますが、こんな自分の近況報告と心情を吐露した書簡に、さながらイラストを挿し挟むようにして文語詩を挿入したことについて、いったいどう考えればよいのだろう。島田隆輔（後掲）は、「抵抗のへ志Vをいまだ秘めた自画像としてこの詩稿を私信に引用した」と言うが、ここに窺えるのは、肥料設計や品種改良といった小手先の方法では、とても追いつかないような、農業というものに対する諦念であるように思えるのである。

しかし賢治が、本当に何もかもを諦めていたと解してしまっ

たは、やはり間違いだと思う。なぜなら賢治は、その諦めの気持ち文語詩に託して書き送ろうとしていたからだ。

賢治が初めて文語詩を「女性岩手 創刊号」（昭和七年八月）に掲載した後、I子なる人物は、賢治の文語詩について次のように評した（「女性岩手2」 昭和七年九月）。「春と修羅」時代には、私共いかにその一々を繰りかへしても、先生の作意と情緒とをつかむことが出来ないで、たゞその中の「無声慟哭」や「獅子踊」に琴線の響を感じ得たにすぎませんでした。」「その後十年、すっかり洗練され切つたこの二篇を口誦して見るとき、この田園詩の物語る世界が、空間に再現されるばかりでなく、其の発声さへもがはつきりきゝ取れる感じがいたします」と書いている。賢治はこの批評が載つた直後、自作の発表について、「口語の方を思つてゐましたが雑誌の批評を見て考へ直して定形のにしました」

（昭和七年十月 藤原嘉藤治宛書簡）とも書いているから、評判の高くなかつた文語詩を好意的に評価されたことを嬉しく思つたのだろう。妹のクニに向つて、賢治は文語詩を「なつても（何もかも）だめでもこれがあるもや」（編集室から）「校本宮沢賢治全集5 月報」 筑摩書房 昭和四十九年六月）と語つたとされるが、この発言の背景にもI子の批評が影響していたのかもしれない。

昭和七年六月に宛先不明書簡の下書に「もう物を云ふ資格もありません」と書いた時、まだ、賢治はここまで確信を持つて自らの文語詩に自信を持つことはできなかったのだらうが、おそらくこの頃には、文語詩制作の方法と目論見が、少なくとも自分の中では確立できていたのではないだらうか。

昭和八年八月三十一日の伊藤与蔵宛書簡には、「もう只今ではどこへ顔を出す訳にもいかず殆ど社会からは葬られた形です。それでも何でも生きてる間に昔の立願を一応段落つけやうと毎日やつきとなつてゐる」とも書きつけているが、これはちやうど昭和八年八月十五日に「文語詩稿 五十篇」を、そして同年八月二十二日に「文語詩稿 一百篇」を、それぞれ定稿として書き残していた時

期であるから、「社会的には葬られた形」であったとしても、やっ
きと成って文語詩に挑み、「昔の立願」には積極的であったとい
うことでもある。だとすれば、昭和七年六月に「物を云ふ資格も
ありません」と書きながら、文語詩を書き添えたことと姿勢は一
貫しているように思われる。

岩手の農業や自分の人生に対する諦念とともに、わずかな希望
が文語詩に託されていたこと、また、そうした自分の心情を語り
尽くしてくれるものとして託されたのが本作であるとする、本
作の位置づけはきわめて重かったように思われ、現存稿の多さも
それを物語っているのかもしれない。

先行研究

平尾隆弘「雨ニモマケズ」(『宮沢賢治』 昭和五十三年十一月

国文社)

小野隆祥A「冬のスケッチ 四、五」の成立 現存稿による大正

八年説の直接証明」(『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッ

チ」探究』 洋々社 昭和五十七年十二月)

小野隆祥B「幻想的展開の吟味」(『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と

「冬のスケッチ」探究』 洋々社 昭和五十七年十一月)

岡井隆「文語詩稿」の意味」(『文語詩人 宮沢賢治』 筑摩書房

平成二年四月)

宮沢清六「賢治の世界」(『兄のトランク』 筑摩書房 平成二年十

二月)

三谷弘美「賢治文語詩における深層と表層」(『賢治研究 64』 宮沢

賢治研究会 平成六年九月)

大沢正善A「宮沢賢治の文語詩」(『文芸研究 15』 日本文芸研究会

平成十二年九月)

大沢正善B「老農」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ

平成十四年七月)

島田隆輔「再編稿の展開」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛

筆・赤インクノ写稿Vによる過程」〔未刊行〕 平成二十二年
六月)

24 浮世世絵

① ましろなる塔の地階に、 さくらばなけむりかざせば、
やるせなみプジェー神父は、 とりいでぬにせの赤富士。

② 青瓊玉かゞやく天に、 れいらうの瞳をこらし、
これはこれ悪業乎栄光乎、 かぎすます北斎の雪。

大意

真っ白な塔の地階に、桜の花は煙のように咲いて影を作り、
やるせないためにプジェー神父は、北斎による赤富士の贋作を取
り出した。

真っ青に輝く空に、美しく澄みとおった瞳をこらして、
ああ、こんな贋作は悪なのだろうか善なのだろうか、
神父は北斎の雪の匂いをたしかめている。

モチーフ

賢治は盛岡での学生生活で、浄土真宗や曹洞宗だけでなく、新旧
のキリスト教会とも関わりがあった。本作ではカトリックのプジ
ェー神父が浮世絵が話題に上っているが、「悪業乎栄光乎」という言
葉には、精巧な浮世絵の贋物を、芸術として認めていいのか悪い
のか、という賢治自身の問題意識が託されていると考えられる。
またカトリックの神父が浮世絵のコレクションをするというモチ
ーフは、日本の芸術や文化(そして宗教?)が西洋文明に比肩で

きる存在だという思いが背景にあったように思う。

語注

塔の地階

プジェー神父が司祭を務めていた盛岡天主教会（現・カトリック四ツ家教会）の地階のこと。所在地の旧町名から四ツ谷の教会、四ツ谷の天主堂と呼ばれていたという。明治十三年建立。その後、大正元年に木造ゴシック風に改築される。昭和五十二年に解体され、盛岡大学付属高校内の細川泰子記念礼拝堂として保存されている。しかし木原理雄（後掲）によれば、盛岡在住の吉田敬二が教会に確認したところ、地下を建設したことはなかったとのこと、上田哲（後掲木原論文）は、「当時は木造建築であり地下を建設しようとしても構造上無理があり、また、レンガを建築材料に使用しても値段が合わず、「天主堂に地階はなく賢治の文学的創作ではないか」という。ただ、文語詩ではここに春の光が差し込んでるように読めることから地下にあったとも思えない。そもそもプジェー神父の母語であるフランス語では、一階 (Premier étage) と言えば日本でいう二階を指し、日本でいう一階のことは rez-de-chaussee とつうが、そのつもりで書いたのかもしれない。イギリス英語でも一階のことは first floor ではなく ground floor であり、直訳すれば「地階」となる。賢治とプジェー神父との関係を示す証拠は作品の他には残っていないのだが、教会は新時代の高等教育の場として機能し、例えば平民宰相・原敬はフランス語を教わることを条件にエブラル神父の書生になったというから（「内丸・仁王・本町付近」『もりおか物語九

内丸・大通かいわい』熊谷印刷出版部 昭和五十四年二月）、賢治を初めとした盛岡の若者たちもここに足を運び、新時代の知識や刺激を受けた可能性はあろう。

プジェー神父

一八六九年（明治二年）にフランスで生まれ、パリ外国宣教会大神学校で学び、明治二十六年より日本に派遣さ

れたカトリック神父アルマン・プジェ (Armand Potget)。函館天主教会の助任司祭を経て、明治三十五年より大正十一年まで盛岡天主教会主任司祭。芸術家肌で日本の美術工芸品にも興味を持っていた。上田哲（後掲）によれば、浮世絵を集めていたが、偽物が多いために刀剣の鏝、ことに切支丹鏝を収集し、研究論文を書いたり、古美術品を収集したりしたという。

にせの赤富士

葛飾北斎の「富嶽三十六景 凱風快晴」の贋物のこと。北斎は晩夏から初秋の早朝に、富士山が朝日に染まって真っ赤になるところを絵に描いた。賢治は「『浮世絵宣伝文』」に「葛飾北斎の氷雲にそるまつ赤な富士」と書いている。上田哲（後掲）が書いているように、プジェーは浮世絵に偽物が多いことを不満に思っていたようだが、大正初年には高見沢遠治という浮世絵師が高度な「直し絵」を作り、画商がそれを偽って売ったことから事件に発展することもあった。高見沢は以降、複製画を作ることになるが、これも本物と間違われることがしばしばあったという。賢治父子と交流のあった僧で仏教学者であった暁鳥敏も高見沢の作った写真を持っていたことが分かっている（「暁鳥文庫から見つかった謎の浮世絵」『こだち176』

金沢大学付属図書館報「こだま」平成二十四年一月）、高見沢についての情報が、暁鳥の方から入っていた可能性もある。鈴木健司「童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐる」発行所・近森善一の談をもとに（『宮沢賢治という現象 読みと受容への試論』蒼丘書林 平成十四年五月）は、盛岡高等農林学校の後輩で『注文の多い料理店』の発行者であった近森が、「浮世絵をね。あれをうんと集めてきてね。どうして集めたかという」と、親父がどうしたこうしたと言ったと、やっばり、お父さんの関係で買ったものだと思うが。すすけて真っ黒になっているわね。そんなものを何とかお父さんが、あいつを洗ってきれいにして、何とかこう、まあ本当はあんなことしたらいかんのだけれど、水洗いといってね、そんなことをして商売もしていたよ

うに思う」と語っていたことを紹介している。また、「『百篇』の「暁眠」には、「うらぶれの贗物師」として写楽の贗物などを作る人物が登場する。このように賢治の浮世絵への興味、修復・偽造・複製に関する知識はかなりのものであったと思われる。

青瓊玉 瓊玉は美しい玉の意。「玉(ぎよく)は、一般に半透明で薄緑色の宝石(ヒスイなど)を意味しますが、「青瓊玉」は何でしょうか。青い玉髓か碧玉の一種かとも思われますが、鉱物学的には特定できません」(加藤碩一・青木正博「賢治と鉱物」第4回「瑠璃の空」<http://www.kousakusha.co.jp/planetatlog/ue/kenji/kenji04.html>) ㊦(1)㊧。

れいろうの瞳 透きとおってくもりがない様子。ここでは神父の瞳の青い(または緑)ことを指しているのだろう。

悪業乎栄光乎 悪業と見なすか栄光と見なすかということ、聖書や賛美歌、明治初期の翻訳文学のような書き方でユーモラスな感じを出そうとしたのだろう。木原(後掲)は、「にせ物がでまわるということは、にせ絵造り達の悪業の結果なのだろうか、それとも北斎の浮世絵があまりにも有名になり過ぎた栄えのしるしなのか」と解する。また、木原は「聖職者が浮世絵一枚にうつつをぬかしているのは悪業である、との解釈も可能である。しかし、それはいささか辛辣である」とし、「道徳的なりゴリズムでみるよりは、宗教的ニュアンスを含めて温かいユーモアであり、笑いのある軽いタッチの作品と解したい」とする。しかし、浮世絵の偽造や修復にも造詣が深かったと思われる賢治だけに、これほどまでに偽物の修復・複製技術が高いのは、果して悪業として糾弾するべきなのか、それとも栄光として讃えるべきことなのか、といった意味ではないかと思う。『定本語彙辞典』では、北斎の「富嶽百景」に「礫川雪の旦」があり、「富士山の見える小石川のおそらく料亭の二階で、はしやく芸者たちをはべらせて雪見の宴にうつつをぬかす金持ちらしい商

人ふぜいの姿を画いた画面で、それを見ての賢治の言」ではないかとしている。

評釈

黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、下書稿(一)を消しゴムで消したうえに書き付けた下書稿(二)(タイトルは「春」)、その裏面に書かれた下書稿(三)(タイトルは「浮世絵」)。青インクで⑤、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。

「『百篇』には、この他にもキリスト教徒が多く登場し、「岩手公園」では盛岡浸礼教会のタッピング一家、「けむりは時に丘丘の」ではミス・ギフォード、「暁眠」では内村鑑三の弟子であった斎藤宗次郎が登場しており、「五十篇」とは異なった編集意識、異なった心情があったのかもしれない。

本作のモデルである盛岡天主公教会のプジェー神父と賢治の間に交流があったという証拠は、賢治が短歌や文語詩を残している以外には見つからないようだが、盛岡高等農林学校で賢治と同じ農学科二部で学んだ出村要三郎(「賢治とキリスト教」『2011人の証言 啄木・賢治・光太郎』読売新聞盛岡支局 昭和五十一年六月)は、「二年の二学期だったか、宮沢君に誘われて、盛岡教会のタッピング牧師がやっていたバイブル講義を聴きに行った。週一回の講義だったが、彼は英語もうまく、英語と日本語半々で話すタッピング師によくほめられていた。英語のマスターとキリスト教への関心が、彼の目的だったように思う」と証言しているから、プジェー神父の元にも出入りしたと考えてもよいように思う。また、賢治は浄土真宗の島地大等や曹洞宗の尾崎文英の所に入りましたことが知られており、広く宗教に対する知識と理解を求めていたようなので、ただ語学習得のためだけでなく、キリスト教にも興味を抱いていた可能性が高い。

賢治がプジェー神父を最初に扱っているのは、「歌稿〔B〕」の「明治四十四年一月より」に含まれる短歌である。

21 やうやくに漆赤らむ丘の辺を／奇しき袍の人にあひけり
21^a 22 ひとびとは／鳥のかたちによそほひて／ひそかに／
秋の丘を／のぼりぬ

盛岡中学に入学した賢治は、多くのものを見て、多くの刺激を見たことと思うが、その一つがカトリックの神父の衣装だったようである。この短歌を文語詩化する気だったのか、「歌稿」の欄外には次のように改作されている（『新校本全集6』に補遺詩篇Ⅱとして収録されている）。

◎プジェー師丘を登り来る
漆など

やうやくに
うすら赤くなれるを
奇しき服つけしひとびと
ひそかに丘をのぼりくる

上田哲（後掲）によれば、「△奇しき服▽は、スータンと呼ばれる司祭などカトリックの聖職者が日常着ていた長い上着。△鳥のかたちによそほひ▽は、スータンの上に羽織る胸の辺までを覆うマントの様なものを着用した様子を指したのではなかったろうか」とのこと。

次にプジェー神父を扱ったのは、盛岡高等農林に進学して二年目の「大正五年三月より」の項にある次のような短歌である。

280^a 281^a さわやかに／朝のいのりの鐘なれと／ねがひて過ぎぬ／
君が教会
280^a 281^a プジェー師よ／かのにせものの赤富士を／稲田宗二や

持ち行きしとか
280^b 281^b プジェー師よ／いざさわやかに鐘うちて／春のあした
を／寂めまさずや
280^c 281^c プジェー師は／古き版画を好むとか／家にかへりて／
たづね贈らん
280^d 281^d プジェー師や／さては浸礼教会の／タツピング氏に／
絵など送らん

このうち280^a 281^aと280^b 281^bは、『新校本全集』にも本作の関連作品だと書かれているが、「歌稿〔B〕」においては次のページに書かれた280^c 281^cと280^d 281^dも後年（文語詩制作時？）の同時期に書かれたものだと思われるので、広い意味での関連作品だと言ってよいだろう。

文語詩の下書稿(一)は、消しゴムで消されているために判読できない箇所もあるということなので、「春」というタイトルが付けられた下書稿(二)から見たい。

ましろなる塔の地階に
あしたともひるともわかず
さくらばなけむりかざせり
やるせなきプジェー神父は
北齊がにせの赤富士
しめやかにとりこそいづれ
ぼうと降る日ざしのかなた
たゞ赤く錆びしタンクの
ねむたげに水吸へる音
葱緑のかゞやくそらに

れいらうのひとつみをこらし
かぎすます紙の一ひら

ここで気づくのは、各連ごとに「白・赤・赤・緑」という色を表す語がそのまま出ていることだ。細かく見れば、第一連における「ましろなる塔」は桜花の白（桃色？）に接続し、第四連における葱緑（一般的な名前ではないが、浅葱、萌葱などの関連、あるいは『定本語彙辞典』のいうように英語における *leek green* の訳だろう）は、神父の瞳の色を連想させる効果を狙っているのだろう。

一方、定稿では一行目が「ましろなる塔」と「さくらばな」でいずれも白、二行目は「赤富士」、三行目は「青瓊玉かがやく天」と「れいろうの瞳」が同じ色、四行目は色名は現れないが、「北斎の雪」で白をイメージさせようとしている。木原（後掲）が書くように、「多色刷りの絵を鑑賞している感じ」を出させたかったのだと思われるが、下書稿(二)では「白・赤・赤・緑」であったものが、定稿では「白・赤・青・白」という構成に変換されている。下書稿(二)の第三連の内容は定稿に残っていないが、プジェー神父の言動と交差することがなく、色彩の面から言ってもインパクトに欠けると判断されたためであろう。

浮世絵は十九世紀末の西洋人に大きなインパクトを与えたことは、広く知られるところで、例えば印象派の画家ゴッホは、四百枚ほどの浮世絵コレクションがあつたといひ、「タンギー爺さん」の背景には浮世絵があしらわれ、歌川広重の「名所江戸百景」の「大はしあたけの夕立」や「亀戸梅屋敷」を模写したりもしている。この他にもマネやモネ、ロートレック、ゴーギャン、ルノワールなど、浮世絵の影響を受けた画家は枚挙にいとまがない。また、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて流行したアール・ヌーヴォーにも、浮世絵を初めとした日本の美術が大きな影響を与えたとされている。

賢治は浮世絵の愛好者としても知られるが、童話集『注文の多い料理店』の刊行者である及川四郎に浮世絵の販売を勧め、その時に次のような文章を書いたと言われている（『浮世絵広告文』昭和六年（八年頃））。

燥音と速度スピードの現代のなかで、日本古代の手刷版錦絵ばかり、しづかな夢ときらびやかな幻想をもたらすものが、どこに二つとありませう。それこそ曾って日本が生んだ、たった一つの独創美術、やがてはゴッホ、セザンヌの新流派さへ生みだした、世界の驚異でありました。

そこには初代広重の、東海道の宿しゆくや松、白く濺んだ川霧と、黄の合羽うつ俄雨、または葛飾北斎の氷雲にそよるまつ赤な富士や、さては歌麿英山の歌ふばかりのうなじの線や、あらゆる古き情事の夢を永遠にひそめる丹唇や、もとより春信清長の童話の国のかたらひと、端正希臘の風ある婦女や、或は藤川一派から三代豊国あたりに続くあらゆる姿態の役者絵と江戸の力士の大錦、乃至は国芳英泉の武者や行事の姿まで、まこと浮世絵版画こそ、さながら古き日本の、復本でこそありました。

古い日本の家庭では、旧三月の雛祭五月の節句、秋祭乃至は冬の夜すさびに、みなこの数を備へてゐたのでありましたが、明治になって西の忙しい文明が嵐のやうに日本を襲ひ、日本がこれをしばらく忘れてゐたうちに、その大半は塵に移し、一部は海のかなたに散つて、今やほとんど内地にはこれらやさしい数葉のその影だにもなくなりました。

島田隆輔（後掲A、B。引用はB）は、これを引用しながら、「近代化の範としていた異邦の聖職者でさえも魅了されてしまったのが、後進国の浮世絵だった」が、日本は近代化の過程で、その伝統を棄ててしまい、賢治は「近代化の過程で発生した過誤の一つとして、浮世絵の喪失を指摘し」、「この国の近代化のありよ

うを問「い直そうとしたのではないかとする。ただ、日本では蔑まれていた浮世絵の価値を改めさせたのが西洋人であったことも事実なのだが」

この他にも、賢治は論文と言ってもよさそうな「浮世絵版画の話」や「浮世絵画家系譜」「浮世絵鑑別法」も書いています。

本作には「にせの赤富士」が登場するが、浮世絵に通じていた賢治なら、偽造品に関する知識も十分にあつたと考えられる。とすると浮世絵の修復や複製において天才的な技量を持っていた高見沢遠治のことも知っていたとすべきだろう。

高見沢の技術はきわめて高く、当時の浮世絵研究者だった藤懸静也に「高見沢が入念に作ったものは真物か、贋物か鑑別がつかない」と言わせるほどのものだったという（高見沢たか子『ある浮世絵師の遺産 高見沢遠治おぼえ書』東京書籍 昭和五十三年七月）。しかし、高見沢の作ったものに画商たちが目を付けて、本物だと偽って売ろうとしたために、高見沢は詐欺師扱いされるようになってしまった。「二百篇」の「暁眠」には、「うらぶれの贋物師」としてニセの浮世絵を作る人物が登場するが、悪いイメージで描いているように感じられないのは、賢治が高見沢のような天才的な修復技術や複製技術を持ちながら、世の中からは理解されていない人物を顕彰したい気持ちがあつたからだと思われる。

プジェーは「にせの赤富士」について「悪業乎栄光乎」と言つたと書かれているが、賢治が高見沢のような存在について知つていたとすれば、木原理雄（後掲）のように「にせ物がでまわるということは、にせ絵造り達の悪業の結果なのだろうか、それとも北斎の浮世絵があまりにも有名になり過ぎた栄えのしるしなのか」とするのはなく、ここまで偽物の修復・複製技術が高いのは、果して悪業として糾弾するべきなのか、それとも栄光として讃えるべきことなのか、といった意味に取つた方がよいように思う。

もつとも上田哲（後掲）によれば、プジェーは浮世絵に偽物が

多いことを不満に思つて、刀剣の鍔や古美術品を集めるようになったことなので、本当にこのように考え、このように発言したかどうかはわからない。虚構である可能性も高いが、少なくとも賢治はそう感じていたように思われる。

賢治は「浮世絵版画の話」で、浮世絵の美点を四つあげるうちの一つに「せい沢品であるといふ感じのないこと」を挙げ、同一の作品を多くの人が所有できることから「プロレタリア芸術の花形」とも言っている。多くの人に最高級の作品を見せようと心血を注いだ職人のことも、称賛したと考えられるのである。

ところで、文語詩を書く際のメモ的な役割を果たした歌稿に、どうしてキリスト教徒ばかりが登場させたのだろうか（稲田宗二とあるのは、花巻に住んでいたキリスト教信者の斎藤宗次郎だろう）。

賢治は大正九年の秋頃に国柱会に入会し、大正十年二月十九日の宮沢友次郎宛書簡に、「願はくは 世界の光栄 地球の大燈明台たる天業民報をばご覧下さい」と、国柱会の新聞である「天業民報」の購読を勧め、保阪嘉内に向つても天業民報社の振替用紙に保阪の名前を自分で書いたものを送りつけている。その頃、「天業民報」で主催者である田中智学が連載していたのが『日本国体の研究』（真世界社 大正十一年四月）で、賢治は熟読していたはずだが、その中にはこんな一節がある。

耶蘇教などでいふ神は、はじめから全然人間とは別種のもので、永次に同じものにはなれないとしてある、所謂純靈一点張り心の神であるから、仏教でいふと、これは無因果になつて、心理の原則にはづれて居るとする、そうした結果はどうなるかといふと、人間に不条理を強ふるのだから、人文の退歩を来たし、結局人間の真価を去勢してしまうことになつて、人が卑屈になるか、ウソツキになるか、無責任になるか、手前勝手になるかして、これを信じた世界は、かならず道徳の根底が類

れて、平和を攪乱したハテが禽獸的になるとされてある、殷の鑑み遠からず、世界の大戦乱によりて暴露された西洋文明の化の皮が、幾千年の人間の歴史を結論して、人間の文明といふものは、つまりウソと人殺しの替名であるといふことを雄弁に自白して居る、これ論より証拠で、何人も争うことは出来ない。「日本国体とは何ぞや」

智学は法華経と、日蓮が生まれた日本という国を重く扱い、こうしたキリスト教批判・西洋文明批判を展開するが、『日本国体の研究』の結論部分にあたる「明治大帝論」では、「日本は仁慈礼讓の本家で、忠孝実現の靈国だ、残忍や獰猛なる虐殺などは夢にも見られない楽土だ「国体」が病中休止して居ても爾うだ」とし、「明治大帝は永久に世界的問題の中枢である、善解するものは共鳴し、反発するものは亡びた」とする。そしてこれは日本人だけが思っているのではなく、「米国のグラント大統領は、日本を世界無比の国体と讚し、ポーランドの詩人は大帝を世界統一の靈王と謡ひ、独逸のスタインは「神の国」と讚し、仏国のポールリシヤールは「現代の神」と崇敬した、これが、世界中にひろがらなくてはならぬ」という。

いくら賢治が友人知己に「天業民報」の購読を勧めていたとしても、賢治が智学のいうとおりに認識していたかどうかは疑問だし、仮に一〇〇%納得していたとしても、文語詩の推敲に没頭していた最晩年まで同じ認識であり続けた保証はない。しかし「田中大先生の国家がもしこんなものなら」（大正十年一月二十日 関徳弥宛書簡）と書いてもおり、晩年にいたるまで国柱会の会員であり続けたことを思うと、賢治がこうした国柱会の宗教観、世界観、文明観から全く影響を受けていなかったとも考えにくい。

賢治がキリスト教に代表される西洋の精神的な伝統を排除しようというような攘夷思想を抱いていなかったことは、「銀河鉄道の夜」（三次稿）に「みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの

神さまだといふだらう。けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだらう。それからぼくたちの心がいゝとかわるいとか議論するだらう。そして勝負がつかないだらう」と書いていることから明らかだが、そのあとで「ほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学も同じやうになる」とも書き残しているわけであり、「ほんたうの考」をなんとかして証明したい、という思いは消え去ったわけではなかっただろう（この箇所が四次稿に書き改められた際に削除されたとしても）。

ともあれ、ここでは東洋的な美や価値観を、西洋的精神の象徴ともいふべき神父が言及するということが重要なわけであり、西洋思想に対する東洋思想の優越や、その正当性の証明をしたいわけではなかったように思う。東洋的なものの価値が東洋人のみでなく、西洋人にとっても意味のあるものであるということを、賢治はここで提示したい気持ちがあったのではないかと思うのである。

先行研究

上田哲「賢治とキリスト教」『宮沢賢治 その理想世界への道程』明治書院 昭和六十年一月

木原理雄「浮世絵」『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月

島田隆輔 A「宮沢賢治短歌の文語詩への転生について」（『路上 118』路上発行所 平成二十二年十二月）

島田隆輔 B「宮沢賢治・《文語詩稿》生成の一面 『歌稿（B）』にかかわって」（『島大國文 33』島大國文会 平成二十三年三月）

稲賀繁美「宮沢賢治とファン・ゴッホ 相互照射の試み」（『お茶の水女子大学比較日本語教育研究センター研究年報 8』お茶の水女子大学 平成二十四年三月）

25 歯科医院

①ま夏は梅の枝青く、
碧空の反射のなかにして、
うつつにめぐる蟻や、
風なき窓を往く蟻や、

②浄き衣せしたはれめの、
はてもしらねば磁気嵐、
ソファによりてまどろめる、
かぼそき肩ををののかす。

大意

真夏に見る梅の枝は青々としており、風のない窓をアリが歩き、
青空の反射する下では、ぼんやりとした中に足踏みエンジンの音
が聞こえる。

清らかな衣を着たたわれめが、ソファによってまどろんでいると
ころを、
磁気嵐が果てることなく吹き付け、かぼそい肩をふるわせる。

モチーフ

老若男女や貧富を問わずにお世話になるのが医者である。賢治は
歯科医院のモダンな待合室でうたたねする「たはれめ」を描いて
おり、表層的にはモダン空間に登場する美人という構図となつて
いる。しかし、磁気嵐は飢饉の前触れであると賢治が思っていた
可能性もあることから、農村の疲弊が生んだ「たはれめ」という
存在にスポットをあて、農村がさらに疲弊することを予感させる
ものにしたのだと思う。ただ、下書稿の当初の案にあった「うた
ひめ」のアイディアは、作成の途中で削除される段階もあり、機
関手や伯楽（馬の売買や周旋をする人）、村長などを登場させるつ
もりもあったことも無視できない。社会の暗黒面を訴えるつもり

があつたのは確かであるにしても、さまざまな人が一堂に会する
空間である歯科医院という場所を描こうとする意図もあつたこと
は忘れてはならないと思われる。

語注

歯科医院

江戸期には口中医や入れ歯師が活躍していたが、明治
になつても歯科医療はあまり重視されず、旧制の歯科医学専門
学校のうち官立で設置されたのは昭和三年の東京高等歯科医学
校（現・東京医科歯科大学歯学部）のみであつた。大正になつ
ても旧来の入れ歯抜歯口中治療業者が活躍し、たとえば大正
時代の長崎における正規の歯科医師と非医師の比率はおよそ一
対一であつたという（長崎県歯科医師会「歯の歴史博物館」
<http://www.nda.or.jp/history/>）。佐藤成（後掲A、B、C）

によれば、本作のモデルになつているのは金野英三の営んだ歯
科医院であろうという（佐藤の母は金野のめい）。金野は大正四
年に黒沢尻町で歯科医を開業し、七年には宮右（賢治の祖父喜
助の実家）の別荘へ、九年には仲小路へ歯科医院を移転したと
いい、歯科医院の窓をあけると、目の前には本作にもあるよう
に梅の木があつたという。金野と賢治には交流があり、二人と
も鉱石に詳しいことから連れ立って鉱山を歩くこともあつたと
いう。また、賢治が歯ぐきから血を出して止まらなかった時に
は診療にあつたのは英三だという。熱心な仏教徒（曹洞宗）
で、世界連邦岩手県支部長として平和運動にも参画したという。
金野の孫にあたる熊谷光子は、「賢治はあちこちで庭作ってます
けど、金野の家でも賢治さんに庭を作って貰ったんだそうです。
母が女学生の頃だかに賢治さんが縁側に座つてうつつ向き加減に
お茶飲んでる姿や、庭を手入れしている姿を何度か見ているん
ですつて。その庭に大々きな西洋モミの木があつたんですが、
それは賢治さんが植えてくれたものだったんですよ」（「生誕祭
は生き方じっくり考えるとき 謹二郎先生との「縁」」 「イン

タビユー「私と宮沢賢治」 <http://www5.et.tiki.ne.jp/~luzpc/hp/luzpc/interview.htm#modoru> へ語らう。

鑿ぐるま

歯を削るための歯科用旋盤のこと。現在は一分間に三十〜五十万回転するエアータービンが用いられるが、明治から昭和初期には足踏み式エンジン（歯科用旋盤）が用いられた。

うつつ

現実のことだが、「夢うつつ」や「夢かうつつか」などというところから誤用が生じ、夢見ごちの意味を表すことがある。ここでは「たはれめ」がまどろんでいることから「鑿ぐるま」の音も夢の中から聞こえるようにぼんやりしていることを言いたかったのだろう。

磁気嵐

太陽から吹き出す高温で電離した粒子（太陽風）が、地球に向って吹き付ける際に、地球全体にわたって地磁気が不規則に変化すること。磁気の「嵐」を人間が直接知覚することはできないが、極地でなくともオーロラが発生することがある。

賢治の年譜や作品には特に言及もないようだが、賢治の在世中にも明治四十二年九月二十五・二十六日、大正十五年十一月二十一日、昭和三年十月十八日には東北でもオーロラが発生したといひ、それを描いている可能性もある。平山英子（後掲）は、「地震及火山爆裂ニ先チ磁気ノ変動ノ現ハルコトアリ」（石川成章『地文学講義 下巻』金刺芳流堂 明治三十九一月）などとした資料を見つけており、賢治も「グスコンブドリの伝記」の創作メモに太陽黒点と思われる太陽の黒い棘について記し、また、ノルウェイのオーロラ研究者ビルケラン教授と思われる人物を『春と修羅（第一集）』の「風の偏倚」に書いていることから、賢治が太陽黒点と磁気嵐についての知識を持っており、出現した際には冷害をもたらす可能性があることも知っていたとする。

評釈

黄野（222行）詩稿用紙に書かれた下書稿（一）（タイトルは「歯科医院」、以下同じ。赤インクで㊶）、その裏面に書かれた下書稿

（二）、黄野（222行）詩稿用紙に書かれた下書稿（三）（鉛筆で㊶）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。

賢治は文語詩稿で「うたひめ」や「たはれめ」をよく取り上げているが、栗原敦（後掲）は本作を「まどろみつつ診察の順番を待つ清潔な夏の衣の「たはれめ」。しかもその「かほそき肩」に着目するのは、「たはれめ」の存在としてのはかなさを、いたわりの視線に包んで描いていることを示すと言ってよい」と評した。

『新校本全集』に先行作品や関連作品についての記述はないが、下書稿（二）の手入れ段階で「まなじりふかき伯楽は／さらに雑誌をひるがえず」とあり、これは「一百篇」の「車中（二）」の定稿に「まなじり深き伯楽は、しんぶんをこそひろげたれ」とあるのと同じアイディアであることから、制作時期の近さと、モチーフの類似性を感じさせる。

また、同じように「たはれめ」を扱った「未定稿」の「せなうち痛み息熱く」も、共通する部分が多いように思える。長編ではあるが引用してみたい。

せなうち痛み息熱く
待合室をわが得るや
白き羽せし淫れめの
おごりてまなこうちつむり
かなためぐれるベンチには
かつて獅子とも虎とも呼ばれ
いま歯を謝せし村長の
頼明き孫の学生を
侍童のさまに従へて
手袋の手をかさねつゝ
いとつゝましく汽車待てる
外の面俣の往来して
雪もさびしくよごれたる

二月の末のくれちかみ
十貫二十五匁にて
いかんぞ工場立たんなど
そのかみのシャツそのかみの
外套を着て物思ふは
こゝろ形をおしなべて
今日落魄のはてなれや
とは云へなんぞ人人の
なかより来り炉に立てば
遠き海見るさまなして
ひとみやさしくうるめるや
ロイドめがねにはし折りて
丈なすせなの荷をおろし
しばしさびしくつぶやける
その人なにの商人ぞ
はた軍服に剣欠きて
みふゆはややにうら寒き
黄なるりんごの一籠と
布のかばんをたづさえし
この人なにの司ぞや
見よかの美しき淫れめの
いまはかなげにめひらける
その瞳くらくよどみつゝ
かすかに肩のもだゆるは
あはれたまゆらひらめきて
朽ちなんいのちかしこにも
われとひとしくうちなやみ
さびしく汽車を待つなるを
栗原（後掲）はこれについて、

はじめ「おごりてまなこうちつむ」れると見た、かの「淫れ
め」の姿が、実は病に苦しむさまであったと気づいたその時、
心の中で自分の誤解を謝するいとまもなく、一瞬のうちに「わ
れ」は「淫れめ」となり「淫れめ」は「われ」となつて、「ひと
しくうちなや」む存在として、いわば、「ひとし」き「われ」、
「共なる△われ▽」の位置に重なるのである。

と読み解いている。島田隆輔（後掲）もこれを引き受け、「「せな
うち痛み息熱く」が東北砕石工場技師時代以降の取材であること
を強調しながら、「ここにはもう「淫れめ」との距離はほとんどな
く、農村社会のために朽ち果てようとするのと、家族のために朽
ち果てようとするのと、その光源さえ同じ、＼共有感覚＼がある
ばかりだ」とする。

さて、この「「せなうち痛み息熱く」であるが、島田（後掲）
も「歯科医院」と関連させながら論じていたが、ただ「たはれ
め」が登場するからというだけの類似ではないだろう。三・四行
目に「白き羽せし淫れめ」が「まなこうちつむ」つていとある
が、これは「歯科医院」において「淨き衣せしたはれめの、ソ
ーファによりてまどろめる、」姿とほとんど一致している。また、
どちらの作品においても「たはれめ」の具合が悪いということ
で共通しているし、診察の時間なり汽車の時間なりを「待つ」存在
であるというところも同じである。「せなうち痛み息熱く」の後
半、後ろから五行目に「かすかに肩のもだゆるは」とあるのも、
「歯科医院」の「かぼそき肩ををののかす」となっていると共通
しており、異なるのは駅の待合室か歯科医院の待合室かという程
度の差であるが、このくらいの違いは、文語詩では簡単に置き換
えられる程度のものである。「歯科医院」の下書稿(二)の手入れ段階
に「しばし拵じて村長は／雑誌をさらにひるがへす」という句が
あるが、これは「「せなうち痛み息熱く」における「かつて獅子

とも虎とも呼ばれ／いま齒を謝せし村長」を思わせる。佐藤隆房（「阿部晁という人（2）」『宮沢賢治 素顔のわが友』平成八年三月 桜地人館）によれば、これは阿部晁という湯口村の村長だとのことだというが、これも「せなうち痛み息熱く」と「齒科医院」（さらに「車中（二二）」の關係を示すものだと言えるかもしれない。

平山英子（後掲）は、本作に登場する「磁気（の）嵐」に注目し、これをキーワードであるとす。平山によれば、太陽表面の活動が活発化し、黒点が現われる際に磁気嵐が起こることが多いのは、当時すでに知られていたようで、そのような年には冷夏などの自然災害が起こりやすいことから、賢治は「なやみ、おびえ、おののいている「たはれめ」のその背景に、災害による飢饉を想定し詩作したと考えられる」とする。たしかに、そのような背景もあつたのだろう。

ただ、磁気嵐は下書稿(三)の手入れ段階で初めて登場する語であることは忘れてはならないと思う。また、「たはれめ」についても、たしかに下書稿(一)の段階から登場しているが（厳密に言えば、下書稿(一)の手入れ段階から）、下書稿(二)の手入れ段階では「たはれめ」が登場せず、「今日は非番の機関手の／ソーフアによりてまどろめる」に改めらる段階があつた。この案はすぐに却下されて、賢治は「たわれめ」を復活させるが、賢治は「伯楽」や「村長」を登場させようとしている。

そもそも、賢治は下書稿(一)の紙面に「立候補ヤメサセタル娘／何回モ眼ヲ赤ク／シテ出ル」「谷内村長」「銀行家」「県知事／百合／発電所連」「岩根橋発電所視察団／一、坑内／二、篝火」のメモを残しており、本文語詩に登場させる人物についての構想を練っていたものと考えられる。つまり、初期の段階では磁気嵐のイメージはもちろん、「たはれめ」についての明確な構想も持っていなかったようだ。

逆に、下書稿(一)の段階から定稿まで、ずっと保ち続けられたの

は「齒科医院」というタイトルである。だとすれば、賢治の頭にずっとあり続けたのは、さまざまな階級の人間が集まる「齒科医院」という場所であつた、ということにならないだろうか。

賢治は「一百篇」の「崖下の床屋」で、支店長、理髪技師、弟子の三者を置き、式亭三馬の「浮世床」さながらに、様々な人間の出会う場所を描いていた。また、同じく「一百篇」の「かれ草の雪とけたれば」では、税務吏、馬喰、三百代言（弁護士）などの様々な職業の人間を一堂に集めている。本作においても、日本の農村女性の悲哀と受苦を「たはれめ」に代表させているとのみ捉えるのではなく、様々な階級の人が出逢い、すれ違う空間としての齒科医院という場所を描くという意図を読み取っておくべきではないだろうか。

しかし、いずれにしても平山の指摘するとおり、定稿において磁気嵐がキーワードになつているのは確かで、「なやみ、おびえ、おののいている「たはれめ」のその背景に、災害による飢饉を想定し詩作したと考えられる」点については、かわりがないように思える。

先行研究

栗原敦「うられしおみなごのうた」『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月

佐藤成A「宮沢賢治への遍歴 あとがきにかえて」『証言 宮沢賢治先生 イーハトーブ農学校の1580日』農文協 平成四年六月

佐藤成B「賢治と金野英三」(「イーハトーブ短信24」 宮沢賢治記念館 平成八年三月)

佐藤成C「賢治と気仙との関り」『賢治と気仙』共和印刷企画センター 平成十五年六月

島田隆輔「八歌ひめVの詩系譜を読む」『宮沢賢治論 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月

平山英子 「文語詩「齒科医院」論 「磁気嵐」考」(「論攷宮沢賢治10」 中四国宮沢賢治研究会 平成二十四年一月)

26 「かれ草の雪とけたれば」

かれ草の雪とけたれば
裾野はゆめのごとくなり
みぢかきマント肩はねて
濁酒をさぐる税務吏や
はた兄弟の馬喰の
鶯いろによそほへる
さては「陰気の狼」と
あだなをもてる三百も
みな恍惚とのぞみある

大意

枯れ草の上に積もった雪が融けたので
裾野は夢のようなありさまだ
短いマントの肩をそびらかして
密造酒の摘発をしようとする税務署員や
あるいは兄弟で馬喰をして
鶯色の服などを着ている者も
あるいは「陰気なオオカミ」という
あだ名を持った三百代言も
みながうっとりしながら裾野の雪解けの様子を見守っている

モチーフ

岩手山の雪解け水が海のように(下書稿による)見える様子を、
人々からは嫌われる存在であった税務吏や馬喰、三百代言たちも

恍惚として眺めていたという作品。一癖ありそうな連中が、仲良く雪解けの様子を見ながら感嘆の声をあげるといふことは、実際にはまずないだろう。賢治はかつて、たまたまこうした面々と居合わせたことがあり、その経験と自分が目にした雪解け時の岩手山のイメージを頭の中で合成して定稿に仕立てたのだろう。賢治は本作を、一種の浮世絵のようなものとして、近代的リアリズムとは異なった様式美を打ち出そうとしたのではないかと思われる。

語注

裾野 おそらくは岩手山の裾野を示すのであろう。下書稿(二)では、はじめ「海のごとく」と書かれていたものが改稿されて「ゆめのごとく」となっている。春先の雪解けの様子を海に喩えたのだと思われるが、「二百篇」の「遠く琥珀のいろなして」でも、雪解け水が流れる岩手山の裾野を描いている。

濁酒 酒糟を濾していない白く濁った酒(にごりぎけ)のことだが、岩手県においては密造酒のことを意味する場合が多い。酒を自家醸造するのは農民の楽しみの一つであり、特に東北地方にその傾向が強かった。理由はさまざまにあるが、清酒一升の値段が玄米四升分もしたことが、濁り酒なら屑米からでもできたこと、といった経済的な理由、そして寒さも影響したものとと思われる。二濁酒に関する調査(第一報) 旧農林省積雪農村経済調査所作成(昭和十一年二月) 『宮沢賢治の農民観を知るために 復刻「濁酒」に関する調査(第一報)』(センダード賢治の会 平成十年八月) 以下、同書およびその解説を参考にした)では、東北地方の「遅れた社会機構と貧困化せる農家経済」に原因があり、「個々の濁酒密造矯正の手段も亦その取締もそれがこの根本的な点に触れない限り徒労に過ぎないであらう」とまとめている。そもそも、明治三十二年一月に濁り酒の製造が禁止されたのは、酒造業者の保護と、日清戦争後の増税計画の一環で(酒税による租税収入は地租を超えてトップとなつ

た)、仙台税務監督局の間税部長であった大平正芳元首相でさえ、「東北地方におけるかような貧乏な百姓は、国家の恩恵を全く受けない反面、徴税という名においてかかる桎梏に苦しんでいるのである。私は国家とか国法というものにまつわる冷厳な約束というものに、ある種の反感を感じた」と書いているように、税金を取る側の人間にも無慈悲な法律に映ったようである。賢治は「詩ノート」に「一〇九二 藤根禁酒会へ贈る 一九二七、九、一六、」といった作品を書いていることから明らかに、酒を嫌っていたことは有名だが、農民たちにとってほとんど唯一の楽しみであった濁り酒を作り、飲む自由を奪うことにはかなり同情的だったように思う。伊藤与蔵・菊池正「賢治聞書」(昭和四十七年八月 ガリ版。再録・大内秀明編著『賢治とモリスの環境芸術』 時潮社 平成十九年十月)にも、「先生はこのどぶろくを各家庭で自由に製造できるようにになると、よつほど楽しみが増し、共同作業やお祭りなども自分たちのものになると考えられたと思います。とにかく先生は濁酒の製造を許可したほうが良いという意見でした」という証言が残っている。

税務吏 密造を摘発するための税務署員。東北における濁酒の意味から考えれば、悪役ということになる。賢治は密造酒製造者の摘発をめぐる童話「税務署長の冒険」がある。

馬喰 馬の売買や周旋をする人。岩手県は全国有数の馬産地であったが、中でも岩手山麓には馬を飼う農家も多かったため、自動車普及する以前は、岩手県内で大々的に活動していたものと思われる。人をだます存在として、陰口をたたかれることも多かった。

三百 「三百代言」のこと。明治初期に代言人(弁護士の旧称)の資格なしに他人の訴訟等を引き受けた者の蔑称。弁護士の蔑称としても用いられた。正義の味方のイメージであるより、人にきらわれる存在としてのイメージが強い。

評釈

「冬のスケッチ」第二八・二九葉として書かれた下書稿(一)、黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(タイトルは「早春」、手入れ段階で「人民の敵」。青インクで⑤)、「一百篇」所収の文語詩「ポランの広場」の定稿の裏面に「ポランの広場」下書稿(五)と共に書かれた下書稿(三)(断片)、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。定稿には全一連のためか丸番号がなく、句読点もない。

かつて「人民の敵」というタイトル案があつたことからわかる通り、登場する人物たちは民衆から嫌われるような存在であつた。税務署員は、東北の農家にとつてはほとんど生存権をも意味した密造酒の摘発をする憎い存在である。馬喰は、岩手には欠かせない仕事であつたが、赤田秀子(後掲)が書くように、「農民が大切に育てた馬を安く買い叩いたり、仲介人として不当な利益にありつこうとする馬喰も少なくなつたのであろう」。三百代言に關しては、もちろん正義を貫くための者もいたのだから、**「陰気の狼」というあだ名からもわかるように、冷たさや非情さが強調されている。**

恩田逸夫(後掲)は、賢治がイブセンの戯曲「民衆の敵」を読んだのではないかとする。大正十四年には既に翻訳も出ていたというが、ありえない話ではないと思う。「民衆の敵」は温泉開発による経済発展をめざす兄と、環境保全を目指す弟が対立し、民衆を思つて活動しているはずの弟が「民衆の敵」として追い詰められるといった筋で、恩田は「賢治が関係したのは花巻温泉であるが、彼は温泉地が消費的な歓楽街になるのではないかと懸念している。そして、この点で、温泉の開発を計画した当事者を、民衆の敵と見ていたようである」とする。しかし、「民衆の敵」とされるのが、恩田論だと開発を批判する側でなく開発する側に入れ替わっており、また、「人民の敵」のタイトル案は下書稿(二)の手入れ

段階で一度だけ現れたのみで、その後継がされていないことについてどう考えるべきなのかという疑問が生じる。さらに税務吏・馬喰・三百しか現れていない文語詩から、花巻温泉批判をどう導き出すことができるのかという点についても、すつきりしないところがある。恩田論文は『校本全集』も刊行されていない時のものだと思えば、仕方がない面もあるが、ともあれ、イブセン戯曲のタイトルともなった言葉が改稿の途中で頭をかすめた可能性については、考慮しておいてよいように思う。

また、関登久也（「賢治の横顔」『宮沢賢治随聞』角川書店

昭和四十五年二月）は、昭和六年五月か六月頃、仙台に向かう列車の中で偶然、賢治に会ったことがあり、「歌を作りませんか」と持ちかけられたことがあるという。関が「白雲は空に飛びつつ麗けし松の木原に光る雲山」と詠むと、賢治は「ハハア短歌です、これは写実の歌だ、これは俳句の境地だ」と言って、賢治も歌を詠んだと書いている。「七五調の短詩で農民の悲哀を題材にしたものだと記憶しています。全集を見てもその詩は見当たりませんが、詩中「税吏」「三百」「馬の背」という語句がありまして、一面沈鬱な気分がありながら新鮮な歌だと思いました」と回想している。馬の背ではなく、本作に登場するのは馬喰であるが、馬、税吏、三百と共通するものがあることから、何か関係するところがあるように思う。

さて、下書稿(一)とされる「〔冬のスケッチ〕」第二八・二九葉をあげてみよう。

※

気圏かそけき霧のつぶを含みて（以上第二八葉）
東京の二月のごとく見ゆるなり（以上第二九葉）

腐植質のぬかるみを
あゆみよりしとき
停車場のガラス窓にて

わらひしものあり
又みぢかきマント着て
税務属も入り来りけり。

※

兄弟の馬喰にして
一人はこげ茶
一人は朝のうぐいすいろにいでたり
ひげをひねりてかたりたり。

対馬美香（後掲A、B。引用はB）は、「冬のスケッチ」では、ある「停車場」に入ってきた「税務属」や中で談じる兄弟の「馬喰」などの様子を、賢治が、じつと観察して記したものです。したがって定稿の詩文からは特定しがたかったこの作品の舞台も、おそらく「冬のスケッチ」と同じ「停車場」と考えてよいでしょう」とし、「人民の敵」と位置付けられた彼等とて、「停車場のガラス窓」からのぞまれる「夢のごと」き早春の「裾野」のたたずまいに、まさに「みな恍惚とのぞみある」というのです」とする。赤田（後掲）は、「無邪気すぎる読み」だとして対馬論を批判し、「停車場のガラス窓から望まれる情景では、みな恍惚とするほどの景色は臨むべくもない」とする。たしかに停車場のガラス窓から、裾野の大洪水の様子が見渡せたとはいえないし、そもそも「冬のスケッチ」には「人民の敵」の面々が現れることはあっても、枯れ草も裾野も何も登場していない。

では、定稿は、どのような場所を想定して読むべきなのだろうか。赤田（後掲）は、「おそらく、詩人が若き日の早春、岩手山麓を彷徨した折にこうした情景に出くわした体験があったのだろう。病床の詩人が、かつての自然との体験を、かつての草稿「冬のスケッチ」の一断章と重ねて虚構化し、自己の体験を多くの人々に仮託して、再体験することとくに文語詩と言う世界を構築したのではなかったか」とする。確かに岩手山の裾野が舞台となつて

はいようが、そこに税務属と馬喰と三百とが仲良く並んで、流れ出る水に接するようなことが現実としてあり得たとは思えない。まして、そんな状況に賢治がたまたま出くわしてしまうといったことは、まず起らない。つまり、赤田の書くとおり、かつての風景と「(冬のスケッチ)」の一断章を重ねて作った作品なのだろう。しかし、いくら虚構ではあるにしても、一癖も二癖もあるような連中が連れ立って岩手山に登り、その裾野で大洪水を見て恍惚とするなどという光景は、ほとんど非現実的ともいうくらいにリアリティを欠いていないだろうか。ただ、この自然と人間との対比を、近代的な目で見るのではなく、近世的な、浮世絵的な目で見てみたらどうだろう。

辻惟雄は葛飾北斎の富嶽三十六景について、「聖なる山と俗世界の人間生活を奇抜なアングルで対比させたこの仕事により、かれの画名は不動のものとなる」(『江戸時代の美術』『日本美術の歴史』東京大学出版会 平成十七年十二月)と書いているが、「かれ草の雪とけたれば」では、偉大なる岩手山の雪解水と卑小な人間たちが対比されており、まさに北斎的な構図であるとは言えないだろうか。

「一百篇」には「暁眠」や「浮世絵」など、浮世絵が登場する文語詩があるが、賢治は「春と修羅 第二集」にも「七五 浮世絵 北上山地の春 一九二四、四、二〇、」という作品を残しており、視覚芸術と言語芸術の敷居をとりはらおうと試みているように感じられる。

花巻農学校で修学旅行を引率した後の報告書である「修学旅行復命書」では、実際の風景を浮世絵風に見立てようとしていた賢治の自然観、芸術観の一端が見て取れる。

車窓石狩川を見、次で落葉松と独乙唐檜との林地に入る。生徒等屢々風景を賞す。蓋し旅中は心緒新鮮にして実際と離るゝが故に審美容易に行はるゝなり。若し生徒等この旅を終

へて郷に帰るの日に新に欧米の観光客の心地を以てその山川に臨まんか孰れかかの懐かしき広重北斎古版画の一片に非らんや。実に修練斯の如くならざるよりは田園の風と光はその余りに鈍重なる労働の辛苦によりて影を失ひ、農業は傍観して神聖に自ら行ひて苦痛なる一の skimmed milk たるに過ぎず。

すべての文語詩が浮世絵的なものであるとは言わないにしても、近代詩的な読みを拒むかのごとき本作などについては、こうした視点から考えてみる必要があるのではないかと思う。

先行研究

恩田逸夫「宮沢賢治と「人民の敵」」(『宮沢賢治論2』東京書籍 昭和五十六年十月)

青山和憲「ポランの広場」と「ポラーノの広場」(II) 「うた」の変化の意味するもの」(『言文37』福島大学国語国文学会 平成元年十二月)

対馬美香A「宮沢賢治における地域社会への視座」『密醸』をめぐって」(『秋田経済法科大学地域総合研究所報1』秋田経済法科大学地域総合研究所 平成七年四月)

対馬美香B「賢治作品に見る郷土史」(『宮沢賢治新聞を読む』社会へのまなざしとその文学』築地書館 平成十三年七月)

赤田秀子「文語詩を読むその4 「かれ草の雪とけたれば」を中心に」(『ワルトラワラ15』ワルトラワラの会 平成十三年十一月)

27 退耕

①ものなべてうち訝しみ、こゝろ粗き朋らとありて、

黄の上着ちぎるゝまゝに、 栗の花降りそめにけり。

②演奏会リサイタルせんとのしらせ、 いでなんにはや身ふさはず、
豚いのはも金毛となりて、 はてしらず西日に駆ける。

大意

あらゆるものを疑ってかかるような、声も荒々しい友らと一緒に生活し、黄色い上着もあちこちがほころびたまま、栗の花が降り始める季節を迎えることとなった。

演奏会をするという便りが届いたが、もはやそれに出席するような身ではなくなつた、豚の毛は西日で金色に輝き、太陽に向かってはてもしらずに走っている。

モチーフ

賢治は大正十五年三月に花巻農学校を退職すると、四月からは宮沢家別荘にて独居自炊の生活を始めた。本作がこの時期に取材したものであることは想像できるが、粗末な服を着て、昔の知人から「演奏会」に招待されても、もはやそんなものに参加できるような身の上でもなくなつてしまった：と、「退耕」の現実について、引退以前の生活と比較して幻滅しているように思える。豚も死の方角である西に向かっているということからすると、希望にうち溢れた詩であるとは解釈ににくい。しかし、「こゑ粗き」人々を「朋ら」と呼んでいることからすれば、案外、新しい生活にも慣れ、高価な服装をしたり、大規模な演奏会を、もはや懐かしいとも思わないような境地にいるようにも読めてくる。

語注

退耕 官職をやめて耕作に従事すること。あるいは官職をやめて民間に下ること。『広辞苑』や『日本国語大辞典』にも載っている一般の熟語のようだ。国会図書館のOPACによれば、荻野

独園(他)『退耕語録』(明治二十九年二月)、沢柳政太郎『退耕録』(明治四十二年)、白須皓『退耕余録』(昭和四年)などの書が刊行されており、「百篇」の「社会主事 佐伯正氏」に実名で登場する佐伯正は、岩手毎日新聞紙上で「退耕漫筆」という文芸エッセイを担当していた。

うち訝しみ うたがうこと、気がかりに思うこと。

こゑ粗き朋ら 農村生活により知り合った仲間たちの声が荒々しいということ。「演奏会せん」という元の職場の人たちとの差をつけているのだろう。

栗の花 夏の季語で、岩手では六月から七月頃に白い花を咲かせる。関連作品によれば、四月頃の取材にもとづくものだというので、文語詩では時期がずらされている。歌人・詩人の木村草弥によれば、「栗の花は、ちょうど男性のスペルマの臭いと同じ香りを発する。だから栗の花というと、文学的には「精液」あるいは「性」の暗喩として使われることが多い」とされ、このイメージで作られた俳句が多いことを書いている (K-SOHYA POEM BLOGJ <http://poetsohya.blog81.fc2.com/blog-entry-210.html>)。あえて季節をずらせているところからすると、賢治にもそうした意図があったのかもしれない。

演奏会 一九二七年(昭和二年)六月二十五日には、岩手県公会堂が竣工した記念に音楽大演奏会が催され、出演した太田クワルテットに宛てて、賢治は「今宵 楽聖と共にあり」という祝電を送ったと言われている。定稿とは時期も一致しているので、この時の経験をもとにしている可能性もある。ただ、中ぶんな(『光炎に響く』新風舎 平成十八年十一月)によれば、賢治が祝電を送ったのは、音楽会の会場や内容から昭和四年六月の赤沢長五郎の独奏会だったのではないかともいう。

評釈

黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（一）（タイトルは「退耕」。藍インクで⑤）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。

『新校本全集』では「一百篇」の「巨豚」には共通する詩句があると書かれているとおり、強い関係があったと思われるが、同詩の定稿は次のとおりである。

①巨豚ヨークシャ銅の日に、
棒をかざして髪ひかり、
金毛となりてかけ去れば、
追ふや里長のまなむすめ。

②日本里長森を出で、
鬚むしやむしやと物喰むや、
小手をかざして刻を見る、
麻布も青くけふるなり。

③日本の国のみつぎとり、
えりをひらきてはたはたと、
里長を追ひて出で来り、
紙の扇をひらめかす。

④巨豚ヨークシャ銅の日を、
旋れば降つ栗の花、
こまのごとくにかたむきて、
消ゆる里長のまなむすめ。

「巨豚」では「退耕」の最終行に登場する豚をメインにしていくが、この「巨豚」の先行作品は「春と修羅 第三集」の「一〇三二」「あの大ものヨークシャ豚が」一九二七、四、七、「であるという。先行する「詩ノート」に書かれた「一〇三二」「扉を推す」一九二八、四、七、」をあげてみる。

扉を推す
森と
西に傾く日

となりの巨きなヨークシャイヤ豚が
金毛になり

独楽のやうに傾きながら

まつしぐらに西日にかけてゐる かけてゐる

追つてゐるのはその日本の曾長の娘

棒をもって髪もみだれかゞやきながら豚を追ふ

一九二七年と言えば、賢治が独居自炊の生活を始めてちょうど二年目の春、「詩ノート」の「一〇三三」「南から また東から」

一九二八、四、二、」に「今年はおれは／ちやうど去年の二倍はたしかにはたらける」と書いていた時期である。「詩ノート」の一〇二三～一〇三〇あたりの作品は「春と修羅 第三集補遺」に収められている「心象スケッチ、退耕」にまとめられ、これが発展して「五十篇」の「温く妊みて黒雲の」が成立しているが、状況や気分については本作でも共通する部分が多いように思う。

もちろん賢治自身の経験や心情がそのまま文語詩になっているわけではなく、虚構化がほどこされているとは思いますが、本作における「黄の上着」は、賢治が愛用していたとされるカーキ色の作業服を思い出させるし、「演奏会」については、ちやうど昭和二年六月に岩手県公会堂落成記念に催された大演奏会とも時期的に近く、興味深いところだ。

一句めの「ものなべてうち訝しみ」は、羅須地人協会時代の賢治の経験を書いたものだとする、賢治がやることなすこと全てに農村の人々から疑念を持たれた経験が下敷きになっているとも思える。ただ、第一連における四句が、それぞれ独立しているようにも思えるので、一句めと二句めは、切つて読むべきなのかもしれない。すなわち、「こゝろ粗き朋ら」が退耕者を「うち訝し」んだのではなく、農村にやつてきた退耕者の方が「うち訝し」んだ可能性（「こゝろ粗き朋ら」のことを？）あるいは世の中全体に対する疑い（「こゝろ粗き朋ら」のことを？）もあるように思う。

ところで、「退耕」の四行めは、これまで退耕者の周辺を追いかけていた視点が、唐突に変わっている印象があるが、賢治はここで何を書こうとしていたのだろうか。

豚を西方、つまり入り日の方角であり極楽浄土があると言われる方角に走らせていることから、この豚に死が近いことが匂わされ、どこかしら寂しい感じが漂っているが、「二百篇」の「巨豚」や先行する「一〇三二」「扉を推す」から考えると、退耕者が農村での新しい生活になかなかなじめない様子を書こうとしていたのではないかと思われる。というのも、賢治は豚を追いかけている者について「日本の酋長の娘」と書いているからだ。

明治二十二年初版の『言海』で「酋長」を調べてみると「魁帥カシラ、蛮民マシナドノ長」とあることから、豚を追いかけることを、賢治は未開の野蛮な民族のようだと言っていることになる。賢治に民族差別的な発想はなかったはずだと思われるかもしれないが、童話「税務署長の冒険」には、「できそこないの密造酒は）アイヌや生蕃にやってもまあご免蒙かうむりませう」ともあることから、賢治も民族的なステレオタイプから脱し切れていなかったことは明白だ。つまり、農村は文明に取り残された野蛮な場所であったと強調されているわけである。

では、その酋長の親（＝里長）の方はどう書かれているかというと、「巨豚」では「みつぎとり」、つまり、徴税人に追いかける存在だと書かれている。しかし、この徴税人も、追いかけているはずの里長を目の前にしながら扇をひらめかしているところからすると、里長を摘発するための明確な証拠があるというわけではなく、何かの脱税事件の捜査中で張り込んでいるということなのだろう。

こう書けば、童話「税務署長の冒険」で、ユグチュユモト村の名誉村長や校長、議員までが密造酒造りに加担していた物語が思いつき出されよう。となれば「巨豚」でも、徴税人は里長のことを、密醸に関わっている人物として追いかけ、なにか決定的な証拠で

も得ようとしている場面なのかもしれない。

里長と密醸を関連付けたのは、何も童話からの連想だけではない。栗原敦（「濁密」事情・「大正十年家出東京」事情 新聞報道から）「賢治研究37」 宮沢賢治研究会 昭和六十年二月）が紹介しているように、大正三年十月二十二日の「岩手毎日新聞」には、

紫波郡紫波村村長藤尾寛雄（四八）は其妻と共に謀の上濁酒を密造し自家用に供しゐたるを盛岡税務署員のために発見され酒造税法違反として過般当区裁判所へ起訴されたるは既報せしが昨日同区廷に於て宮島判事高木検事正の係りにて公判開廷せり

といった事件が報道されており、「税務署長の冒険」に描かれたことは、決して童話の中だけのできごとではなかったからである。

しかし、揶揄の対象は、豚を追い回す里長の娘や、徴税人に追われる里長だけであつたかというところではない。賢治は「みつぎとり」に対してもわざわざ「日本の国の」を付けていることから、この里長のような野蛮人を相手にする人間も似たようなレベルの野蛮人だ、とでもいいたげである。

たしかに酒の密醸は犯罪であつた。しかし濁酒の製造が禁止されたのは明治三十二年一月のことである。農民たちにとつて、余つた米やクズ米を用いて酒を作る楽しみは格別のものであつたが、酒造業者の保護と日清戦争後の増税計画のため、突然、奪われてしまったのである。名誉村長や校長、議員でさえ、この悪法には納得できなかったというのが、おそらく密醸事件が頻発したことの真の理由だったのであろう。

酒を嫌つたとされる賢治だが、「先生はこのどぶろくを各家庭で自由に製造できるようにすると、よっぽど楽しみが増し、共同作業やお祭りなども自分たちのものになると考えられたと思います」とにかく先生は濁酒の製造を許可したほうが良いという意見でした（伊藤与蔵・菊池正「賢治聞書」 昭和四十七年八月・ガリ版）

再録・大内秀明編著『賢治とモリスの環境芸術』時潮社 平成十九年十月）という証言も残っているように、賢治は農民たちが各自で酒を醸造することに関してはおおらかであり、むしろ徴税人の方に批判的であったように思う。「日本の国のみつぎとり」という言葉には、そんなニュアンスも込められていたように思う。

賢治は「退耕」の四行めに「豚はも金毛となりて、はてしらず西日に駆ける。」と書いたが、かつては、きちんとした身なりで演奏会に行っていたこともある退耕者だが、その新しい生活の場である農村が、かくも野蛮な所であったということを示そうとしたのだろう。

さて、このように見てくると、退耕者を描いた本作はもちろん、里長とその娘、徴税人を描いた「巨豚」でも、農村の文化度の低さが目立つ結果となっている。しかし、「巨豚」の方はユーモラスな皮肉が多いことから、一種の社会諷刺として楽しめるにしても、「退耕」では、あまりユーモアも感じられず、退耕者の優雅な過去と悲惨な現在が対比されるだけで、読後感もなんとなくものさびしい。

が、引退して耕作する日々を送る退耕者が、この決断を後悔しているのかというと、必ずしもそうとは言えないように思う。というのは、農村における「こゑ粗き」人々に対して、彼は「朋ら」と呼んでいるからだ。

賢治は「農民芸術概論綱要」で、「おお朋だちよ、いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようでないか」と書いていた。さすがに文語詩制作当時の賢治は、そんな言葉を慢心の至りだとして自己批判したであろうが、立派な服装で演奏会に入りするような生活こそが理想的・文化的なものだとは思っていなかったと思う。都会的な物質文明から潔く離脱し、時に粗野であったり野蛮であったりする「朋ら」と交わることでできたこの退耕者は、最晩年の賢治にとっても、いや、最晩年の賢治であっ

たからこそ、理想的な人生を送る人物に見えたかもしれない。

先行研究

岡井隆「『文語詩稿』の意味」(『文語詩人 宮沢賢治』 筑摩書房

平成二年四月)

島田隆輔「命名の意図 文語詩稿『電気工夫』生成の一面」(『論

攷宮沢賢治10』 中四国宮沢賢治研究会 平成二十四年一月)

28 「白金環の天末を」

① 白金環の天末を、
大煙突はひさびさに、
みなかみ遠くめぐらしつ、
くろきけむりをあげにけり。

② けむり停まるみぞれ雲、
大工業の光景なりと、
峽を覆ひてひくければ、
技師も出でたち仰ぎけり。

大意

白金環のように光る地平線の彼方から、川の流れば遠くめぐつてくるが、
工場の大煙突はひさしぶりに、黒いけむりをたちあげている。

けむりは上空のみぞれ雲のあたりに留まり、山と山に挟まれた町中に澱んでいると、
まるで大工業のような光景だと、技師も工場の外に出てきては煙を仰いでいた。

モチーフ

北上河畔に建てられた煉瓦工場。創業者は私利私欲に奔る人物であったらしいが、倒産のいざこざを脱し、ついに黒い煙が立ち上

った。かつて生徒たちと泳ぎ、イギリス海岸と名付けた川岸のすぐ近くに工場はあったが、黒いけむりは、これから花巻の町を充滿させてしまい、また、花巻の人の心まで充滿させてしまうのではないか。下書段階のタイトル案に「インチキ工業」とあったことから、工場への期待より不安の方が窺える作品となっている。

語注

白金環の天末 細い白金線を輪にしたもの。金属元素の定性分析や細菌試料の取り出し、表面張力を量る際に利用される。ここでは天末 (skyl ine)、すなわち地平線が白金色をしていることわ指すのだろう。

大煙突 北上川河畔にあった花巻煉瓦会社の大煙突のこと。下書稿(一)に「宣伝用に築きける」とあるように、「企画展示」「宮沢賢治・イギリス海岸」展 教育者・科学者・詩人の集大成(宮沢賢治イーハトーブ館 平成十年七月一日〜十二月二十七日)に掲載された写真には「ハナマキレンガ」という字が確認できる。**みぞれ雲** 「みぞれ雲」と呼ばれる雲はないが、工場の煙を一体になるような雲となると、比較的低層にできる暗灰色で時に雨や雪をもたらす乱層雲(ニムブス)だったのでないかと思う。

木村東吉「資料と考察『春と修羅』『詩ノート』創作日付の日の気象状況」(『近代文学の形成と展開』和泉書院 平成十年二月)の紹介する盛岡気象台・水沢天文台のデータによれば、巻積雲(上層雲)、高積雲(中層雲)、層積雲、層雲(下層雲)、積雲(対流雲)の表示があり、天候は晴れときどき曇であったようだ。

大工業 梅津東四郎によって創業された花巻煉瓦工場のこと。先行作品である「七四一 煙 一九二六、一〇、九、」には、「二ペンすつかり破産した」とあるが、同工場は大正八年に設立したものの、花巻近辺ではまだ煉瓦が普及しておらず、また、大正十二年に関東大震災が起るとレンガは耐震性に欠けるとい

うことから売れ行きが落ち、ついには倒産したという。社長の梅津は「煉瓦というものは、いつか必ずものになる事業だと思つて取り組んでみたが、遺憾ながら、花巻ではまだ駄目だ。そこでお前に相談だが、今あるこの借金をみんな背負うなら、工場から土地から全部譲るべと思うが、お前やってみるか、な^じじよだ？」の言葉から、当時二十五歳だった元給仕・伊藤祐武美に会社を任せたと(金野静一『伊藤祐武美伝 血風 惨雨に耐えて』同書編集刊行委員会 昭和六十一年七月)。「並外れた才知をもち、忍耐、努力の人でもあったその青年は、その後見事に工場を再建したばかりか、戦前戦後を通じて花巻の発展に計り知れないほどの大きな貢献をし」たという(「賢治・作品散歩 その六」「事務局だより」宮沢賢治学会イーハトーブセンター事務局 平成三年十月)。「くろきけむり」が「ひさびさに」あがったとあるのは、金野の前掲書をたよりに考えると、赤字続きで送電が止められており、金が入った時にだけ電気会社に送電を頼み、休み休みで工場を稼働させられなかったからではないかと思う。

評釈

「春と修羅 第三集」所収の口語詩「七四一 煙 一九二六、一〇、九、」が書かれた黄野(2626行)詩稿用紙の裏に、同詩を改稿し、「七三二」[黄いろな花もさき] 一九二六、八、二一〇、のアイデアを取り入れながら、「春と修羅 第三集補遺」所収の「(西も東も)」を書き、それを取り囲むようにして書かれた下書稿(一)、その裏面に下書稿(二)(タイトルは「インチキ工業」、後に「疑似工業」、黄野(220行)詩稿用紙に書かれた下書稿(三)(タイトルは「近似工業」、後に削除。鉛筆で⑤)、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。右にあげた三作が先行作品。なお、本作と共通する部分はあまりないが、「七三二」[黄いろな花もさき]の紙面には文語詩化の途中であると思われる

る「未定稿」の「たゞかたくなのみをわぶる」があり、広い意味での関連作品。
まず先行作品の「七四一 煙」から見ていきたい。

川上の

練瓦工場の煙突から

けむりが雲につゞいてゐる

あの脚もとにひろがった

青じろい頁岩の盤で

尖つて長いくるみの化石をさがしたり

古いけもの足痕を

うすら濁つてつゞやく水のなかからとつたり

二夏のあひだ

実習のすんだ毎日の午后を

生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに

いま山山は四方にくらく

一ぺんすつかり破産した

練瓦工場の煙突からは

何をたいてゐるのか

黒いけむりがどんどんたつて

そらいつぱいの雲にもまぎれ

白金いろの天末も

だんだん狭くちぢまつて行く

これについて小沢俊郎（「煉瓦工場」 『小沢俊郎 宮沢賢治論集 2』 有精堂 昭和六十二年四月）は、「負債整理の手段としての偽装破産でもあろうか、債権者や労働者の犠牲の上にぬけぬけと再生した工場は、もくもくと煙を出している。人間の不誠実を象徴する「黒い煙」である」としている。「春と修羅 第三集」所収の「七三八 はるかな作業 一九二六、九、一〇、」にも「瓦工

場」が現れ、そこには「楽しく明るさうなその仕事だけれども／晩にはそこから忠一が／つかれて憤つて帰ってくる」ともあることからの判断であろう。

一方、木村東吉（後掲）は「煉瓦工場の破産を、偽装破産とする表現はなく」、「他者を一方的に批判するモチーフは認められない」として小沢説を批判し、「忠一が／つかれて憤つて帰ってくる」のも、煉瓦工場での仕事からではなく、「練瓦工場の向ふのはうで」行われている共同作業からであるとす。そして木村は、「一度挫折を経験したものが「黒いけむり」をあげている姿に、作者の共感が寄せられている」のだとする。

たしかに「黒いけむり」に賢治の心象の一端は託されていたかもしれないが、小沢的な視点も残しておくべきだと思う。というのも文語詩のタイトル案にあるように、そこが「インチキ工業」や「擬似工業」と呼ばれるような禍々しい場所であると、賢治が認識していたからだ。島田隆輔（後掲）は「見せかけのものに翻弄される危うさ」を指摘しているが、まずはその方向で押さえておくべきだろう。

「インチキ工業」（のちに「擬似工業」とされた文語詩の下書稿（二）は次のとおり。

白金環の天末の

こなたに立ちて広告の

大煙突はけふとみに

黒きけむりを吐きあぐる

みぞれの雲のくらくして

けむりをとりてひろがれば

大工業のさまなりと

技師は写真をとりてけり

煉瓦工場の大煙突は、もちろん煉瓦を作るために必要だったの
だろうと思われるが、下書稿(-)によれば、「宣伝用に築きける」
「なかば崩れし」ものであったというのである。煙突や煙、煉瓦
工場といったもの自体について、賢治は特に嫌ってはいなかった
とも思われるが、倒産に遭いながらも、大々的に会社の名前を煙
突に書き、さも「大工業の光景」であるかのように見せかけ、こ
れからの売り込み(あるいは資金調達?)に利用しようとする
「技師」を、賢治は寒々しい思いで見ているのではないだろうか。

花巻煉瓦工場は、花巻の豪商・梅津東四郎によって創立された
ものだが、深沢あかね(「近代化過程における地方都市商業者の関
わり 岩手県花巻地方のインフラ整備を中心に」 「東北大学大学
院教育学研究科研究年報54」1 東北大学大学院教育学研究科 平
成十七年十二月)によれば、東四郎の父・梅津喜八は、仙人峠を
越える行商人から身を起し、明治十二年から県会議員を務めた人
物で、花巻銀行頭取(明治三十四年〜四十一年)を務め、貴族院
議員ともなっている。長男の倉之助は花巻で製糸場を作り、東京
で梅津商會を創業するが若くして亡くなり、次男の東四郎が後を
継ぎ、花巻でシールドル工場や煉瓦工場を起し、盛岡銀行や岩手軽
便鉄道、花巻温泉などの重役を務め、明治三十一年には県内で第
四位の多額納税者となっている。しかし、この人物の評判はあま
りよくないようだ。

昭和六年十一月、青森市の第五十九銀行で取付け騒ぎが起こる
と、岩手を代表する三銀行(盛岡銀行・岩手銀行・第九十銀行)
にもこれが波及し、昭和七年には三行それぞれが新規業務停止ま
たは休業することとなり、大混乱に陥った。強制捜査が行われる
と、岩手財界人が利益追求のために法も倫理も無視していたこと
が暴露されていった。

小川功(「役員関係の情実融資と『朦朧会社』 岩手金融恐慌の
破綻銀行を中心に」 「滋賀大学経済学部研究年報7」 滋賀大学
経済学部 平成十二年)によれば、銀行が不当貸付や情実融資を行

うために「保全会社」という持ち株会社(朦朧会社、ほうまつ会
社などと呼ばれた)が大正中期から作られ始め、岩手では大正十
一年の段階で九十二社の保全会社があったという。ここで虚構の
貸借関係を作ったり、帳簿を誤魔化したりして、「多くの富豪は苦
心研究色んな方法で盛んに脱税して腹を肥やし」(大正十一年十一
月二十二日 「岩手毎日新聞」) たという。盛岡銀行を率いた「金
田一氏の直参として腕を振るひ、金田一氏の信任浅からずと自信
してゐた」(昭和七年十一月二十三日 「東京朝日新聞」) のが梅津
東四郎で、例えば大正八年設立の梅津合資会社では、自身が重役
であった盛岡信託銀行に融資させ、その額は昭和四年七月には信
託勘定で〇・九万円、固有勘定で一・六万円、八年時点で信託勘
定で二・七万円、固有勘定で〇・三万円に上ったという。「回収不
能に帰したる六千三百余円は常務取締役梅津東四郎氏が花巻町に
於いて自己の貸金が回収不能に帰したるを肩替りせられたもの」
〔盛岡信託株式会社沿革史〕とのことで、小川によれば「梅津
合資会社のツケをまわした私利行為であった」という。

梅津東四郎は賢治の父・政次郎と一緒に花巻川口町の町会議員
を務めており、花巻電気株式会社(花巻川口町の町会議員
を兼ねて)の役員なども共に務めていることから、賢治にもその人とな
りや合資会社の内情などは耳に入っていたであろう。

梅津から煉瓦工場を引き継いだのは煉瓦工場で給仕をしていた
伊藤祐武美であった。伊藤は土地と工場を手にするが、借金をす
べて背負ったうえ、「料金前払いで電気会社から時限送電を受けな
がら、必死の思いで」(「賢治・作品散歩 その六」 「事務局だよ
り」宮沢賢治学会イーハトーブセンター事務局 平成三年十月) 立
て直しを図ったのだという。

金野静一(『伊藤祐武美伝 血風惨雨に耐えて』 同書編集刊行委
員会 昭和六十一年七月)によれば、伊藤は花巻の土族出身であり
ながら、父が「平民新聞」などを愛読していたことなどから余戒
人(警察から要視察人として危険視された人物)として花巻を追

放されて父と生別し、貧しい幼年時代を花巻で送った。ワンパク少年として小学校時代を終えると、東北学院中等部に進学するが、結核により中退。花巻で療養生活を送るうち、大正八年に給仕として花巻煉瓦株式会社に入社している。

賢治の五歳年下で花城小学校の後輩でもあった伊藤について、賢治がどう思っていたのかはわからない。しかし、下書きの段階ではあっても、賢治がその工場をインキ工業と呼び、また擬似工業と呼んだことから考えると、岩手の山野に「くろきけむり」が浸透していくように、賢治には人々の心までもが目には見えないう「くろきけむり」で汚染されていくように感じていたのではないかと思えるのである。

先行研究

木村東吉『春と修羅』第三集 「煙」に関する私註と考察 煉瓦工場によせる心象を中心に」（島根大学教育学部紀要人文・社会科学編23-1） 島根大学教育学部 平成元年七月）
島田隆輔「原詩集の輪郭」（宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク△写稿▽による過程）〔未刊行〕 平成二十二年六月）

29 日十春

黒雲峽を乱れ飛び 技師ら亜炭の火に寄りぬ
げにもひとびと崇むるは 青き Gossan 銅の脈
わが索むるはまことのことば
雨の中なる真言なり

大意

黒い雲が谷を乱れ飛び 鉱山技師たちは亜炭の火で暖を取ってい

るほど人々が求めているのは 露頭に青く見える銅の鉱脈なのだ
一方が私が求めているのは真実の言葉
雨の中に聞く真言なのである

モチーフ

「冬のスケッチ」から文語詩にまで発展した作品の一つ。他の文語詩と違って、「わが」という賢治自身をも思わせる言葉が登場し、また、人物や風景の描写よりも、自らの思索や宗教観といったものを直接的に訴えようという異色作である。しかし、ここで述べられている思想、つまり、自分は「銅の脈」といった物質的なものの発掘ではなく、「真言」を発掘するのだという思いは、「冬のスケッチ」や、ほぼ同じ時代に執筆・刊行された『春と修羅（第一集）』や『注文の多い料理店』のみならず、賢治の一生を通じて主張されていたものだと思われ、本作を単なる異色作だとして済ませるわけにはいかないように思う。

語注

峽 舞台となっているのは和賀川に沿った和賀仙人。東横黒軽便線が開業した直後に、賢治はここを訪ねたようだ。
亜炭 生成が地質年代的に若いために石炭化が進んでおらず、水分や不純物の多い粗悪な石炭のこと。下書稿には「褐の炭」「褐炭」ともあるが、これらは色が褐色のもの。日本各地に産するが、熱量が小さいことから工業用には向かず、低価格であったことから、家庭用燃料として用いられた。

Gossan 表土に覆われることなく火成岩体などが地表に露出しているところ（露頭）で、硫化鉱物の多い鉱床では酸化して赤みがかったおり、そこをゴッサン（焼け）と呼んだ。

銅の脈 舞台となった和賀仙人は、『日本地名大辞典』によれば、

古くから鉱山地帯として名高く、網取では金・銀・銅・石膏、岩沢では石膏、水沢では金・銀・銅、奥仙人では金・銀・銅、仙人では鉄を産した。水沢鉱山は大正初年に工夫数六百人、年生産額は約四十万円。しかし、その後は衰退して昭和六年に休山した。仙人鉱山は大正初年に工夫数八百人、年生産額は約四十万円。『定本語彙辞典』によれば、「仙人鉄山の赤鉄鉱は、結晶が美しく、鏡鉄鉱として産出することで名高い」のだという。眞言 密教における真理を表す秘密の言葉。陀羅尼。悪を祓い、善と叡智を求めて発した。サンスクリット語そのままで発音することがあつたために意味不明なものも多いが、そこに神秘的な力が宿ると信じられた。ただ、賢治の場合は、『定本語彙辞典』が書くように「仏、菩薩への帰依、祈願をこめて用いる場合が多」く、必ずしもマジカルな呪文を発見しようとしていたと捉えるべきではないだろう。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第十二葉に書かれたものを元にした下書稿(一)、赤罨詩稿用紙に書かれた下書稿(二)、その左余白に書かれた下書稿(三)、その上余白に書かれた下書稿(四)（この紙面の右肩に藍インクで⑦、中央に鉛筆で⑧）、黄罨（220行）詩稿用紙に毛筆で書かれた習字稿の五種が現存。定稿はおそらく戦災により焼失。定稿本文は『十字屋版宮沢賢治全集』を参考にしているため、句読点や丸番号が実際とは違う可能性が高い。なお、下書稿に共通する詩句が用いられた作品に「一百篇」の「廢坑」と「化物丁場」、「未定稿」の「二川」にて会したりがあるが、三作すべて「〔冬のスケッチ〕」の同一日の取材に基づくものと思われる。最も原初的な形態であると思われる「〔冬のスケッチ〕」には、次のようにある。

※

わがもとむるはまことのことは
雨の中なる真言なり
あめにぬれ 停車場の扉をひらきしに
風またしと吹き出でて
雲さへちぎりおとされぬ。

先に記した三作品に共通する詩句とは、冒頭の二行のことであるが、これは本作においてのみ文語詩定稿にまで引き継がれている。三作品に一つの詩句が流用されるというだけでも珍しいが、自分自身を思わせる詩句を減らす方向で改稿したといわれることの多い文語詩の中で「わがもとむるは」と、極めて強い自我が主張されている点、また、農村や町中で見かけた人間や風景を描くことが多い文語詩の中で、ストリートに自らの宗教観を訴え、第三者がその背景に留まっているだけである点で、異色の作品であると思う。

島田隆輔（後掲A、B）は、東北砕石工場の仕事の都合から、賢治が仙人鉱山に大理石脈を探す必要が生じていたのではないかとし、そこから「〔冬のスケッチ〕」に赤インクで手入れた時期を昭和六年四月前後だったのではないかとするが、その赤インク手入れを採用した下書稿(二)は次のとおり。

わがもとむるはまことのことは
雨の中なる真言なり
風とみぞれにちぎれとぶ
かの黒雲のなかを来て
この山峡の停車場の
小き扉を排すれば
毛布まとへる村人の
褐の炭燃す炉によれり
げに大理石の脉よりも

いやにうちほりのぞみつゝ
わがもとめしはまことのことば
雨の中なる真言なり

大正十一年の春ごろ、賢治は和賀川を遡って仙人鉦山を訪れたようだ。当時は鉦山の町として多くの人が働いていたようだが、冒頭と結末の二行で自分が「真言」を求めていることを宣言するが、間に挟まれている山峡の停車場の様子、村人の様子と、直接的な結びつきが窺えない。下書稿(三)はもつと極端で、

雪とぎすさが山ならず
風ならずみぞれにあらぬ
ちぎれ飛ぶ黒雲ならぬ
はた褐炭の赤き火ならず
わがもとむるはまことのことば
雨の中なる真言なり

と、わざわざ和賀仙人までやってきながら、目に入る景物や人間のすべてを「ならず」「あらず」として受け入れず、あくまで自分は真言を求めるとのたとえを宣言する。どのような経緯でそういう結論になったのか、真言を求めるとはどういうことなのか、そんな読者の思いをも跳ね飛ばし、ただ、真言をもとめるのだという決意の言葉のみが迸っている印象を受ける。

島田(後掲A、B。引用はB)は、「だいたいに【仙人鉄山行】の真の目的(意味)がつかみにくい」。「その往路の現状は残存紙葉によつてある程度想定でき、⑩稿の「げに大理石の脉よりも」とあるところからも鉦山標本採集がたぶん直接の契機であったとも想像されるが、道中のいわばピークには「わがもとむるはまことのことば／雨の中なる真言なり」(第十二葉)ともあって、その真意はかなり複雑である」と書く。

そもそもなぜ賢治は和賀仙人を訪れたのだろうか。鉦山採集はもちろんとしても、賢治には大正十一年十一月に開通してまだ間もない東横黒軽便線に乗車するという目的もあったのではないかとと思う(そして和賀仙人駅から先の工事現場を視察するため)。

そんなことでわざわざ出かけたのか、自らの決意を語るシリアスな内容と合わないではないかと思われそうだが、鉄道の開業ラッシュ時代であった大正時代の賢治の行動を、年譜や作品の制作日付・内容、書簡などから検討してみると、新しい鉄道が開業(区間開業も含む)すると、賢治は数ヶ月のうちに乗車していることが確認できる(信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治 大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」 「賢治研究96」 宮沢賢治研究会 平成十七年七月)。鉄道が開通して便利になれば、利用するのは当然ではないかと思われるかもしれないが、どこかに行くという目的よりも、鉄道に乗ること自体が目的だったと思えるような旅も多かったように思うのである。つまり賢治は鉄道ファン、近年の言葉でいうところの「鉄」であったと思われる。

例えば、教え子の就職依頼のため、亡き妹・トシの魂を追いかけるための旅だと言われる大正十二年夏の北海道・樺太旅行は、大正十一年十一月に宗谷本線の鬼志別―稚内間が開業し、大正十二年五月に稚内と樺太の大泊を結ぶ鉄道省による稚泊航路が開設された直後にあたる。大正十四年一月の三陸への旅は、大正十三年十一月の八ノ戸線の開業直後、また、大正十四年秋には千厩で開催された農業教育研究会に出席しているが、これは同年七月に大船渡線が開業した直後にあたる。

内田百閒は、「用事がなければどこへも行つてはいけな」と云ふわけはない。なんにも用事がないけれど、汽車に乗つて大阪へ行つて来ようと思ふ」と書いて昭和二十六年に阿房列車シリーズを始めたが、賢治は百閒の七歳年下の同時代人だ。また、森鷗外は「十九世紀は鉄道とハルトマンの哲学とを齎した」(「妄想」 「三田文学」 明治四十四年三・四月)と書き、夏目漱石も「汽車ほど

二十世紀の文明を代表するものはあるまい」「草枕」「新小説」明治二十九年九月」と書いている。百閒や賢治でなくとも、鉄道は単に旅行を簡便化するだけのテクノロジーだとのみすべきではなく、多くの人々に世界観の変容を迫るもので、未開の山谷を切り開いて黒い蒸気機関車が轟進するさまは、多くの人をとりこにしたのである（信時哲郎「宮沢賢治論」「鉄道の時代」と想像力）。「国文学 解釈と鑑賞74」6「ぎょうせい 平成二十一年六月」。

では賢治が鉄道ファンであったとして、それが作品にどう関わるのかと言えば、『春と修羅（第一集）』は、大正十一年一月六日の日付を持つ「屈折率」「くらかけの雪」に始まるが、取材地は大正十年六月に開業した直後の橋場線の沿線である。一月六日という日付についても、大正十一年八月上旬に書かれたとされる散文「化物丁場」によれば、橋場線の工事現場を訪ねたであろうその日にあたっている。

また、この散文「化物丁場」は横黒線の車中での会話から話が始まるが、賢治本人とも思われる話者は、「私は、西の仙人鉾山に、小さな用事がありましたので、黒沢尻で、軽便鉄道に乗りかへました」とされている。農学校教員時代の賢治が、仙人鉾山にあつた「用事」とは、おそらく横黒線に乗ること、そしてその延長工事の様子を見ることであつたように思われる。

もちろん、鉄道趣味で全てを説明するつもりはない。賢治は大正四年に岩手軽便鉄道の工事現場を訪ね、「鉄道工事で新しい岩石が沢山出てゐます」（大正四年八月二十九日 高橋秀松宛書簡）と書いているとおり、工事現場の見学は鉄道趣味と鉱物趣味（仕事？）が一致したものだったのであろう。

賢治は大正十年夏に半年ほどの家出生活から戻ると、上京中に開業していた東横黒線（三月）・橋場線（六月）に何度も乗ったようだ。先に賢治は開業直後のさまざまな路線に乗ったと書いたが、賢治は開業マニアではなく鉄道マニアである。季節によって、天

候によって、あるいは時間によってさまざまに変わる窓外の風景を、そして列車自体を堪能したかったのであろう。

そして、帰りの列車が来るまでの時間つぶしとして駅の周辺を散歩し、その副産物として作品ができた場合もあったと思う。例えば「小岩井農場」の下書稿に、「柳沢へ抜けて晩の九時の汽車に乗る／十字に花巻へ着くつかれて睡る／寂しい寂しい。五時の汽車なら丁度いゝんだ」。「滝沢には／一時にしか汽車が寄らないんだ。／もう帰らうか。こゝからずっと帰って／三時頃盛岡に着いて／待合室でさっきの本を読んで／五時に帰らうか」といった部分があるが、ユリアやペムペルの幻想を見て、恋愛を否定して自らの宗教情操を語るといふこの大幻想旅行も、次の列車の時刻までのつなぎという側面があつたことは否定できないように思う。とすれば、「仙人鉄山行」の真の目的（意味）が、東横黒線に乗ることであり、その途中で、自分は雨の中の真言を求めなくてはならないというインスピレーションに打たれたという可能性も十分にあるのではないかと思う。

とはいえ、なぜ停車場の待合室で暖を取る人々を見ながらそうしたインスピレーションを得たのかとなると、明確な答えを示すのが困難だ。

リングゴが木から落ちるのを見たことからニュートンが万有引力を発見したというのはよく知られたエピソードだが、ニュートン以前にもリングゴが木から落ちるのを見た人は何千人、何万人もいただろう。しかし、だれ一人、それを万有引力に結びつける人はいなかった。賢治のインスピレーションは、ニュートンのリングゴよりも、もっと一般性がない。「毛布まとへる村人の／褐の炭燃す炉によれり」（下書稿②）から、どうして「まことのことば」が引き出されるのか。「二百篇」の「廃坑」や「化物丁場」でも、「未定稿」の「二川こゝにて会したり」でも、やはり関係性はわからない。

いや、むしろ発想を逆転させて、きっかけ自体はたわいないこ

となのだ、と言うために、敢えて関係性の薄い出来事を持って来たのだと考えられなくもない。
ともあれ、得られたインスピレーションが重いことだけは確かである。それは『春と修羅（第一集）』の冒頭に収められた「屈折率」にも匹敵しよう。

七つ森のこつちのひとつが

水の中よりもつと明るく

そしてたいへん巨きいのに

わたくしはでこぼこ凍つたみちをふみ

このでこぼこの雪をふみ

向ふの縮れた亜鉛の雲へ

陰気な郵便脚夫のやうに

（またアラツデイン、洋燈とり）

急がなければならぬのか

郵便脚夫とはメッセージを伝えることを使命とする人である。

これは家出上京中に国柱会の講師であった「高知尾師ノ獎メニヨリ／法華文学ノ創作」（「雨ニモマケズ手帳」）を始めたときされる賢治その人のことだと考えてよいだろう。

大正十一年一月六日にこうした啓示を受け、大正十一年四月八日の日付のある「春と修羅」では「まことのことばここになく／修羅のなみだはつちにふる」の啓示を、そしてそれとほぼ同時期に「わが索むるはまことのことば／雨の中なる真言なり」（「冬のスケッチ」）という啓示を受けたということなのだろう。

宮沢清六（後掲）は本作を「いまこの待合室でよく考えて見ますと、やっぱり私の命をかけて、みんなのほんとうの幸福のためを探し索めねばならないのは、このような物質的なものではなく、静かに降りそそぐあの十力の金剛石、そしてあめつちに満ちあふれる尊い宝珠とも称される雨の中から聞えて来る厳かな天の声、

そして永遠に不朽の真実の言葉であります」と解している。賢治がこの時「鉱石や鉱脈をまたよく調べ直して、有望なものや農村やみんなのために開発したいと考えて出かけた」という点については、時期的にもただちには賛意を表しかねるにしても、おおむね妥当な解釈ではないかと思う。

ただ、平沢信一（後掲）が指摘するように「清六氏の文脈では、主として探索の対象の物質性と精神性の対比に重点が置かれているが、『技師』ひとびと』が『青きSOS』から『銅の脈』を発見するその仕方と、『われ』が『まことのことば』を索める方法には、何らかの共通項があるようにも思われる」とあるのはその通りで、ここにあるのはこの世界の中から「真言」を発見したいという意志の表現であり、物質を否定しようとしていたと解する必要はないように思う。

ところで、「冬のスケッチ」と『春と修羅（第一集）』が様々な点において比較対照できそうなことについては述べてきたとおりのだが、本作の内容は、やはり同じ頃に書かれ、大正十三年十二月に刊行された童話集『注文の多い料理店』の「序」にも共通していると思う（序文の日付は大正十二年十二月二十日）。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。

わたたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

「氷砂糖」という物質がなくても、「すきとほつた風」や「桃いろのうつくしい朝の日光」があればいいのだと賢治は言う。現実では「ぼろぼろの着物」であっても、「はたけや森の中」に行けば、

「びろうどや羅紗や、宝石いりのきもの」にも匹敵する美しいものにかわりうるのだと言う。賢治が求めるのは、現実世界の「氷砂糖」の製造方法ではないし、「きもの」の編み方でもない。自分がこの世に生を受け、使命として取り組むべきことは、「まことのことば」「真言」を索めることであつたのだ。

これらのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもつてきたのです。ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりですりかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるへながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたままでです。

そして賢治は林や野はらに出かけて、「どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふこと」を「まことのことば」として定着させようと試みるのである。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

たよりになるものは自分の直感だけ。あるいは仏典の記述や高等農林学校で学んだ科学も役立てたいと考えていたかもしれないが、この試みは極めて難しく、無謀なものであつたことには違ひなく、自分でもどこまで正当な評価が下されるのかわからないのだという。もちろん評価と言つても、それはいわゆる作家たちが気にかけていた読者の評価でも文壇の評価でもなく、作家として

自立したいなどということとも無関係であつた。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのおすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。

この試みが成功しているかどうかはともかく、賢治としては「これらのちいさなものがたりの幾きれかが」、「ほんたうのたべもの」、「つまり、氷砂糖や現実の「きもの」ではなく、「まことのことば」「真言」であることを、どんなに願うかわからないのだというのであろう。

文語詩「早春」は、他の文語詩とは明らかにトーンもテーマも書き方さえも異なっているが、それでも賢治には書かずにはおれなかつたものなのだろう。この主張は本作のみならず、賢治の表現活動の全てにまで及ぶような本質的なものであつたように思うが、文語詩の中でも何度も繰り返し返してこの言葉が書き留められたのも（本作以外の二例は、先にも述べたように廃案となつているのだが）、その重要性を裏書きしてくれるかもしれない。

先行研究

佐藤勝治A「Cの話 賢治の詩碑（まことひとびと索むるは）」

（『宮沢賢治入門』 十字屋書店 昭和四十九年十月）

小野隆祥A「賢治の和賀時代の恋 大正八年成立仮説の幻想的展開」

（『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッチ」探究』 洋々社 昭和五十七年十二月）

小野隆祥B「幻想的展開の吟味」

（『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッチ」探究』 洋々社 昭和五十七年十二月）

中谷俊雄「岩手の山々（二十） 浮島」

（『賢治研究32』 宮沢賢治研究会 昭和五十八年四月）

佐藤勝治B「「冬のスケッチ」の配列復元とその解説」

（『宮沢賢

治青春の秘唱 “冬のスケッチ” 研究』十字屋書店 昭和五十九年四月)

小寺政太郎「文語詩選九編」(『賢治研究50』 宮沢賢治研究会 平成元年九月)

しおはまやすみ「編者あとがき」(『宮沢賢治詩ノート集』 あるちざん 平成二年一月)

宮沢清六「早春について」(『兄のトランク』 筑摩書房 平成三年十二月)

島田隆輔A「冬のスケッチ」本文手入れ時期に関する覚書 (『文語詩稿』とのかかわりから) (『論攷宮沢賢治創刊号』 中四国宮沢賢治研究会 平成十年三月)

栗原敦「Q&A 定稿用紙の失われた「文語詩稿 一百篇」作品」(『宮沢賢治研究Annual18』 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月)

島田隆輔B「冬のスケッチ」現状に迫る試み／現存稿(広)グループ・標準型(一)における」(『宮沢賢治研究Annual18』 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月)

平沢信一「早春」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラーノ 平成十二年九月)

島田隆輔C「△写稿V論」(『宮沢賢治論 文語詩稿叙説』 朝文社 平成十七年十二月)

30 来々々軒

① 浙江の林光文は、
そが弟子の足をゆびさし、

② ちづれ雲西に傷みて、
警察のスレートも暮れ、

かぢやかにまなこ睦き、
凜としてみじろぎもせず。

いささかの粉雪ふりしき、
売り出しの旗もわびしき。

③ ちくつけき犬の入り来て、
額青き林光文は、
ふつつと釜はたぎれど、
そばだちてまじろぎもせず。

④ もろともに凍れるごとく、
雪しろきまちにしたがひ、
もろともに刻めるごとく、
たそがれの雲にさからふ。

大意

浙江省の出身だという林光文は、目を光らせて見開き、その弟子の足をゆびさして、毅然として身じろぐこともない。

西空には縮れ雲が黒ずんで、わずかに粉雪が降りかかると、警察のスレート屋根にも夕暮れの気配が漂い、売り出しの幟はわびしげに見える。

不作法な犬が店に入り込んで来るが、ラーメンをゆでる釜は煮えたぎったままで、額の青い林光文は、そそり立ってまばたきくこともない。

両者ともに凍ったように、両者ともに彫刻でもあるかのように、雪が白く降りしきった街に生き、西空のたそがれ雲には背を向ける。

モチーフ

中国の浙江省から、はるばる花巻までやってきてラーメン店を営んでいる男(おそらく実在のモデルがいたと思われる)を描いた作品。ラーメン店主の林光文は、商売に専心するあまり、野良犬が入ってきてても、釜が煮えたぎっていても、身じろぎも瞬ろぎもせずに弟子を叱り続ける。弟子の感じるいたたまれなさや恐怖にも、全く頓着していないようだ。異邦で経済活動を行う者の厳し

い現実認識が背景になっているのだろうが、商売熱心で個人主義的だという当時の中国人イメージの影響もあるかもしれない。

語注

来々軒

作品の舞台は花巻の町であると思われるものの、この名前の中華料理店があったことは確認されていない。内川吉男（後掲A、B）は、盛岡市内に「来々軒」という店があったことを見つけているが、村上英一（後掲）は「大正期の花巻地図」（『宮沢賢治生誕百年記念特別企画展図録 拡がりゆく賢治宇宙』宮沢賢治イーハトーブ 平成九年八月）に「林ラーメン屋」が賢治の生家近くにあるのを見つけ、同地図の執筆担当者・阿部弥之に問い合わせたところ「当時、確かにそこに、日本に帰化した中国人の営むラーメン屋があった」ことが確認できたという。来々軒の名前については、内川が言うように盛岡の店から来ているのかもしれないが、村上が指摘するように、明治四十三年に開業した浅草の来々軒によるものかもしれない。来々軒の経営は日本人だが、コックを中国から呼び寄せ、味も本格的であったが庶民的な料理を安く食べられたことも有名で、大正七年八月に刊行された『三府及近郊名所名物案内』（日本名所案内社）にも「来々軒の支那料理は天下一品」として紹介されている。しかし、盛岡の来々軒にしても、「来々軒」という名前は、わたしが東京にでた時に「来々軒」というはやる支那そば屋が浅草にあつて、その名前をつけたんです」（葺手町付近）『もりおか物語八 肴町かいわい』熊谷印刷出版部 昭和五十三年七月）という言葉があるので、元は浅草の来々軒に由来するものようである。花巻の「林ラーメン屋」のできごとを元にしてはいるが、盛岡や浅草の来々軒から名前だけ拝借してきたものだと考えたい。

浙江 中国東部の上海市に隣接する地域。読み方は「せつこう」。後藤朝太郎の「日本に来て居る支那留学生と労働者」（『おもし

ろい支那の風俗』大阪屋号書店 大正十二年八月）によれば、「面白いことに日本に来て居る支那人で留学生は広東省、労働者は浙江省の者と殆ど極まってある、で広東省の留学生が日本へ金を持ち込むと反対に労働者は日本の金を浙江省へドンドン送って居るのだ」とのこと。ただし『新校本全集5』所収の口語詩「湯本の方の人たちも」に登場する「林光左」は「広東生れ」となっている。

林光文

ラーメン店の店主の名前。浙江省の出身者なので「はやしみつふみ」ではなく「りんこうぶん」であろう。口語詩「湯本の方の人たちも」には「林光左」として登場し、文語詩化された「未定稿」の「馬行き人行き自転車行き」では「林光原」（下書稿⁽¹⁾）となるが、王敏（後掲）は、彼等を三人兄弟であるとし、「名前に「光」が共通するのは、日本で兄弟に同じ字が入ることがよくあるように、中国でもよく兄弟の証になる」とする。村上（前掲）は、「同一モデルであろう。ただし、作品ごとに名前を書き替えているから、本名はわからない」とする。賢治の文語詩における固有名詞の使い方からすると、おそらく村上の言うとおりのだろうが、「来々軒」ではどっしりと構えた人物、「湯本の方の人たちも」では「自転車をひっぱり出して／出前をさげてひらりと乗る」と、軽やかな動きをさせており、容貌が中国の京劇で女形として名高かった梅蘭芳（メイ・ランファン）にそっくりだったということから、兄と弟、あるいは、全く別の人物であった可能性もあると思う。

スレート

泥岩のうち薄くはがれやすい性質が強いもの（粘板岩）。瓦や屋根などの建築材料に使われる。石綿とセメントを原料とする人工の石綿スレートもよく使われる。村上（後掲）によれば、本作がモデルとしたと思われる花巻警察署に問い合わせたところ、「当時の警察署は入母屋造りの瓦屋根」であったという。内川（後掲A）は、大正十一年六月十五日竣工の盛岡市材木町交番が「洋風二階建物スレート葺」であったこと

を突き止めているが、内川が見つけた来々軒の跡地からは見えない。肴町交番なら見えた可能性もあるが、屋根がスレート葺きだったという証拠は見つかっていないようだ。

評釈

黄罨(220行) 詩稿用紙に丸番号と共に書かれた下書稿(鉛筆で④、左上には「来々軒」「林氏叱弟子」とあるが、タイトル案だろう)。定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。

下書稿は一種のみだが、定稿とほとんど内容が変わらず、⑤印と丸番号まであることから、かなり推敲が進んだ段階のものだと思われる。先行作品の指摘はないが、関連作品としては林光原という人物の登場する「未定稿」の「馬行き人行き自転車行き」、また、同作の先行作品である『新校本全集5』所収の口語詩「湯本の方の人たちも」(こちらには林光左が登場)。「文語詩篇」ノートの「33 1928」には、「一月 ◎林光左弟子ヲ叱ル」とあり、赤インクで×が書かれていることから、文語詩化したということなのだろう。また「百篇」の「小きメリヤス塩の魚」の下書稿(二)にも「林光左」とのメモがある。

まずは口語詩「湯本の方の人たちも」から見てみたい。

湯本の方の人たちも
一きりついて帰ったので
ビラの間からおもてを見れば
雲が傷れて眼は痛む
西洋料理支那料理の
三色文字は赤から暮れ
硝子はひっそりしめられる
馬が一疋東へ行く
古びた荷縄をぶらさげて
雪みちをふむ

引いて行くのはまだ頬の円いこども
兵隊外套が長過ぎるので
縄でしばってたごめてゐる
行きがちがひに出てくるのは
政友会兼国粹会の親分格
帽子もかぶらず

手は綿入の袖に入れ
がっしり丈夫な足駄をはいて
身体一分のすきもなく
こつちをぢろつと見るでもなし
さりとして全く見ないでもなし
堂々として行き過ぎるのは
さすが親分の格だけある
いつかおもてのガラスの前に
白いもんぱのぼうしをかぶり
緋の合羽にわらじをはいた
眼のうす赤いぢいさんが
読んでゐるのか見てゐるか
物でも囁むやうにして
だまってぢつと立ってゐる
ご相談でもありましたらと切り出せば
何か錢でもとられるか
かゝり合ひにでもなるかと
早速ぼろつと遁げて行くのは必定だ
結局こらえてだまってゐれば
またこの夏もいもちがはやる
こんどはこども 砂糖屋の家のこどもが
スケートをはき手をふりまはしてすべって行く
おぢいさんもぼろつと東へ居なくなる
高木の部落なら

その雪のたんぼのなかの
ひばのかきねに間もなくつくし
高松だか成島だか
猿ヶ石川の岸をのぼった
雑木の山の下の家なら
もうとつぷりと暮れて着く
たうたう出て来た林光左
広東生れのメーランフアンの相似形
自転車をはひっぱり出して
出前をさげてひらりと乗る
一目さんに警察の方へ走って行く
遠くでは活動写真の暮れの楽隊

高木や高松、成島、猿ヶ石川といった花巻近辺の地名が出てくることから、花巻の冬の街の光景を描いたもののものである。これが「未定稿」の「馬行き人行き自転車行きて」では、次のように凝縮される。

馬行き人行き自転車行きて、
しばし粉雪の風吹けり

緋合羽につまごはき
物噛むごとくたぐずみで
大売り出しのピラ読む翁
まなこをめぐる輻状の皺

楽隊の音からおもてを見れば
雲は傷れて眼痛む
西洋料理支那料理の
三色文字は赤より暮るゝ

林光原の名前は消えているが、一行目の「自転車行きて」は、口語詩を参照すればラーメン屋の林光原のことを言っていたのであるうし、最後には支那料理も登場していることから、スポットがあたっているのは林光原だということになりそうだ。

ところで口語詩の初期形態には、「硝子もひっそりしめられて／どうやら客もないらしい／とは云へあの抜目ない林光左氏が／硝子の向ふぼうぼうと立つ湯気のなかで／どういふ速い策略で／何を拵えてゐるものか／とてもわかったことでない」といった記述があり、これは「一百篇」の「来々軒」の先行形態だと言ってもよいように思う。冬の風景だという点でも同じである。ただ、釜がふつふつと煮えているのは同じでも、ここは「ひっそり」して「客もないいらしく、林光原は何を考えているのかかわからない」ということのように、ここに弟子がいたのかどうかまではわからない。

先に書いたように、「文語詩篇」ノートに、「二月 ◎林光左弟子ヲ叱ル」の記述があり、×印がつけてあることからすると、賢治は実際に弟子が叱られている様子を見て、それを文語詩化しようと思っていたようなので、口語詩になって虚構が交えられ、文語詩となった時に実際の状況に戻されたということなのかもしれない。

ところで、この林光原はどのような人物として描かれていたのだろうか。「抜目ない」と賢治は書いているが、どういう点で抜け目がなかったのだろうか。下書稿は一つしか残っていないようだし、先行形態だろうとした「湯本の方の人たちも」にしても、下書稿は残っておらず、アプローチするのはむずかしいが、村上英一（後掲）は、「林光文の怒りの大きさや叱責の厳しさが強く印象付けられ」、「叱責の厳しさから、料理人としての信念やプライドの強さを感じることもできるし、その奥に、異国に生きる中国人の厳しい現実を見ることもできよう」とする。しかし、結局のところ

る読者がそれぞれ独自に読むしかないのだという。

賢治が中国人についてどのように思っていたのか。『新校本全集』の「索引」を使って作品にあたってみても、あまり中国観は見えてこないが、童話「山男の四月」と「十月の末」には「支那人」が登場し、どちらも行商をしながら肝を取って菓（六神丸）にするといった俗説を基調としている。「山男の四月」には、「支那人のぐちやぐちやした赤い眼が、とかげのやうでへんに恐くてしかたありませんでした」と書かれ、「あなた、この菓のむよろしい。毒ない。決して毒ない。飲むよろしい」と片言の日本語を喋らせるなど、いかにも当時の日本人が抱いていた中国人へのステレオタイプ（紋切型）にそって書かれていたことがうかがえる。

古来より日本は中国の影響を受け続けていたが、明治二十七年の日清戦争以来、日本の中国観は一変した。銭鷗（「日清戦争直後における対中国観及び日本人のセルフイメージ」『太陽』第一巻を通して）（「日本研究13」 国際日本研究センター 平成八年三月）によれば、明治二十八年の雑誌『太陽』における中国に対する言説を調べたところ、中国人を日本人と比較すると次のように語られることが多かったという。

（中国人）上下一般に愛国心の乏しきは本当のやうで御座います、ドウモ一体に国を思ひ天下の為に心を尽くすといふ事が本当に無い、併し自分の業を営み或は町人は海外へ行つても自分の国に居ても能く勉強して難儀に耐へて僅かの金銭を積み貯へて富を為し…（大鳥圭介「日清教育の比較」、第九号「教育」欄）

また「最強の商業人種」として挙げられる中国人は、多く国立心なく、名誉権利心に薄く、神経に鈍く、只々獣類的の実利に幻惑せるのみ、…（飯田旗郎「亜細亜の大商戦」、第二号「論説」欄）

このように金銭欲に富み商業には強いが個人の利益を追求す

るばかりで、愛国心が乏しく統合力が弱い中国人、というイメージが、日本人とは正反対のものとして描き出されたのである。

大正七年十一月に刊行されたという『支那研究叢書 第九巻』

（支那人の性情）東亜実進社）を見ても、「支那人の通有性は個人主義にあるを以て凡ての問題は之を基礎として発生するものなり」と書かれていた。それはつまり、個人主義の故に個人の利益は追求するが、しかし、他人のため、国家のために犠牲になどなろうとする者はいないということだろう。銭鷗（前掲）によれば、「日本の中国批判の多くの内容は、驚くほど素直に中国の知識人達に受け入れられ」、この後、中国では日本をモデルとした様々な改革が行われたのだというから、あながちステレオタイプというわけでもないのかもしれない。

『支那研究叢書 第九巻』（「支那人の性情」）には、また、「今日海外各地に散在する一千余万に近き移民が到る処毫も其国に同化せらるゝ事なく依然として支那人たるの性質を失せざるは世界の驚嘆し且つ恐怖する所なり」と、その非・同化力が指摘されており、「支那人は克己力強く忍耐心に富めばこそ商人として到る処着々成效するなり」とする。別に賢治がこの本を読んで参考にしたということではないにしても、同時代的なイメージから、林光文のことも個人主義的な人物だと見ていた可能性は高く、それは口語詩「（湯本の方の人たちも）」の初期形態の中に「あの抜目な林光左氏」と書き付けられたこととも一致しよう。

となれば、商売熱心な個人主義者の林光文が、相手の嘆きや悲しみにも配慮することなく、野良犬や釜が煮え立つのにも構うことなく、そして、客か通行人かであった賢治がその光景を見ていたことにも構うことなく、弟子を叱り続けていた理由がわかってくる。賢治は、保阪嘉内に宛てた書簡で「独乙語の講習会に四日来て又見えざりし支那の学生」といった歌も書いており（大正五年八月十七日消印）、中国人を常にステレオタイプで見ているとば

かりは言えないにしても、文語詩によって自分史を作ろうとして「文語詩篇」ノート」にメモを取っていた頃の賢治が、自分史の「コマ」として、わざわざ「林光左弟子ヲ叱ル」と書き付けたということは、相当なインパクトがあったのだと思わされる。「二百篇」には外国人が多く登場しているが、その中でも異彩を放つ一篇だと言えるだろう。

先行研究

内川吉男A「エッセイ・注文のない料理店 宮沢賢治の「来々軒」を探して」(『火山弾47』火山弾の会 平成十一年八月)
内川吉男B「賢治のラーメン屋さん」(『岩手日報夕刊』平成十一年八月十四日)
王敏「人名・地名の由来」(『宮沢賢治、中国に翔る想い』岩波書店 平成十三年六月)
村上英一「来々軒」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラノ 平成十四年七月)

31 林館開業

①凝灰岩もて畳み杉植ゑて、
南銀河と野の黒に、
麗姝六七なまめかし、
その牖々をひらきたり。

②数寄の光壁更たけて、
直翅の輩はきたれども、
千の鱗翅と鞘翅目、
公子訪へるはあらざりき。

大意

凝灰岩で壁を覆って杉を植え、美女六七人ばかりがなまめかしく待ち、
南空には銀河と黒々とした野に向けて、窓々が開かれていた。

手の込んだイルミネーションが輝いて夜も更けると、千ものガヤコガネムシ、
バッタたちが呼び寄せられては来たけれど、訪ねてくる紳士は一人もいなかった。

モチーフ

なまめかしい女性が待っているのは、飲食業というよりは風俗営業(接待飲食等営業)というに近いカフェが舞台であろうか。凝灰岩の壁に杉、イルミネーションと数寄を凝らして作ってはいいるが、訪ねてくるのは虫ばかりであったというオチ。花巻のレストランやカフェ、温泉地のカフェや下根子桜の宮沢家別荘での経験やイメージも動員されていそうだ。伊藤眞一郎(後掲A、B。引用部分は共通)は、「人間のお客などとても期待できそうにない林中に風俗営業の店を開くという頓珍漢さにおいて、間抜けな経営者として滑稽視され、その滑稽の笑いを介して、彼の商売柄の俗悪さが批判されている」のだとする。が、賢治自身、昭和二年に遊興の地である花巻温泉の花壇を設計し、自ら風俗業に手を貸してしまっており、単純に他者を批判するだけでは済まされない。ユーモラスに事業家を揶揄するだけでなく、批判の対象には自身も含まれていたように思われる。

語注

林館 伊藤眞一郎(後掲B)によれば『全唐詩』に用例があり、韓愈は「林泉に富んだ別荘」といった意味で使っているという。林の中に建つカフェのことだろう。童話「注文の多い料理店」をも思わせるが、どちらも「途方もない経営者」(広告ちらし)が問題とされている点で共通している。
凝灰岩もて畳み 凝灰岩とは火山灰や火山砂などが堆積してできた岩のこと。タフ(Tuff)とは英語で凝灰岩のこと。加工しや

すいことから建築用石材としてよく用いられた。風化に強く、耐火性もあり、値段も安く、代表的なものに栃木県宇都宮市に産する大谷石がある。関東大震災の際、大谷石をふんだんに使ったフランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテル本館が無事であったことから評価が高まったという。「畳む」というのは石畳のことであるが、関連作品である「五十篇」の「萎花」の下書稿(-)に、舞台となった花巻にあったレストラン精養軒の石造りを「凝灰岩もてた、む方室に」と表現していることから、壁材として凝灰岩を使っていた可能性もある。伊藤(後掲B)は、散文「台川」の中で、賢治は花巻温泉に程近い台川のあたりの地質について「こっちは流紋凝灰岩です、石灰や加里や植物養料がずうっと少ないのです。ここにはとても杉なんか育たないのです」と書いていることを指摘し、賢治が本作において「凝灰岩もて畳み杉植ゑて」としたのは、「林館」を花巻温泉遊園地の暗喩とし、「自然の理に対する無知の表出を見、ここに傲岸不遜な自然侵犯者たる人林館V経営者への批判」を読み取るうとしてゐる。

麗妹 読み方は「れいしゅ」。美しい女性のこと。「妹」は、みめよい、美しい(女性)の意。

牖々 まど。『大漢和辞典』によれば、「壁を穿ち木を交へて作つた窓。れんじまど」。

数奇 茶の湯や和歌、生け花などの風流の道。
光壁 光っている壁、つまり壁にイルミネーションが施されているたのたの。

更たけて 夜が更けていくこと。

鱗翅 成虫の体表が鱗粉や毛で覆われ、折りたたむことのできな
い大きな羽をもった昆虫の仲間。読み方は「りんしもく」。ガや
チョウ。ここでは夜の光に集まってくるガを指す。

鞘翅目 前の翅が鞘のようになって後ろの翅と体とを守っている
昆虫の仲間。甲虫。コガネムシ、カブトムシ、ホタルなど。読

み方は「しようしもく」。

直翅の輩 前後の翅を体の軸に沿ってまっすぐにのばしている昆
虫の仲間。バッタ類。読み方は「ちよくし」。

公子訪へる 貴族の子。貴公子、わかとの。ここでは店を訪れる
男性客のことを指すのたのた。

評釈

赤野詩稿用紙裏面に書かれた下書稿(タイトルは「開業日」。右
肩に藍インクで①、中央に鉛筆で②)、定稿用紙に書かれた定稿の
二種が現存。生前発表なし。

『新校本全集』には「五十篇」の「萎花」の下書稿(-)にも「凝
灰岩」や「鱗翅・直翅」などの本作と共通する語が書かれてい
るとの指摘があるが、その源流となっているのは「詩ノート」の
「一〇八六 ダリア品評会席上 一九二七、八、一六、」であり、
ともに関連作品とすべきだろう。

西暦一千九百二十七年に於る

当イーハトーボ地方の夏は

この世紀に入ってから曾って見ないほどの
恐ろしい石竹いろと湿潤さを示しました

為に当地方での主作物 *oryza sativa*

稲、あの青い槍の穂は

常年に比し既に四割も徒長を来し

そのあるものは既に倒れてまた起きず

あるものは花なく白き空穂を得ました

またかの六角シエバリエー、

芒うつくしい *Horadrum* 大麦の類の穂は

畑地のなかで或は脱落或は穂のまゝ発芽を来し

そのとりいれはげにも心せはしくあはたゞしいかぎりでありま
した

これらのすき間を埋めるために
諸氏は同じく湿潤にして高温な
気層のなかから、

四百の異なるラムプの種類、

Dahlia variaviris の花を集めて

この色淡い凝灰岩の建物の

石英燈の照明と浸液アルコールのかほりの中

窓よりは遙かに熱帯風の赤い門火の列をのぞみ

白いリネンで覆はれた卓につらねて

その花の品位を

われら公衆の投票に問はれました

すでに得点は数へられ

その品等は定められたのであります故に

いまわたくしの嗜好をはなれ

これらの花が何故然く大なる点を得たのであるか

その原因を考へます

第一百号これはまことに二位を得たのであります

かつその形はありふれたデコラチーブであります

更にし細にその色を看よ

そは何色と名づけるべきか

赤、黄、白、黒、紫、褐のあらゆるものをとかしつ

ひとり黎明のごとくゆるやかにかなしめく思索する

この花にもしそが望む大なる爆発を許すとすれば

或ひは新たな巨きな科学のしばらく許す水銀いろか

或ひは新たな巨大な信仰のその未知な情熱の色が

容易に予期を許さぬのであります

まことにこの花に対する投票者を検しましても

真しなる労農党の委員諸氏

法科並びに宗教学の学生諸君から

クリスチャンT氏農学校校長N氏を連ねて

云はゞ一千九百二十年代の

新たに来るべき世界に対する

希望の象徴としてこの花を見たのであります

これに次では

第四百十 これは何たるつゝましく

やさしい支那の歌妓であらう

それは焦るゝ葡萄紅なる情熱を

各カクタスの瓣の基部にひそめて

よぢれた花の尖端は

伝統による奇怪な歌詞を叙べるのであります

更にその雪白にして尖端に至って寧ろ見えざる水色を示すもの

は

その情熱の清い昇華を示すものであります

もしこの町が

未だに近代文明によつて而く混乱せられざる

遠野或はヤルカンドであらば

恐らくこの花が一位の投票を得たでありませう

更に深赤第三百五、

この花こそはかの窓の外

今宵門並に燃す熱帯インダス地方

たえず動ける赤い火輪を示します

最後に一言重ねますれば

今日の投票を得たる花には

一も完成されたるものがないのであります

完成されざるがまゝにそは次次に分解し

すでに今夕は花もその瓣の尖端を酸素に冒され

茲数日のうちには消えると思はれますが

すでに今日まで第四次限のなかに

可成な軌跡を刻み来つたものであります

日本では明治の末年からダリア栽培がブームとなり、品評会といったものも全国でしばしば行われたが、昭和二年夏には花巻のレストラン精養軒でも品評会が催され、賢治もこれに出席したようだ。「当イーハトーボ地方の夏は／＼この世紀に入ってから曾って見ないほどの／＼恐ろしい石竹いろと湿潤さを示し」とシリアスな調子で始まるが、品評会の様子をユーモラスに描き、自身の四次元芸術論でしめくくっている。

しかし、これを文語詩化した「未定稿」の「歳は世紀に曾て見ぬ」では、口語詩「二〇八六 ダリア品評会席上」の冒頭を引き継いで、次のようなものになっている。

歳は世紀に曾て見ぬ

石竹いろと湿潤と

人は三年のひでりゆゑ

食むべき糧もなしといふ

稲かの青き槍の葉は
多く倒れてまた起たず
六条さては四角なる
麦はかじろく空穂しぬ

このとききみは千万の
人の糧もてかの原に
亜鉛のいらか丹を塗りて
いでゆの町をなすといふ

この代あらば野はもつて
千年の計をなすべきに
徒衣ぜい食のやかららに

賤舞の園を供すとか

昭和二年、賢治は教え子だった富手一の依頼によって花巻温泉の花壇設計を手掛けている。花巻温泉には花巻駅から電車を通じ、温泉はもちろん、貸別荘や大弓場、室内遊戯場、動物園、テニスコート、スキー場などを併設した一大リゾートで、昭和二年の新聞社主催による「日本新八景」では全国第一位となるほどの人気があった。しかし、温泉リゾートと言えれば聞こえはいいが、実際は「賤舞の園」であり、「詩ノート」の「二〇三四」に「ちゞれてすがすがしい雲の朝」一九二七、四、八、」では、「遊園地ちかくに立ちしに／＼村のむすめらみな遊び女のすがたとかはりぬ／＼そのあるものは／＼なかなれるポーズをなし／＼あるものはほとんど完きかたちをなせり」と書いていような有様であった。「歳は世紀に曾て見ぬ」は、農村が疲弊しているというのに、賤舞の園を作っている場合ではないとして、計画した者たちを批判する内容だが、賢治自身が、計画立案する側に立っているというところに複雑な気持ちがあったのだろう。

そして口語詩「一〇八六 ダリア品評会席上」の後半だが、こちらの方は「五十篇」の「萎花」で文語詩化されている。

① 酒精のかほり硝銀の、
大展覽の花むらは、
肌膚灼くにほひしかもあれ、
夏夜あざらに息づきぬ。

② そは牛飼ひの商ひの、
さこそつちかひはぐくみし、
はた鉄うてるもろ人の、
四百の花のラムプなり。

③ 声さやかなるをとめらは、
高木検事もホップ噛む、
おのおのよきに票を投げ、
にがきわらひを頬になしき。

④ 卓をめぐりて会長が、
メダルを懸くる午前二時、

カクタス、シヨウをおしなべて、花はうつゝもあらざりき。

詳しくは「評釈」(信時哲郎 『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月)の該当する章を参照してもらいたい。精養軒における品評会を舞台にしており、集まった人々が思い思いに投票し、人気の高かったダリアにメダルを懸ける午前二時には、もう花は萎れていたという寓話風の、やはりユーモアの漂う詩となっている(もちろん文語詩の常として他の会場での品評会の経験なども盛り込まれた可能性がある)。

一見すると、口語詩「一〇八六 ダリア品評会席上」の暗い部分「歳は世紀に會て見ぬ」に、そして、ユーモラスな部分「萎花」に分離したというようにも思えるが、男たちに見つめられて美醜を問われ、盛りを過ぎてしまえば棄て去られるだけの「花」という存在は、「うたひめ」や「たはれめ」たちのアナログーとなっており、花巻温泉をめぐる賢治の罪障感が述べられている作品だと考えることができる。

やはり昭和二年六月一日の日付のある「詩ノート」の「一〇七一 「わたくしどもは」」でも、賢治は女性を花に喩えているようだ。ここではフィクション風に「わたくし」と「妻」の生活が書かれているが、妻は私が二十疋で買った花を二円で売ったのだと語り、「萎れるやうに崩れるやうに一日病んで没くな」る。つまり妻は花を売ることによって金銭を得るかわりに、萎れるように消えていったわけである。露骨に言えば、妻は体を売ることによって金を入れるが、肉体は亡びてしまったということだろう。昭和二年ということもあり、これらの作品は、いずれも花巻温泉とかかわりなくしては生まれなかつたものだと考えられる。

さて、「林館開業」について考えてみたい。「五十篇」に収められた「萎花」の下書稿(一)は、半分が横に破られているために全てを参照するわけにいかないが、次のような部分がある。

窓は遙かに町な
赤き門火を
屋上には青きアル
千のひらめく鱗翅
直翅の群を舞
まさに気圏の火
生きたる火花の
なほわれひとり
惑ふは何のいは

手入れ段階には、「凝灰岩^ツもてた、む方室に」といった言葉もあることから、「林館開業」との関連は決定的で、「林館開業」には下書稿が一種類しか見つからないわりに推敲の度合いが進んでいるように見えるのは、「萎花」の下書稿(一)の段階から発想が継続しているためであろう。現存する唯一の下書稿に⑦と⑧の両方が記されていたというが、これも特殊な成立事情に関係しているのだと思われる。

とすれば、「林館開業」の舞台も精養軒ではないかということになるが、精養軒は大正十二年の創業であり(泉沢善雄「賢治エピソード落穂拾い 第2回・賢治と精養軒」 「ワルトラワラ21」ワルトラワラの会 平成十六年十一月)、タイトルにある「開業」の言葉には少し合わない。精養軒が花巻の町のほぼ中心部にあったことも「林館」にそぐわないし、賢治の時代でも蚊や蛾くらいならともかく、ユガネムシやバッタはそうそう飛び込んで来なかつたように思う。

しかし、精養軒での品評会の様子を書く段階で、集まった人たちのつやつやと輝く服地から「ひらめく鱗翅」というイメージが湧き、燕尾服を着た男性の姿から「直翅」というのが思いつかれた可能性はある。あるいは、ダリアを女性に喩えた段階で、花に

群がる昆虫を男性に喩えるというアイデアを思いついたのかも
しれない。いづれにせよ、こうしたアイデアまでを「五十篇」
の「萎花」に収めることができなかつたために、「林館開業」を書
かせたのだとも言えるように思う。「萎花」の下書稿(一)の原稿は破
られているのだが、案外ここには、しっかりと「林館開業」への
改作を跡付ける書き込みがあつたかもしれない。

夜の女性たちの登場するこれらの作品からは、当然、社会批判
の気持ちも強く込められていると思われるが、その批判の先には、
花巻温泉の開発に手を貸した自分自身、そして温泉の開発計画に
宮沢家も浅からぬ関係を持っていたことを忘れてはいなかつたよ
うに思う。賢治の中学校時代の友人・阿部孝(「中学生の頃」¹⁰⁰「四
次元」¹⁰⁰ 宮沢賢治研究会 昭和三十四年一月)は、

彼は一面なかなかの不平家で憤慨屋でもあつた。他人の不愉快
な態度にも、彼はすぐにびんと反発して、蔭ではぶつぶつと不
平をならべた。しかしどんなに他人の悪口を言い、蔭口をはく
時でも、結局彼は自分を批判し、自分を反省し、自分を卑下す
ることを忘れなかつた。

と書いているが、花巻温泉を扱った作品には、どこかこうした自
分に対する批判の思いが込められているように感じられる。

さて、「林館開業」は、精養軒のできごとを書いた詩稿から生
まれたが、たくさんの昆虫を登場させたためにも、舞台は町中か
ら、どこか草むす場所に設定しなおす必要が生じ、かくして「林
館」にて架空のカフェを開業させる案に落ち着いたのだと思う。

熊谷章一の『ふるさとの思い出 写真集明治大正昭和 花巻』(国
書刊行会 昭和五十五年五月)には、「凝灰岩もて畳」まれた精養
軒の写真もあるが、大工町(現・双葉町)の中央亭、裏町(現・
東町)の金鶴という二軒のカフェの写真も掲載されている。中央
亭の説明には「主人夫婦を中心に六人の女給さんたち」とあり、

金鶴の方には六人の女性が映っており、「若い美人の女給が多く、
この近くであつた筆者の印象に残っている女も二、三いる」とあ
る。イルミネーションなのかどうか判別はできないが、どちらも
擬洋風のモダンな建物である。

カフェというと、近年はオシャレな喫茶店を意味するようにな
っているが、この頃のカフェとは、飲食店というよりも風俗営業
というべき場所であつた。大工町も裏町も賢治の家から近く、客
になることはなくても、いろいろな情報は入ってきたことだろう。
彼女らの来し方行く末についても、いろいろ思うところもあつた
だろう。

ところで、先に「架空のカフェ」と書いたが、舞台が特定でき
ないというだけで、架空であつたという証拠はない。町中ではな
く、昆虫しかやつてこないような林の中にもカフェがあつたこと
が確かめられるからである。

賢治の友人だつた藤原嘉藤治(「座談会・賢治素描」 森莊巳池
『宮沢賢治の肖像』 津軽書房 昭和四十九年十月)は、「宮沢さん
は、台温泉のカフェーみたいなどころでサイダーを飲み、女給に
十円のチップをやりました。そのころは、チップは、五十銭か一
円ぐらいの時の話です」というエピソードを披露している。台温
泉や花巻温泉あたりにもカフェがあつたとすると、本作のモデル
となつていた可能性は高い。

浜垣誠司(「賢治祭〜種山ヶ原〜秩父」 「宮沢賢治の詩の世
界」 <http://www.ihatorv.cc/> 平成十三年九月二十一日)は、大正
十三年六月に花巻温泉で開業した高級旅館の松雲閣が舞台では
ないかというが、「凝灰岩もて畳み」を、石畳であるとすれば、台
川の近辺に凝灰岩が多かつたことや、花巻温泉という場所柄から
考えても、ありえないことではないと思う。ただ「光壁」をイル
ミネーションであつたとすると、いささか佇まいが和風すぎるか
もしれない。

ところで、銀河や黒い野を見渡すことができ、たくさんの昆虫

が飛んでくる林の中の館といえ、光が外に漏れやすいガラス窓をふんだんに使った下根子桜の宮沢家別荘も思い浮かぶ。『新校本全集5』には、口語詩「来訪」が収められているが、ここにはなまめかしい女性など一人も現れないのだが、関連作品の一つとしてあげてもよいように思う。

水いろの穂などをもつて
三人づれで出てきたな
さきに二階へ行きたまへ
ぼくはあかりを消してゆく
つけっぱなしにして置くと

下台ぢゅうの羽虫がみんな寄ってくる

……くわがたむしがビーンと来たり、
一オンスもあつて

まるで鳥みたいな赤い蛾が
ぴかぴか鱗粉を落したりだ……

ちやうど台地のとっぱななので

このあかりは鳥には燈台の役目もつとめ
はたけの方へは誘蛾燈にもはたらくらしい
三十分もうっかりすると

家がそっくり昆虫館に変つてしまふ

……もうやつてきた ちいさな浮塵子^{うじんこ}

ぼくは緑の蝦^{エビ}なんですといふやうに
ピチピチ電燈^{デンチ}をはねてゐる……

それでは消すよ

はしごの上のところね

小さな段がもひとつあるぜ

……どこかに月があるらしい

林の松がでこぼこそらへ浮き出てるし

川には霧がしろくひかつてよどんでゐる……

いやこんばんは

……喧嘩の方もおさまったので

まだ乳熟の稲の穂などを

だいじにもつてでてきたのだ……

岡井隆（後掲B）は、特にこの口語詩を頭に置いていたわけではないようだが、「まさか下根子の賢治のすまいを「林館」としやれのめしたともれぬ」と書いている。本作の誕生に際しては、精養軒、町中のカフェ、温泉地のカフェに加えて、桜の宮沢家別荘でのさまざまな経験やイメージが合成されていたように思える。

先行研究

小寺政太郎「文語詩選九編」（「賢治研究50」 宮沢賢治研究会 平成元年九月）

岡井隆A「林館開業 選挙 ふたたび「文語詩稿」を読む（1）」

（『文語詩人 宮沢賢治』 筑摩書房 平成二年四月）

岡井隆B「林館開業 崖下の床屋 ふたたび「文語詩稿」を読む

（2）」（『文語詩人 宮沢賢治』 筑摩書房 平成二年四月）

原子朗A「何よりも作品を」（『国文学 解釈と鑑賞61』11） 至文堂

平成八年十一月）

原子朗B「ことば、きららかに」（『十代17』12）ものがたり文化

の会 平成九年十一月）

伊藤眞一郎A「林館開業」（『宮沢賢治 文語詩の森』 柏プラーノ

平成十一年六月）

力丸光雄「林間に幻の洋館を見た」（『宮沢賢治学会イーハトーブ

センター会報28 サクラソウ』 宮沢賢治学会イーハトーブセン

ター 平成十六年三月）

伊藤眞一郎B「凝灰岩もて畳み杉植ゑて 文語詩稿『林館開業』

の笑いとその背景」（『宮沢賢治入旅程幻想』を讀む』 朝文社

平成二十二年十一月）

32 コバルト山地。

なべて吹雪のたえまより、
コバルト山地山肌の、

はたしらくものきれまより、
ひらめき酸えてまた青き。

大意

すべて吹雪の絶え間から、
コバルト山地の山肌が、

あるいは白い雲の切れ間から、
ひらめいては薄れまた青くみえる。

モチーフ

『春と修羅（第一集）』所収の口語詩「コバルト山地」の関連作品。
自らの心象風景を扱っていた作品が、文語化とともに即物的・現実的な側面が強まり、改稿過程を見ると社会批判を盛り込もうとした時期もあったようだ。が、定稿では賢治が最も表現したかったこと、光と雲と山肌が、風向きや時間の推移、列車の移動によってさまざまに見えるということシンプルに表現する道を選んだようだ。

語注

コバルト山地 コバルトは原子番号二七の元素で銀白色だが、酸化コバルトと酸化アルミニウムを混ぜると鮮やかな青色の顔料となり、陶磁器の着色や絵具の顔料として用いられる（コバルトブルー）。ここでコバルト山地というのは、コバルトが取れる鉱山のことではなく、コバルトブルー色の山のこと。『定本語彙辞典』では、北上山地を指したものだとなる。

評釈

黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿（-）（藍インクで⑦）、

その裏面に書かれた下書稿（-）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（三）（タイトルは「コバルト山地」、後に「晴雪」。鉛筆で⑧）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。
『新校本全集』では『春と修羅（第一集）』所収の口語詩「コバルト山地」を関連作品としている。定稿は全一連で構成されているためか丸番号の表記がない。また、定稿ではタイトルに句点が書かれている。

まずは関連作品とされた口語詩から見ていきたい。

コバルト山地の氷霧のなかで

あやしい朝の火が燃えてゐます
毛無森のきり跡あたりの見当です

たしかにせいしんてきの白い火が
水より強くどしどしどし燃えてゐます

これには大正十一年一月二十二日の制作日付が付されているが、文語詩とは、かなり差があるような印象を受ける。マイナス十度以下になると見えるという氷霧（細かな氷晶が多数空中に浮かんで、霧のようにあたりがぼんやり見える現象（『日本大百科全書』）が本当に見えたのか、そんな時に山がコバルト色に見えるのか、また、その中に火が燃えるとはどういうことなのか、水より強く燃えるとはどういうことなのか：物理的現象としては未解明の部分も多くあるが、いずれにしても、物理的側面よりも「せいしんてきの白い火」であることが重視されているのだと思ふ。

文語詩の下書稿（-）の初期形態は次のとおり。

はるかなる

コバルト山地白雲の

中に燃ゆるはま白の火

毛無のもりのきりあととは
亜鉛の雪を湛えたる

電線あやふく浮沈して
列車ボーイの顔さびし

ズインクダストの雪の列
毛無シの雪を削り行く

この段階では、口語詩にあつた「せいしんてき」な部分が後退し、即物的・現実的に描こうとしているように感じられる。ことに字下げ部分の登場は、それが明らかだ。

下書稿(一)の手入れでは、この傾向に拍車がかかり、物語化がいつそう進んでいるように思える。全篇を見てみたい。

① 蚕業の技師町の技手

礼して汽車のいでたてば
コバルト山地白雲の
中にま白き火は燃えぬ

② 電線しげく浮沈して

列車ボーイの面くらく
毛無のもりのきりあととは
亜鉛の雪を湛へたり

③ 県知事須藤三右衛門

信濃の原の豪族に
民うることを企みて
太きシガーをくゆらしぬ

④ せわしき松の足なみや

白のけぶりのかなたにて
ズインクダストの雲の列
毛無シの雪を削り行く

コバルト山地や、そこで燃える「せいしんてきの白い火」は完全に背景となつて、技手や県知事が登場するようになる。

そこでこの県知事が、「民うることを企」んでいるというのだが、「民うる」というのは、「得る」なのか「売る」なのかわかりにくい。ただ、シガー(葉巻煙草)をくゆらせながら企むということから、何やらよからぬことを考えているように思われる。

県知事が「民を得る」ことを考えたのか、「民を売る」ことを考えたのかははっきりしないまでも、満州移民に積極的だった岩手県知事・石黒英彦(任期は昭和六年から十二年)がモデルであつたとすれば、思い当たるのは、昭和七年三月に満州国が建国されると、満蒙開拓が国策として進められ、昭和七年九月には第一次武装移民団がチャムスに向けて旅立ったということだ(須藤や三右衛門という名の知事は、少なくとも岩手県には見当たらない)。この時の岩手県出身者は全員で四十一名(全国から四九二名集まったというので、岩手出身者だけで8・3%)だったというのが、『岩手県の百年』山川出版社 平成七年十一月)、その背景には、昭和六年の凶作のために欠食児童数が増え、失業者も増加、娘の身売りや親子心中も多かったという経済状況が影響したと思われる。

「信濃の原の豪族」も難解だが、長野県内からも第一次武装移民団に三十九名(全体の7・9%)も参加しているので、岩手県知事に匹敵する推進者がいて、その人物のことを指していると考えられることもできるかもしれない(飯田日中友好協会 <http://www.mis.janis.or.jp/~nihao-ida/index.html>)。

もしもこの「知事」が石黒英彦であったとすると、賢治が彼を批判する理由は他にもあった。賢治は「春と修羅 第二集補遺」の「朝日が青く」で、「軍馬補充部の六原支部が／来年度から廃止になれば／「約三字空白」産馬組合が／払ひ下げるか借りるかして／それを継承するのだけれども／組合長の高清は／きれいに分けた白髪を／片手でそつとなでながら／ひとつ無償でねがひたい」と書いていたが、石黒はここを昭和七年九月に払い下げ、六原青年道場を設立しているからだ。『岩手の百年』は、これについて「深刻な不況にあえぐ岩手の農民からその中堅人物をつくりだすための、皇国精神、日本精神の修練道場であって、農場とはいえない」と書いているが、これも賢治をがっかりさせたと思われるからだ。

第一次武装移民団のメンバーであった長倉直松の「満蒙開拓に参加の動機」(平和祈念展示資料館 <http://www.heiwakinen.jp/shiryokan/hikiage02.html>)は、当時の状況をこんな風に書いている。

私は明治四十二年一月秋田県の山村の農家に生れ、兵役の義務を終えた翌年の昭和七年外務省巡查満州国勤務を希望し、十月に弘前市にて行われる採用試験の日を待っている矢先に、村役場の兵事係りが来訪国策重大事業として在郷軍人から満蒙開拓武装移民五百人募集することに成りましたからとすすめられました。

一刻も早く彼の地へ渡りたい希望を抱いていたときなので早速その方に決意を定め応募致し合格、岩手県六原道場にて三週間の基礎訓練も済ませ出発の日が待ち遠しい毎日でした。愈々出発渡満

東北六県、関東五県から木工・鍛工・醸造を含めた精鋭百九十五人出発に決定、予め各連隊区から軍服軍靴の支給を受けて出発に備えておりました。

愈々九月末日出発、宮城を遙拝、明治神宮参拝、意気揚々神戸港を発ちました。

長倉の艱難辛苦はここから始まるわけだが、ここでは触れない。軍馬補充部の跡地はこのような施設となり、ここから満蒙に若い青年たちを送ったようである。長倉が六原で基礎訓練をしていた昭和七年の夏とは、賢治が初めて文語詩を雑誌に掲載した頃にあたるが、賢治の耳には六原道場の噂も耳に入っていたと思う。

ところで、この下書稿(一)の手入れは、もし開拓移民団のことを書いていたのだとすれば、昭和七年頃のものということになりそう。しかし、これには⑦印が原稿に付されており、島田隆輔(「初期論」『宮沢賢治論 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月)によれば、下書稿に⑦が付される下限は「昭和六年前後」なのだという。

賢治は昭和六年九月二十日に東京で発熱し、花巻に戻って病床に伏せるが、昭和七年春には「再編稿」を書きはじめる。「再編稿」段階にも、初期稿(△了稿▽)が発展してゆく場合が多くある。けれども、それらは△了稿▽の後継なのであり、再編の段階にその「了」印を得たものではないし、「了」印を新たに与えられる、ということもない」という。つまり、⑦印が付されている限り、今まで展開してきた開拓移民の話は昭和七年のこととなるので、すべて成立しないことになってしまう。ただ、島田説も絶対的な根拠に基づいているのではないことから、問題提起ということ、今しばらく開拓移民団説を掲げておくことも可能かと思う。

さて、ここまで下書稿(一)の手入れに関して追究してきたのだが、この構想は下書稿(二)であっさり廃棄され、ほとんど下書稿(一)の状態、すなわち技手や県知事は姿を消し、下書稿(三)では、四連構成が二連構成に、そしてその手入れの段階では、二連のみを残し、それが一連構成で全二行という定稿に繋がっている。

定稿では『春と修羅(第一集)』にあった心象スケッチの側面も

薄く、下書稿(一)の手入れ段階にあった社会批評も残っていない。ただ、雲の切れ間から見えるコバルト山地が、色が薄く見えたり濃く見えたりしたというだけのものだ。車窓の外に流れる山が、見る位置によって姿を変えていくというのは、鉄道ファンであり、また心象スケッチ家であった賢治が、よく試みたものだが、『春と修羅(第一集)』所収の「岩手山」において、光に包まれた岩手山を白と黒で描き分けたような効果を、北上山地を舞台にやってみたいつもりもあつたのではないかと思う。

岩手山
その散乱反射のなかに
古ぼけて黒くえぐるもの
ひかりの微塵系列の底に
きたなくしろく激むもの

この「岩手山」を文語詩化したと思われるのが、「二百篇」の「心相」だが、岩手山という対象へのこだわりと共に、それを見ている心についても問題化しようとするところが賢治らしい。また、ともに「二百篇」の中で「酸え」で見えると書かれているところも興味深い。

それにしても、一度現れたきりで、そのまま姿を見せなくなつた知事に関する記述はどうなったのだろう。あまりにも露骨な社会批判・人物批判を、文語詩にはふさわしくないと削除したのかもしれない。しかし、このアイディアは「五十篇」の「車中(一)」に受け継がれたのだと考えることもできると思う。

①夕陽の青き棒のなかにて、
開化郷土と見ゆるもの、
葉巻のけむり蒼茫と、
森槐南を論じたり。

②開化郷土と見ゆるもの、
いと清純とよみしける、
寒天光のうら青に、
おもてをかくしひとはねむれり。

「車中(一)」の下書稿には「狸のごとき大坊主」とあるから、賢治は彼を批判的に眺めているようだが、もちろん根柢はそれだけではない。車中であること、そして葉巻を吸っていることだ。賢治作品にはシガーや葉巻はよく登場するが、文語詩について言えば、定稿と下書稿を合わせても「シガー」が「コバルト山地」に、「葉巻」が「車中(一)」に、それぞれ一件ずつ登場するのみであり、同一人物ではないにしても、イメージはよく似ている。また、ここにある森槐南も気になる。槐南は近代日本を代表する漢詩人の一人だが、「評釈」(信時哲郎『宮沢賢治「文語詩稿」五十篇』評釈)朝文社平成二十二年十一月)では、森が香奩体、つまり女性の姿態・媚態などを官能的に描く作風で一世を風靡したことから、それを評価する開化郷土を批判したのではないかとした。

ただ、もし「車中(一)」における開化郷土に石黒知事のイメージが流れているとすれば、官僚でもあつた槐南が、伊藤博文と共にハルビン駅で襲撃された人物であることにも着目すべきだったかもしれない。ハルビンとは後の満州国を代表する都市の一つで、日本の満州進出について匂わせた可能性もあるからだ。また開化という文字は、開拓を示していたのかもしれない。

一介の読者にそんなことまで伝わるはずはないと思われるかもしれない。が、賢治が文語詩の推敲をしていたのは昭和初年である。治安維持法の下、羅須地人協会について事情聴取を受けた経験を持ち、多くの政治運動やプロレタリア文学運動が弾圧され、昭和五年には岩手でも共人會事件、昭和六年に岩手医専の検挙、昭和七年に新興教育連盟事件がおこっていた。誰が読んでくれるともわからない文語詩ではあつたが、当時の賢治の心境からすれば、これでも大きな冒険だったかもしれない。自分の身の安全のことなどはともかく、父や弟に迷惑がかかるのだけはしたくないと賢治だったら考えるはずで、だからすぐにはわからないような

書き方をした可能性も考えられてよいように思う。

先行研究

- 小野隆祥「幻想的展開の吟味」(『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッチ」探究』 洋々社 昭和五十七年十二月)
栗原敦「宮沢賢治と詩」(『文語詩』の位置) (『国文学 解釈と鑑賞 58-9』 至文堂 平成五年九月)
佐野晃一郎「宮沢賢治ノート5 消し去られた眼差 賢治のことばと絵」(『投擲通信10』 矢立出版 平成六年一月)
赤田秀子A「文語詩を読む その2 車窓のうちそと「保線工手」を中心に」(『ワルトラワラ13』 ワルトラワラの会 平成十二年八月)
赤田秀子B「文語詩を読む その7 酸っぱいのは南風? 虹? 「酸虹」他」(『ワルトラワラ18』 ワルトラワラの会 平成十五年六月)

33 日千害地世帯

多くは業にしたがひて 指うちやぶれ眉くらき
学びの児らの群なりき

花と侏儒とを語れども 刻めるごとく眉くらき
稔らぬ土の児らなりき

……村に^{あがた}県にかの児らの 二百とすれば四万人
四百とすれば九万人……

ふりさけ見ればそのあたり 藍暮れそむる松むらと
かじろき雪のけむりのみ

大意

たいていは家で農業の手伝いをしているために 指も荒れて眉も
くらい
そんな学童たちであった

花や小人の話をしても 刻まれてしまったように眉は暗いまま
稔りが望めない地帯の子どもたちであった

…村と県とにこうした子供たちが 村に二百人だとすれば県
では四万人
村で四百人だとすれば県では九万人…

ふりかえってみるとその周辺には 藍色がかって来た松林と
白くみえる雪煙のみしかみえなかった

モチーフ

下書稿も定稿も現存しない作品で、『新校本全集』には先行作品も
関連作品も示されていない。早害(日照りの害)をタイトルに付
しているが、眼前の日照りを描くのではなく、日照りがよくおこ
る地帯を描いている(「早害」と「雪のけむり」が同居することは、
普通は起こりえない)。そうした地に住む子どもたちに向って「花
と侏儒とを語れども」というのは、賢治が子供たちに童話を語っ
たことを意味するのだろう。それでも「刻める眉」が暗いままだ
ったというのは、彼らの心までを明るくすることができなかった
ことの告白なのかもしれない。もしかしたら、自らの著書『注文
の多い料理店』の失敗について語った詩なのかもしれない。

語注

入沢康夫(「文語詩難読語句(4)」 「賢治研究11」 宮沢賢治

研究会 平成二十二年九月)は「ぎょう」と読ませている。ここでも「ぎょう」と読み、「子供たちの多くも農業に従事して」の意に取りたい。「ごう」では仏教用語の業、すなわち「すべて過去になしたることのまだ報となつてあらはれぬ」(二十六夜)ことを意味しているように思えてしまうからである。

侏儒 小人のこと。『新語彙辞典』では、「栄養が悪く成長の遅れた、こびとのような「稔らぬ土の児ら」のことであろう」としていたが、『定本語彙辞典』では「心の余裕ももてない村の子どもたちに、花とこびとさんのメルヘンのような楽しいはずのおはなしを話して聞かせても、ということであろう」に改められている。改定は当然だと思う。ただし、自分自身が童話作家でもあつた賢治がどのような意図でこの語を使ったかについても考えるべきだろう。また、単に「白雪姫」(グリム)や「親指姫」(アンデルセン)などに出てくる小人のイメージを借りてメルヘンの説明をしようとしているのではなく、賢治にとつての小人とは、もつと生々しい存在(幻覚? 幽霊?)として描かれることが多く、言葉に込められているものは遥かに重かつたように思われる。

二百とすれば四万人／四百とすれば九万人 入沢康夫(前掲)は「にひやくとすればよまんにん」「しひやくとすればくまんにん」としているが、音数からしてそう読ませたかつたのだろうと思う。「二百とすれば四万人」であれば、「四百とすれば八万人」のように思われるかもしれないが、昭和初年の岩手県の市町村数は『角川地名大辞典』で数えたところ二三七であつたから、二〇〇×二三七＝四万七千四百人。四〇〇×二三七＝九万四千八百人となり、切り捨てればそれぞれ四万と九万となる。この数は欠食児童の数のことを指すのではないかと思われるが、こうした子が「村」に二百人いれば「県」では四万人、「村」に四百人いるとすれば「県」では九万人だということを書いたかつたのだろう。ただ、昭和七年七月の文部省発表によれば欠食

児童数は全国で二十万人を越え、岩手では三五三九人であつたというので、ここでは「満足に食事ができない子供たち」といつたところではないかと思う。

かじろき雪のけむり タイトルこそ「早害地帯」であるが、本作で早害そのものは登場しない。早害が多い地帯で取材されたというだけで、季節はまだ雪が残っているような初春であろう。栗原敦(「理念と現実①」)、『NHKカルチャーアワー 文学探訪 宮沢賢治』日本放送出版協会 平成十七年十月)が言うように、花巻近辺は昭和三十六年になつて豊沢ダムができるまで早害が多い地域、つまりは「早害地帯」であつた。

評釈

下書稿も定稿も現存しない。先行作品や関連作品についての指摘もない。生前発表もなし。本文は『新校本全集』に倣つて『十字屋版宮沢賢治全集』所収の本文を掲げた。したがつて句読点や丸番号が実際と違っている可能性が高い。

平沢信一(後掲)は、賢治の没後「詩人時代」(昭和十年三月)に掲載された際の形式が、定稿本文をかなり忠実に再現しているのではないかとし、さらに岡崎泰固が「宮沢賢治論」(「森1」昭和九年十二月)の中で「早害地帯」を引用している例から定稿本文は次のようであつたのではないかと提案している。

多くは業にしたがひて、 指うちやぶれ眉くらき、 学びの児らの群なりき。

花と侏儒とを語れども、 刻めるごとく眉くらき、 稔らぬ土の児らなりき。

……村に^{あがた}県にかの児らの、 二百とすれば四万人、 四百とすれば九万人……

ふりさけ見ればそのあたり、　藍暮れそむる松むらと、　かじ
ろき雪のけむりのみ。

ただ「……」の部分には問題があるかと思う。文語詩定稿には
は本作の他にも「記念写真」と「天狗草　けとばし了へば」(と
もに「一百篇」)に、「……○○○○○○○○○○……」とダッシ
ュで挟んでいる例がある。この二作の原稿コピーを見ると、どち
らも最初の「……」の上には一字分ほどのスペースがあり、『新校
本全集』でも、それを反映した本文としてのことから、「早害地
帯」においても、そのくらいのスペースがあったと考えたほうが
よいように思う。『十字屋版全集』でも、字下げされていたことを
思えば、やはり一文字分程度あいていたように思う。

したがって本評釈のスタイルで定稿を再現すれば、次のような
ものになったかと思われる(「詩人時代」では①④と書かれてい
たというが、これは①④という丸番号であったと思われる)。

①多くは業にしたがひて、　指うちやぶれ眉くらき、　学びの
児らの群なりき。

②花と侏儒とを語れども、　刻めるごとく眉くらき、　稔らぬ
土の児らなりき。

③ ……村にあがた県にかの児らの、　二百とすれば四万人、　四
百とすれば九万人……

④ふりさけ見ればそのあたり、　藍暮れそむる松むらと、　か
じろき雪のけむりのみ。

東北地方は大正末年から昭和初年にかけて連続して早害に襲わ

れたが、その頃の経験に基づいたものだろう。これまでにも何度
か指摘してきたが、「五十篇」と「一百篇」では、扱うテーマや頻
出する語句に違いがあり、早害については「五十篇」において、
少なくとも定稿に書かれている例がない(例えば「五十篇」の
「水と濃きなだれの風や」の下書稿(-)には「ひでり」の語があ
る)。しかし、「一百篇」では本作をはじめ、「早儉」や「朝」に早
害が登場している。ただ、それぞれの作品がそれぞれの側面から
アプローチしており、本作では子どもからスポットがあてられて
いるようだ。

さて、本作は早害地帯の子どもたちの将来を憂えている作品な
のだが、まず気になるのが「花と侏儒とを語れども」である。『定
本語彙辞典』にあるように、たしかに「花とこびとさんのメルヘ
ンのような楽しいはずのおはなし」なのではあるが、賢治がそ
うしたおはなしの作者であったという視点が欠けているのが、ま
ず気になるところだ。また、「小人」とは、単に子供向けの楽しい
メルヘンを代表するものとして登場しているわけではなく、賢治
の童話観、異界観、宗教観をも象徴するものとして登場している
ことにも注意するべきだと思う。

例えば、賢治が大正八・九年頃に書いた散文「うろこ雲」とい
う不思議な作品などを読むと、ただ子供向けのお話というだけで
この語を使っているわけではないように感じられる。

「うろこ雲」はこんな話である。話者が北上川に沿って歩いて
いると、「小さな甲虫がまっすぐに飛んで来て私の額に突き当りヒ
ヨロ／＼危うく落ちやうとして途方もない方へ飛び戻る」。すると、
「原のむかふに小さな男が立ってゐる。銀の小人が立ってゐる。
よこめでこつちを見ながら立ってゐる。にやにやわらつてゐる。
にやにや笑つてうたつてゐる」。そして、次のような歌をうたい始
める。

なんばん鉄のかぶとむし

月のあかりも つめくさの
ともすあかりも 眼に入らず
草のほひをとび截って
ひとのひたひに突きあたり
あわてよよろ

落ちるをやつとふみとまり
いそいでかぢを立てなほし
月のあかりも つめくさの
ともすあかりも眼に入らず
途方もない方に 飛んで行く。

うたい終わると、小人は「よこめでこつちを見ながら腕を組んだまゝ消えて行く」。この小人の歌の歌詞は、『新校本全集¹² 校異篇』も指摘するように、「ポランの広場」や「ポラーノの広場」に踏襲されている。

榊昌子（「うろこ雲」 『宮沢賢治「初期短編綴」の世界』 無明舎出版 平成十二年六月）は、さらにこの素材が幅広く使われていること、例えば「ポランの広場」では、「一びきのかぶとむしがぶうんとやって来てぢいさんのひたいにぶつつかった」とあり、そのあとで、「うろこ雲」に登場する歌と似た歌が登場し、この歌を歌ったのは、風の精だとされる伝説上の存在である又三郎なのだということ指摘する。

佐藤栄二（「賢治の愛した小人」 『賢治研究¹⁰³』 宮沢賢治研究会 平成二十年二月）は、榊の論考を受けて、小人を「ハファンタジーの種子Vのシンボル」として、「春と修羅 第二集」所収の「九九 「鉄道線路と国道が」 一九二四、五、一六、」に「赭髪あかみげの小さなsodini」が登場すること。「ざしき童子のはなし」では小さな子供としての幽霊が登場すること。また、『春と修羅（第一集）』の「樺太鉄道」には「コロボックル」が登場し、童話「水仙月の四日」には雪童子が登場するが、彼らも小人の仲間であろう

という（なお、佐藤は『春と修羅（第一集）』の「滝沢野」に「四角な若い樺の木で/Green Dwarfといふ品種」とあるのを「緑の小人」としているが、dwarf cherryという背が高くない桜を指すものと思われるので、これはやや性格が異なっているように思う）。

たしかに小人と言えば、グリム童話の「白雪姫」やアンデルセンの「親指姫」あたりがイメージに浮かび、童話やメルヘンらしいものを想像するかもしれない。しかし、賢治の場合の小人は、自ら童話集『注文の多い料理店』の「広告ちらし」で語っているように、「たしかにこの通りその時心象の中に現はれたもの」と考えるべきで、夢か幻覚の中で出会ってきた存在たち、あるいはこう言つてよければ、異空間で出会った存在たちだといふべきで、ただイメージとして語っているわけではないだろう。榊も佐藤も本作における「侏儒」については言及していないが、侏儒を語るとは、まさにファンタジーを語るといふこと、それも異空間に実在する者たちの物語を聞かせるということだったように思われる。右にあげた中でも、特に重要なのは「九九「鉄道線路と国道が」」である。

鉄道線路と国道が、
こゝらあたりは並行で、

並木の松は、

そろつてみちに影を置き
電信ばしらはもう堀をおこした田のなかに

でこぼこ影をなげますと
いたゞきに花をならべて植えつけた
ちいさな萱ぶきのうまやでは

馬がもりもりかいばを噛み
頬の赤いだしの子どもは
その入口に稲草の縄を三本つけて

引っぱったりうたったりして遊んでゐます
柳は萌えて青ぞらに立ち
田を犁く馬はあちこちせわしく行きかへり
山は草火のけむりといっしよに
青く南へ流れるやう
雲はしづかにひかつて砕け
水はころころ鳴つてゐます
さっきのかゞやかな松の梢の間には
一本の高い火の見はしごがあつて
その片つ方の端が折れたので
緒髪の小さなbobinが
そこに座つてやすんでゐます
やすんでこゝらをながめてゐます
ずうつと遠くの崩れる風のあたりでは
草の実を啄むやさしい鳥が
かすかにごろごろ鳴いてゐます
このとき銀いろのけむりを吐き
こゝらの空気を楔のやうに割きながら
急行列車が出て来ます
ずゐぶん早く走るので
車がみんなまはつてゐるのは見えますので
さっきの頬の赤いはだしの子どもは
稲草の繩をうしろでもつて
汽車の足だけ見て居ます
その行きすぎた黒い汽車を
この国にむかしから棲んでゐる
三本鎌をかついだ巨きな人が
にがにが笑つてじつとながめ
それからびっこをひきながら
線路をこつちへよこぎつて

いきなりぼつかりなくなりますと
あとはまた水がころころ鳴つて
馬がもりもり嘔むのです

ここではゴ布林だけでなく、「巨きな人が／にがにが笑つてじつとながめ」、「いきなりぼつかりなくなります」といった巨人まで登場する。小人と巨人では正反対だが、やはり彼も「ハファンタジーの種子Vのシンボル」として登場しているのだろう。というのも、賢治は巨人についても多くの幻想的な言葉を綴つており、例えば『春と修羅（第一集）』の冒頭に収められた「屈折率」には「アラツディン、洋燈とり」とあるし、「春と修羅 第二集」の「一九五 塚と風 一九二四、九、一〇、」には「髪を逆立てた印度の力士ふうのもの」が現れている。また、「五十篇」の「民間薬」には、夢の中に「古き巨人」が現れて、薬草の使い方について教えてくれる。このほかにも鬼や鬼神の用例をあげていけばきりがながい、いずれにせよ問題なのは、異空間の存在たちが大きいか小さいかではなく、異世界の存在が現実世界に生きる賢治と出会つてしまうという事態であろう。

さて、この「九九 「鉄道線路と国道が」」には、口語詩の最終形態が書かれた詩稿用紙の欄外に「童話の扉へ」というメモがあり、中地文（「宮沢賢治もう一つの童話序文」（「批評へ2」児童文学評論研究会 平成四年二月）が指摘するように、これは「『注文の多い料理店』以外でありながらそれと同じ傾向・特色を持つ童話集のために用意された」「もう一つの童話集序文」であったと考えられる。杉浦静（「宮沢賢治 心象スケッチ 九九 「鉄道線路と国道が」考」 「大妻国文34」 平成十五年三月）は、これを受けて「近代化されつつある今・現在という時間を明示する場所を描き出す。ゴ布林に、伝承的巨きな人の存在を追加し、これら童話的・伝承的存在と近代化される風土の親和的・調和的様相が心象スケッチとして定着された」のだという。

こうしてみれば文語詩「早害地帯」に登場する「侏儒」という語も、「ハファンタジーの種子」のシンボル」として現われているとすべきで、文語詩の視点人物が賢治であったとすれば、自分が「早害地帯」とされる地域で子どもたちに向って童話を語り聞かせた経緯について書いているように考えられるのである。

もちろん文語詩は多分に虚構化が施されており、賢治自身が体験したことであっても、推敲がされるにしたがって第三者化、虚構化されていくことについては十分に理解しているつもりである。しかし、あけすけに自分自身を語っていると思われるような作品も一つや二つではない。そこで、一つの仮定として、文語詩から賢治の人生を照らし出してみたいと思う。

さて、何かの折に、賢治は早害地帯の子供たちに向って童話を語る機会があったようだ。しかし、この「稔らぬ土の児ら」は、「刻めるごとく眉くらき」ままであったというのである。なぜ、賢治の童話は受け入れてもらえなかったのだろうか。

賢治は大正十三年十二月刊の『注文の多い料理店』の「序文」で、次のように書いていた（序文の日付は大正十二年十二月二十日）。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。

わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

現実世界の食べ物が十分ではない「岩手」でも、心のスイッチを入れ替えさえすれば、理想郷としての「イーハトヴ」では、うつくしい食べ物を獲得することができるという。また、現実世界

の着物がなくても、「イーハトヴ」ならば、何の不自由もなくきれいな着物を着ることができるという。

賢治は「広告ちらし」において、自分の書いた物語は、「どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である」。つまり、「純真な心意の所有者」である子どもならば、必ず理解してくれるという自信があったようだ。

ところで、賢治が童話集の刊行を近森善一に頼みに行った際、こんなやりとりがあったという（鈴木健司「童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐる 発行者・近森善一の談をもとに」『宮沢賢治という現象 読みと受容への試論』蒼丘書林 平成十四年五月）。

小川未明という人があったでしょ。わしはあの人だったように思うが。「その人か、鈴木三重吉さんですかね」とにかくね。わしもその時分には知っていたんだけど、そこへ行つて見てもらったということだ。見てもらったからね、ぼろくそに言われたということだ。わしはちよつと思ひ違ひして他にあったかもわからんが、何でも「内容に教訓的なところがないというような批判をされた」と言つてね、怒つてわしのところに来たですよ。

「読んでみてくれ」と言つてね。わしは読んだら、ひとつ何か「注文の多い料理店」かしら、あれは分かった。他のやつは何が書いてあるか一向わからんのだ。「俺はこれはひとつも分からん」と言つたらね、「そりゃ、おまえさんが分からないのでは困る。こつちの言葉で書いてあるから、まだおまえさんは知つているといつても十分には分かつていないから、俺が子どもを連れてきて読んで聞かすから、子どもが喜んだらどうだひとつ出版してみてくれなにか」ということだ。それなら子ども呼んで来いということだね、それから子どもを一〇人ほど集めてきた。読んだ子どもは喜ぶんだ。わしは分からのだ、そのひとつも。

まさに「広告ちらし」にあるとおりで、大人には不可解でも、子どもには通用しているのである。賢治はこれまでも子どもたちを読み聞かせを行ったことがあり、その反応を見た結果、自らの童話の性質を理解し、それが「広告ちらし」の内容となったのだろう。

『注文の多い料理店』は大正十三年十二月に刊行され、「九九〔鉄道線路と国道が〕」は大正十二年五月十六日に書かれているが、この頃には、まだ自分の童話が子どもたちに受け入れられない可能性など、全く考えていなかったのだろう。「童話の扉へ」というメモは、下書稿(二)に鉛筆で手入れをした際に書かれており、中地(前掲)によれば大正十三年五月よりまいぶあとで、『注文の多い料理店』の刊行よりもさらに後だろうとされているが、とにかく、この頃までは万全の自信を持ち、『注文の多い料理店』の「広告ちらし」に「十二巻のシリーズの中の第一冊」とあることを考えれば、第二冊めの童話集の扉にでも掲げるつもりがあったのだろう。

しかし、或る時、賢治は早害地帯の子どもたちに「花と侏儒とを語れども」、「刻めるごとく眉くらき」ままだったという事実に出くわすわけである。

『注文の多い料理店』の「序文」では、イーハトヴなら現実の食べ物にも着物にもこだわらなくてよいのだと賢治は書いたが、早害地帯の子どもたちは、現実的なたべもの(着物)が必要だったということなのだろう。賢治は、「純真な心意の所有者」である子どもに対して、自分の童話が効果を持たない例に、初めて出会ったのであり、それは、これまでの童話の構想が破綻したということの意味する。この詩は、そのことを書いているのではないだろうか。

『定本語彙辞典』には、一九二四(大正十三年)年の項に「この年、日照りが四十余日続き、各地で水喧嘩が起き、早害のため畑

作五割減収」とある。賢治とも交流のあった盛岡測候所長・福井規矩三(「測候所と宮沢君」『宮沢賢治研究資料集成2』日本図書センター)平成二年六月。初出は昭和十四年九月)は、「昔から岩手県では早魃に凶作なし」と言われていたが、「大正十三年の早天は、岩手県では近ごろではなかった早害の記録で、以前は何時でも水が余つてゐたので、水不足で作付が出来ないといふことはなかった。大正七年にもちよいとした小規模な旱天があつたが、大正十三年のはとてもとでもきつかった」というので、賢治自身にも衝撃が大きかったのだろう。また、賢治は口語詩「毘沙門天の宝庫」で、「大正十二年や十四年の／はげしい早魃」とも書いていることから、早魃はその翌大正十四年にも起つたことがわかるが、さらに大正十五年にも「六月／＼七月 早害。七月一七日まで雨量少なく植えつけに困難」(『定本語彙辞典』)とある。

文語詩の内容を信じれば、この三年間のどの年かの冬から早春にかけて、賢治は自らの童話の方向転換を考えざるを得ない事態にたちいたつたということになりそうだ。賢治が「十二巻のシリーズ」で童話集を刊行するという構想を棄てたのは、童話集の売れ行きが悪さ、あるいは発行者である近森善一らの事情によるものと思われるが、もっと賢治自身の内的な理由であつた可能性についても考えるべきなのかもしれない。

事実、この頃から、賢治の書く童話は、心象スケッチ的にあふれでてくるイメージをどんだん書き綴っていくタイプから、現実的でしつかりした作風のものが増えていくように感じられるが、もしかしたら、これも早害地帯での子どもたちの反応がきっかけになつていたのかもしれない。例えば、散文「(或る農学生の日誌)」では、大正十二年から十五年にかけて三年連続で早害が続いたことが書かれているが、草稿には「アドレスケート ファベール／ノベール レアリースタ」とある。『定本語彙辞典』によれば、これは「青少年物語／写実小説」の意味のエスペラント語なのだというが、これも早魃が賢治作品を写実に向かわせた一つの証

拠だと言えるかもしれない。

もつとも、下書稿も定稿も現存せず、先行作品も関連作品さえも指摘されていない本作一篇から、大きなことを言いすぎているかもしれない。しかし、それにしても大正末年における早害の経験は、農業に対する賢治の思いを新たにただけでなく、童話構想に関しても修正を迫った可能性があることだけは、たとえ本作一篇があるだけであつても考えておくべきではないかと思うのである。

先行研究

中村稔「鑑賞」(『日本の詩歌18 新訂版 宮沢賢治』 中央公論社

昭和五十四年九月)

宮沢清六「賢治の世界」(『兄のトランク』 筑摩書房 平成三年十

二月)

栗原敦「Q&A 定稿用紙の失われた「文語詩稿 一百篇」作品」

(『宮沢賢治研究Annual18』 宮沢賢治学会イーハトーブセンター

平成十年三月)

平沢信一「定稿紛失作品「早害地帯」の本文校訂に関わる一試

論」(『宮沢賢治《遷移》の詩学』 蒼丘書林 平成二十年六月)

34 「鐘うてば白木のひのき」

① 鐘うてば白木のひのき、 ひかりぐもそらをはせ交ふ。

② 凍えしやみどりの縮葉甘藍、 県視学はかなきものを。

大意

鐘の音が白木のひのき校舎に響き渡り、上空と下空の雲が反対方向に動いている。

寒さで緑色のケールは凍てついただろうか、県視学とは何を存在なのやら。

モチーフ

舞台になつてゐるのは花巻農学校のひのき作りの校舎であろう。雲ゆきもあやしいのに、県視学はまだ帰ろうとしない。管轄内の学校がきちんとした教育をしているかを監督するのがその役目だが、賢治たち教員にとつては厄介な存在。「はかなき」仕事をす「はかなき」存在に見えたということだろう。

語注

白木のひのき 稗貫農学校は郡立から建立に移管し、場所も名前も改められた。新校舎はひのき作りであつたという。「一百篇」の「燈を紅き町の家より」にも「あはたゞし白木のひのき」とある。

ひかりぐもそらをはせ交ふ 渡辺悦子(後掲)によれば、「通常、

雲は風の流れにのつて同じ方向に移動しているが、低気圧や前線の通過時には「雲が下の方と上の方と、すっかり反対に矢のように馳せちがつて」(散文「化物丁場」)いるという現象が起きることがある。荒天の前兆である」という。

縮葉甘藍 ケールはキャベツの祖ともいうべき野菜だが、日本では食用よりも観賞用に栽培されることが多かった。キャベツのように結球せずに葉が縮れるものも多い。賢治は花壇設計においてもケールを使った。渡辺(後掲)は本作におけるケールについて、「みふゆ」「みどり」のケールとあることから、寒さに強く、冬でも葉が緑でしかも縮れているスコッチケールの一種ではないかと思われる」とする。

県視学 『日本大百科全書』によれば、「中央・地方の視学機関はいずれも、学事の視察にあたって強大な監督、命令権をもち、

また教員人事にも介入したため、教育の国家統制が強まるにつれて教員に恐れられる存在となり、視学本来の専門的指導助言機能は果たされず、監督的、統制的になり、教員の教育活動を圧迫するという致命的な弊害を招いた」とのこと。戦後は指導主事制度に改められ、教員の相談相手として指導・援助を行うようになった。花巻農学校教諭時代の県視学官は羽田正。

評釈

黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿（一）（タイトルは「県視学」。青インクで①）、その余白に書かれた下書稿（二）（タイトルは「校長」、のちに「朝」）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

先行作品や関連作品についての言及はないが、渡辺悦子（後掲）は、似た表現の出ている作品として「春と修羅 第二集」の「三七七 九月 一九二五、九、七、」をあげる。ここには「キヤベジとケールの校圃を抜けて」や「誰か二鐘をかんかん鳴らす」とある。

また、渡辺は「未定稿」の「会計課」の下書段階に、「くしゃくしゃになれ みふゆのケール／しんとつぐめよさびしきくちびる」とあり、これも農学校（ただし移転する前の稗貫農学校時代のもの）を舞台にしたものであると指摘している。では、下書稿（一）から見ていきたい。

まばゆきくもははせくれど

県視学氏は去らんともせず

エレキの雲のはせちがひ

県視学氏はたばこくゆらす

各連の一行目は雲のこと、二行目は県視学のことを書くのみのシ

ンプルなものである。これが下書稿（二）になると、タイトルが「校長」となる。

二鐘うて八時十分

ひかりぐもそらをはせ交ふ

凍えしやみふゆのケル

県視学たばこくゆらす

下書稿（一）では、どこが舞台かもわからなかったが、ここではタイトルや「二鐘」があることから学校であることがわかるようになり、ケールも登場する。また、「去らんともせず」から、夕刻あたりであった時間帯が、朝の八時十分に早まっている。

さて、県視学とはどのような存在なのだろうか。簡単に言えば各種の学校においてきちんとした教育が行われているかをチェックする役人だが、渋谷徳三郎の『教育行政上の実際問題』（敬文館 大正十一年五月）によると、「視学制度の改善」とした章で、「府県視学官は理事官を以て之に補するの制度にして、理事官は高等文官試験に合格せる者を以て之に充つるを表面の形式とするも、其の実は法科大学を卒業し、単に法律を学びたるものを採用するに過ぎず。尚ほ適切に言へば、法律の理論を暗誦したる白面の一書生たるに過ぎずして、視学官の本領たる教育の内容実質に至りては毫も関知する所なきを常とす」とし、制度上、きちんとこれをやり遂げようとする人が少ないことを指摘している。「而も此の無知無経験の法学書生が、一度視学官の職に就くや、徒らに権柄を弄して教育者の活動を妨げ、其の施設経営を破壊するのみならず、或は有徳の教員を罷免し、或は自己の親戚朋友を推挽し、非違を敢てしたりと評せられしこと少からざりき」という。真面目にやりたいと思う者は少なくても、視学官には人事権まであったから好き勝手に教員を辞めさせたり、親類縁者や友人を採用する

といったこともできたようである。

管賀江留郎の「少年犯罪データベース」(<http://kangaeru.s59.xrea.com/index.htm>)によれば、視学にまつわる事件が多々発生しており、たとえば昭和七年六月に新潟で起こった贈収賄事件では、「新潟県で、小学校校長の椅子を金で買ったための贈収賄事件が発覚し、教師500人が取り調べられて小学校校長24人と県の教員人事を統括している視学という役職の者9人が逮捕起訴」。また昭和八年十一月には「東京市で、小学校校長の椅子を金で買うための贈収賄事件が発覚し、翌年2月までに視学と校長ら45人が逮捕起訴」といった事件が起こっている。

では、羽田正はどんな人物だったのだろうか。

羽田は『新校本全集』によれば、一八八〇（明治十三）年に花巻町に生まれ、岩手師範学校尋常師範科卒。小学校訓導や校長を経て稗貫郡視学となった人物である。花巻の事情にも詳しく、教員の経歴もあることから、履歴に関しては問題がない。稗貫郡の郡視学であった羽田は、「座談会・賢治素描」（森莊巳池『宮沢賢治の肖像』昭和四十九年十月津軽書房）で、稗貫農学校の教員の補充人事があった時に、賢治が変わり者だという噂は聞いていたが、「お目にかかったときの初対面の感じでは、変人、奇人というようなことは、少しもありませんでした。ただ、おだやかな、おとなしい人というようにみえました」と語り、採用を決めている。

羽田と農学校の教員たちとのコミュニケーションもうまくいっていたようで、文献に残っている限りでは、悪い印象を残すものはない。『新校本全集』の年譜を見ても、賢治の同僚であった堀籠文之進の結婚式、農学校の卒業式、花巻高等女学校校長宅での座談会や輪読会などで賢治と顔をあわせることが多々あり、農学校時代ではないが、昭和二年に賢治は羽田の紹介で岩手県庁教育課に勤めていた刈屋主計を知り、妹・クニとの縁談、結婚にまで話を進めている。仲人を務めたのはもちろん羽田である。

また、羽田は賢治の服装について「宮沢さんは、エチケツトはすっかりした人で、人に会うときは、すっかりした服を着ました。白い麻の洋服を着て、エスペラントの講習に出ましたし、ハオリハカマをつけられたときのようすは、りっぱなものでしたね」（森莊巳池 前掲書）という。これについては農学校校長だった畠山栄一郎も「郡の視学（指導主事）が授業参観にみえたことがあるが、そのときの宮沢先生は羽織、袴であった」（佐藤成「鳥のように教室でうたつてくらしした毎日」『証言 宮沢賢治先生 イーハトーブ農学校の1580日』農文協 平成4年6月）と語っていることと一致している。

豪放磊落な畠山校長は賢治の人となりを受した人物だが、同僚だった阿部繁は「宮沢さんはダルマぐつで、生徒のお掃除した廊下を歩いたり、窓を越えて職員室に入ったりと、校長は、一君、それはいけないじゃないか。と、とめるのです」（「或る対話」森莊巳池 前掲書）といったやりとりを紹介している。そんな賢治が、畠山の証言によれば、郡視学の視察の際には羽織・袴であったというのだから、県視学が来たときに限って、賢治はとも気を遣って、よそいきの恰好をしていたということだろう。

また堀籠は、賢治が「県視学などの歓迎会するときなど、お酒は飲みましたが、そんなとき、盃をさされると、たしかにすぐ返ししました」（「或る対話」森莊巳池 前掲書）と書いている。酒席を好まなかった賢治だが、県視学が関われば出向かざるを得なかったのだろうし、できるだけだけの礼儀を尽くそうとしているのが知れる。

先に花巻高等女学校校長宅での座談会や輪読会では、羽田と賢治が同席することがあったと書いたが、『新校本全集』の年譜によれば、輪読会のテーマは「完全人とは如何なる人か」「愛国心完本質並涵養方法」「国体の精華に就て」というもので、あまり賢治が積極的に参加したがる性格のものではないように思う。

以上の諸点から考えて、賢治と羽田の付き合いは長く、多岐に

わたってはいたが、とても他人行儀で、儀礼的・形式的な側面が強かったということは否めない。当たり前と言えば当たり前のことかもしれないが、校長をはじめとした農学校のスタッフは、自分たちの生殺与奪の権利を握っている羽田を、下にも置かぬようにして接していたというのが本当のところだろう。

さて、そうしてみた時、「たばこくゆらす」↓「遠くあぎたふ」(「あぎと」(あご) から来た語で、幼児などが口をパクパクすることをいう) ↓「はかなきものを」と書き継がれてきた羽田県視学がどのような存在であったかと言えば、限りなく厄介な存在だと思われるということになるだろう。ことに定稿における「はかなきものを」とは、「取リトメタルコトナシ。仮初ナリ」

(『大言海』)と書かれるような存在だということであるから、ただ、厄介な存在だというだけでなく、存在する意味の薄い者、むしろ存在しないで欲しい者だとして厭われていたといった方がよいかもしれない。

渡辺(後掲)は、「最終稿における「県視学」という言葉には深読みかもしれないが「国家主義的教育統制」という意味が含まれていたのではないだろうか」としている。例えば大正十三年六月の学校劇禁止令の報せは、学校劇に意欲的だった賢治をたいへんがっかりさせたと思われるが、職務としてそれを指示し、また、監視したのも羽田であろう。仕事に忠実だったというだけで、羽田正という人間に問題があったとは必ずしも言えないにせよ、賢治にとっては、何とも気詰まりな、早く立ち去ってほしいと思うような人であったのは確かなようである。

先行研究

渡辺悦子「鐘うてば白木のひのき」(『宮沢賢治 文語詩の森』)

柏プラノ 平成十一年六月

35 早池峯山巖

①石絨脈^{アスベスト}なまぬるみ、

いはかゞみひそかに熟し、

苔しろきさが巖にして、
ブリューベル露はひかりぬ。

②八重の雲遠くたゞえて、
白聖紀の古きわだつみ、

西東はてをしらねば、
なほこゝにありわぶごとし。

大意

蛇紋岩の石綿のスジも温かくなり、苔で白くなっているように見えているが、
イワカガミの花はひっそりと染まり、ツリガネニンジンに露が光っている。

遠く幾重もの雲が重なって、西も東も果てしなく広がっているように見えるが、

白聖紀には海だったというこの一帯に、今もここにあるように感じられる。

モチーフ

賢治の指導教授である関教授の醜態を描くつもりであったと思われるが、下書きを進めるうちに人事の介入しない秀麗な早池峰山のみを描く作品に仕立てたようだ。この改稿の真意はわからないが、「五十篇」と「二百篇」の構成意識の違いによるのかもしれない。

語注

石絨脈^{アスベスト} 入沢康夫(『文語詩難読語句(4)』「賢治研究11」宮

沢賢治研究会 平成二十一年九月)で、「脈」を「ミヤクオスジ」として決めかねているが、たしかに下書稿の段階では

「脈」を書いて「すじ」とルビを振っていたことから、定稿になって初めて「脈」の字をルビなしで書いているのは、どういふことなのか判断しにくい。ここではひとまずスジを提案しておくことにする。石絨は石綿のこと。蛇紋石や角閃石が繊維状に変形した天然の鉱物の総称で、耐火性、絶縁性、耐薬品性に富み、安価で加工しやすいために建材や電気機器などの様々な用途で広く用いられた。ただ、飛散して肺に吸い込まれると珪肺、中皮腫、肺癌などの誘因となるために現在では使用が禁止されることとなった。

なまぬるみ 陽にあたって「なまぬるくなって」ということだろう。関連作品の口語詩「一八一 早池峰山巔 一九二四、八、一七、」に「石絨の神経が通り」と、擬人化して表現していることから、生物的なぬくもりを与えたということではないだろうか。また、かつて蛇紋岩を温めて布にくるみ、カイロのように使うことがあり、温石石と呼ばれたが、そうしたイメージも働いたかと思う。「歌稿〔B〕」の「大正五年三月より」に、「²⁸⁹うすぐもる／温石石の神経を／盗むわれらにせまるたそれがれ。」^{289a} 石絨を砕きて／いよようらがなし／曇りのそらの／岩のぬくらみ」²⁹⁰ タぐれの／温石石の神経は／うすらよごれし 石絨にして。」がある。

苔しろきさが 乗松昭(後掲A、B)は、「険。嵯峨。山などの高くけわしいさま」としているが、「すがた」の意味であろうかと思う。『新語彙辞典』では「詩意は不分明だが「石絨の層が夏の訪れに生温み、苔の白い相が巖になつていて」の意か？」としているが、ここでは関連作品の口語詩「一八一 早池峰山巔」の下書稿(一)に「奇怪な灰いろの苔にいろどられ」とあることから、「コケの白い姿が巖をいろどり」と解したい。

いはかどみ イワウメ科イワカガミ属の多年草。春から夏にかけてピンク色の花を咲かせる高山植物で、葉がツルツルして光沢があることから「岩鏡」と呼ばれた。

ブリューベル 釣鐘状の花を付けた花。口語詩「一八一 早池峰山巔」では釣鐘人參にブリューベルとルビを振っている。英語のブルーではなく、ドイツ語のブリューを使っていることについて、『定本語彙辞典』では、俊野文雄による「鐘のごとき花」(blüh-bei)説を取っている。

白聖紀の古きわだつみ 早池峰山は約一億年ほど前の白聖紀の頃には海に浸されていたことを指す。ただし、加藤碩一(「賢治の地質学とその背景」『宮沢賢治の地的世界』愛智出版 平成十八年十一月)によれば、賢治の時代には、今よりも地球の歴史は短く考えられており、白聖紀はおよそ四千万年前と考えられていたという。「五十篇」の「水と濃きなだれの風や」では、やはり早池峰山に「海浸す日」があったことを書いている。**ありわぶ** 『定本語彙辞典』では「この世に住みにくいと思う」とある。『角川大古語辞典』にも「おもしろくなく暮す。生活がひつ迫して暮しを立てかねる意にも用いる」とある。ただ、「白聖紀の海が今もなおここで住みにくく思っているようだ」では、意味が通りにくい。五七調を七五調風に読むことになるが、「あり」と「わぶ」を切つて、「今もなおここにあって、静かに生き延びているような気がする」という意味に取りたい。

評釈

無野詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(鉛筆で①)、その裏に書かれた下書稿(二)(タイトルは「政客(写真に題す)」から「政客とその弟子」、さらに「政客」、下書稿(一)の余白に書かれた下書稿(三)(タイトルは「早池峯山巔」。藍インクで②)、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。関連作品に「春と修羅 第二集」所収の「一八一 早池峰山巔 一九二四、八、一七、」がある。文語詩の下書稿(一)の最終形から見ていきたい。

その岩山のいたゞきの
白きうす日のなかにして
ひるげを終り図を投げて
わが師つかれてまどろみき
われその面をうちのぞみ
せなかも寒く立ちすくむ
そはその頬は頬をもて
額はさらに額もて
恐らく怪しき山塊と
酒にまみれしをみなごと
二つの夢を見るさまなりし

神秘なる早池峰山を描いた定稿から見えていくと驚かされるが、まだタイトルも付いていない段階では、このような詩であった。ここには「岩山」や「山塊」という言葉こそあるものの、メインに描かれているのは「わが師」、つまり賢治の指導教授であった関豊太郎の醜態である。「文語詩篇」ノート」の「1918」に「五月／志戸平、関、給仕を〔み〕泣く／老博士。楷段」とあり、文語詩への改作済を示すと思われる藍インクによる削除の跡が残っているが、それがこの下書稿なのだろう。「五十篇」の「夜をま青き蘭むしろに」の「評釈」（信時哲郎『宮沢賢治「文語詩稿」五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月）の内容を繰り返すことになるが、概要を改めて記しておきたい。

賢治の甥である宮沢淳郎（「恩師と芸者」『伯父は賢治』八重岳書房 平成元年二月）によれば、賢治が稗貫郡土性調査を始めた大正七年五月、その進み具合をたしかめるために関は花巻を訪れたという。宮沢家で西鉛温泉の宿を手配したところ、関は「おい、宮沢君。芸者をひとり世話してくれないか」と頼んだとのこと。どうしたらいいものかと賢治は政次郎に相談をもちかけるが返事を得られなかったため、賢治は生家裏の大工町にいた「ごん助」

に関の相手を頼みに行ったらしい（賢治は妹クニに「ごん助さんのところはおもしろい。これから毎日でも、話しに行かなければ……」と語ったとのこと）。その後の関とごん助の様子を描いたものが下書稿（一）なのではないかと思う。

賢治は志戸平と書き、宮沢淳郎は西鉛と書いていて、どちらかに錯誤があるかと思われるが、同年五月十三日には台温泉の逢陽館から、五月十九日には大迫の石川旅館から書簡を送っている。で、詳細に不明な点も多いものの、花巻西部の温泉地周辺の調査の後、早池峰山にほど近い大迫に向ったということになる。花巻西部の温泉地での経験を、大迫での出来事として書き換えるといった操作（あるいは混同）はあったかもしれないが、文語詩にはよくあることだ。

関教授は東京帝国大学農科大学を卒業し、明治三十八年に盛岡高等農林学校に赴任。ドイツやフランスに留学し、博士号を取得。稗貫郡土性調査を指揮したり、東北の冷害の原因をヤマセに求める研究や、賢治が東北砕石工場で石灰岩抹の製造販売をすることについての意見を求めるなど関の指導とアドバイスは大きな影響を持った。しかし、気難しいことでも有名で、学生たちからはライオンとあだ名をつけられて敬遠され、賢治のみがうまく付き合うことができたとも言われている。

大正七年、研究生になった賢治は、関と共に土性調査を始めるが、その矢先の五月のできごとがこれであった。「五十篇」では、関の醜態、あるいは気むずかしさについて、先にあげた「夜をま青き蘭むしろに」や「雪の宿」などで取り上げているが、賢治が酒席に侍る「をみなご」たちと間近に接する機会を持つようになったのもこの頃で、そのシヨックを書きつけたのが下書稿（一）なのだろう。

続く下書稿（二）では、関と賢治ではなく、「政客とその弟子」というタイトル案があったことからわかるように、政治家とその弟子、また、改稿過程には「支部長」といった言葉も見えているが、

虚構を交えながらも、「文語詩篇」ノート」に記されたショックを、そのまま踏襲したものであるようだ。下書稿(二)の到達した地点は次のようなものだ。

政客

①石絨脈なまぬるみ、
苔しろきさが巖にして、
魔法瓶いだきてねむる
そのかみのくにちのをとど

②八重の雲四方に湧き
鳥行かぬましろきそらに
頬は頬舌は舌もて
あゝひとのものゆめむなれ

ここで視点人物の私(あるいは弟子)が消え、続く下書稿(三)の初期形態では、タイトルが「早池峰山巔」に改められる。

アスベスト脈なまぬるみ
苔しろきさが巖にして
ひげ白き地学博士はまどろむなり

月は白く四方雲湧きて
わが師夢見るそのことの
いないぶかしくも恐ろしきかな

ここで再び博士と弟子の話になり、「わ」の視点も復活する。「政客」の話から、現実の関博士と賢治が戻ってきているようだ。この下書稿(三)の手入れ結果に対して賢治は⑨をつけているが、ここには視点人物はおろか、をみなごも博士さえも現れない。この

段階で定稿とほぼ同じ、自然詩に変貌している。

①アスベスト脈なまぬるみ
苔しろきさが巖にして
いはかゞみひそかに熟し
ブリューベル露はひかりぬ

②映えの雲ひかりたゝへて
西東はてをしらねば
白聖紀の古きわだつみ
なほこゝにありわぶごとし

島田隆輔(後掲)は、こうした改稿について、「最終的に定稿の「早池峰山巔」では、山そのものが主役となり、人物さえ存在しない場となる。要するに、自伝性が、排除されたのだ」とする。たしかに多くの文語詩がそうであるように、自伝性は徐々に薄まっている。ただ、自伝性だけを排除するつもりなら、下書稿(二)のように視点人物だけを消して、政客なり博士だけを書くこともできたはずである。つまり、自伝性の排除というだけでなく、作品から人間を締め出すというもう一つの意図を指摘する必要があるだろう。

なぜ、そのようなことになったのだろうか。あくまで推定ではあるが、大迫を舞台にした博士との酒宴に取材した作品は、「五十年篇」のうちでもすでに二作。「夜をま青き蘭むしろに」と「雪の宿」がある。テーマが重なり過ぎることを避けたのではないだろうか。

早池峰山について言えば、実はこちらに関しても「五十篇」に「水と濃きなだれの風や」があるのだが、こちらも自然詩というには雑音が混じりすぎている気がしなくもない。

① 水と濃きなだれの風や、
アステイルベきらめく露と、
むら鳥のあやなすすぎ、
ひるがへる温石の門。

② 海浸す日より棲みゐて、
二かしら猛きすがたを、
たゝかひにやぶれし神の、
青々と行衛しられず。

「神」が人事か自然かについては、むしろかしい議論になりそうだが、「棲みゐて」や「たゝかひにやぶれし」といった句は、あまりに人間臭い。下書稿(二)で、タイトルを「政客」とつけた時には、まだまだ人事について書く気が満々だったと思うが、おそらくは下書稿(三)のタイトルとして「早池峰山巔」の文字を書き付けた時、人事を離れた作品を描くアイディアが浮かんだのだろう。

もちろん人事を離れたとはいえ、全く自然だけの世界でもない。定稿をよく読み返してみれば、「西東はてをしらねば」と、早池峰の景観を見ながら思いを巡らしている人間が想定されているし、また、その空の様子を見て「白聖紀の古きわだつみ」が「なほこゝにありわぶごとし」と思いをめぐらす存在も人間以外ではありえない。

「五十篇」と「一百篇」のそれぞれに付けられた日付は、七日しか違わない。病床でのことでもあり、それぞれの集としての性格、全体の構成に賢治がどれくらい配慮していたかについての討究は、これからの研究課題であろうが、島田隆輔(「文語詩稿」構想試論『五十篇』と『一百篇』の差異)、「国語教育論叢4」

島根大学教育学部国文学会(平成六年二月)は、『一百篇』における批判の過程がおおむね受容的・共感的・自省のであるとすれば、『五十篇』における批判の過程はさらに、より鋭意で強く深いものがある」と書いている。人間批判的な色彩は「五十篇」に任せ、「二百篇」では、おおらかに自然を謳おうとしたということなのかもしれない。

先行研究

- 宮沢清六「イギリス海岸」への独白(『兄のトランク』 筑摩書房 平成三年十二月)
吉見正信『早池峰山巔』蛇文作品の空間性と時間性(『国文学解釈と鑑賞60-9』 至文堂 平成七年九月)
乗松昭A「早池峰山巔」(『宮沢賢治 文語詩の森』 柏プラーノ 平成十一年六月)
島田隆輔「初期論」(『宮沢賢治論 文語詩稿叙説』 朝文社 平成十七年十二月)
乗松昭B「早池峰山巔」(『モーツァルトへのオマージュ』 文芸社 平成十八年一月)
石寒太「賢治俳句の鑑賞」(『宮沢賢治の俳句 その生涯と全句鑑賞』 P H P 研究所 平成七年六月)

36 社公云土工事 佐伯正氏

① 群れてかゞやく辛夷花樹、
風は明るしこの郷の、
雪しろたゝくねこやなぎ、
土はそゞろに吝けき。

② まんさんとして漂へば、
馬を相する漢子らは、
水いろあはき日曜の、
こなたにまみを凝すなり。

大意

辛夷が群れだつて花は輝き、 雪解け水を川べりのネコヤナギが叩くようにしている、 人々はなんとなしにケチであるよ
明るい風が流れるこの町の、
うだ。

よろけるように町中を漂っていると、 雪しろの水色も淡い日曜

日で、馬の見立てをしていた男たちは、こちらをいぶかつてじつと見つめている。

モチーフ

佐伯正というのは実名で、岩手県の社会事業主事をしていて人物。或る日曜に賢治を訪ね、うらうらとした春の景色の中で、「この郷の、土はそゞろに吝けき」と、愚痴をこぼしたらしい。しかし、佐伯は社会主事。そして来訪したのは昭和二年。賢治が羅須地人協会で独居自炊の生活を送っていた時期であり、また花巻温泉の花壇設計をしたことから、遊興の地を作ることに加担したとの自己認識から「たはれめ」に対する意識を深めていった時期である。本作はタイトルに実際の職名と実名までが記された異例の作品だが、賢治は佐伯を自分と同じ志を抱く人物だとして称揚するつもりで名を刻んだのではないかと思う。

語注

社会主事 佐伯正氏 佐伯正は実在の人物で、明治十四年二月生まれ、宮城県名取郡高館村（現・名取市）出身。東京大学文科大哲学科を卒業し、岩手県で社会事業主事等（昭和二年三月から昭和四年八月）を勤めるかたわら、歌人として多くの歌を発表し、大阪外国語学校教授も務めた。岩手を離れてからも「岩手毎日新聞」等に多くの作品や文芸批評を発表。山形県出身の思想家・大川周明と付き合いがあり、ともに東大では宗教学を学んでいる（卒業論文は「セント・アウグスチンに就て」。昭和十五年には大川と板垣征四郎（岩手県出身の陸軍大将）、妻のキクと共に中国に渡るが、昭和十七年十一月に大阪で没している。方面委員（社会奉仕のためのボランティアで町の有力者が務めることが多かった）をしていた宮沢政次郎と知り合っただけで、宮沢家と交流を持つことになったという。社会事業主事と

は、大正十四年十二月に制定された地方社会事業職員制に基づいて各道府県に置かれた専門職員のこと。「社会」という言葉さえ危険思想視された時代だが、国としても完全に目を背けるわけにもいかず、資本主義の発達とともに広がった社会的不平等による下層労働者、児童、被差別部落民、芸娼妓、在日朝鮮人といった人々を保護する動きが生まれた。生江孝之（「総論」『社会事業綱要』 巖松堂書店 大正十二年四月）は、「社会事業とは社会組織より発生し来る社会病を未然に防ぎ、又其の既に発生したる場合、これが治療に従事するの事業を云ふ」とし、また「社会事業とは社会連帯責任の観念を以て社会的弱者を保護向上せしめ、又は之を未発に防止するの事業を称す」とする。

辛夷花樹 マグノリアはモクレン属の総称で、ホオノキやコブシ、タイサンボクなどが含まれる。山野に自生するものもあり、童話「なめとこ山の熊」における母子のクマが交わす会話に登場する「ひきざくらの花」はコブシの方言名。

雪しろ 雪が解けて、川に流れ込む水のこと。雪代水。春の季語。**ねこやなぎ** ヤナギ科ヤナギ属の落葉低木。水辺に自生し、早春に灰白色の綿毛の花芽が出るが、これをネコの尾に見立てたことからこの名前がある。

そゞろに 『日本国語大辞典』では①確たる心構えもないままにある行為をしたり、ある状態になったりするさま、②原因や理由もはっきりわからないままに心や動作などが進むさま、③あるべきさまや程度、あるいは本意に反しているさま、に大別するが、ニュアンスは②に近いかと思う。

吝けき 下書稿(一)に「この郷の／ひとは鈍き」とあり、手入れ段階では「さも吝けきひとびと」とあることから、この町の人々がケチで物惜しみをすることだということだろう。タイトルに「社会主事」とあることからわかる通り、花巻の町で何かの社会事業を推進しようとしても、なかなか賛同してくる人がいかなかったことを嘆いているのではないかと思う。

日曜^{どんたく}

オランダ語で日曜を意味する *zondag* の訛り。竹久夢二が詩集『どんたく』を(大正二年十一月 実業之日本社) 出すなど一般にも知られた語であったようだ。

相する 人相や家相などを占うという意味もあるが、『日本国語大

辞典』によれば、「物事の姿や有様をみて、その実体を判定する。鑑定する。見たてる」ともあり、『十善法語』にある「伯樂が馬を相するなどをおもへば」を用例としてあげている。

漢子 男子。本作では、コブシをマグノリアと呼び、日曜をどんたくと書き、男を漢子と書き、しかし全体的には和語を用いるという、歌人でありながら各国語に通じた佐伯に合わせたかのような多国籍(無国籍?)な雰囲気を出そうとしているのだから。

評釈

黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(タイトルは「社会主事」)、その裏面上半分に書かれた下書稿(二)(タイトルは「社会主事」、後に「県社会主事」、同じく下半分に書かれた下書稿(三)(タイトルは「佐伯正氏」、佐藤益三商店製赤野和半紙に書かれた清書稿(タイトルは「社会主事佐伯正氏」、黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(四)(タイトルは「社会主事佐伯正氏」。藍インクで⑨)、定稿用紙に書かれた定稿(一)、その裏に書かれた定稿(二)の七種が現存。生前発表なし。先行作品や関連作品は指摘されておらず、昭和六年三月(推定)の書簡下書きには本作と重なる表現と内容があることが『新校本全集15 書簡校異篇』で指摘されている。また、本作との関係の深淺はわからないが、下書稿(四)の裏面には次のようなメモがある。

文語詩双四聯に関する考察

- 一、概説文語定型詩、双四聯、沿革、今様、藤村、夜雨、白秋、
- 二、双四聯に於る起承転結

- 三、格律、単句構成法、
- 四、脚韻、

まず、本作に関連する佐伯正宛と思われる書簡の下書き(昭和六年三月)があるので、全文を引用する。

ご消息、父よりまた生々岩手毎日等より始終承はり居ります。当地ご滞在中は何か失礼のみ重ね、遂には疾んでご帰郷へのご挨拶さへ欠きました。にも係はらずその後もいろいろとご心配を賜はりました。まことに辱けなく厚くお礼申しあげます。お蔭様をもつて只今は健康全く旧に復し、先月よりは本県東磐井郡松川駅前(狛鼻溪の入口)の東北砕石工場に囑托として入り、主に農業用炭酸石灰の製作と農芸的照会への回答をいたし居ります。既へば昭和二年度の春でありましたか、私ひばや杉の苗さては三日の米をも載せたレアカ一をひきながら村へ帰らうとして居りましたとき、あなた様、遙かなみちのくの孤客となつて山浄く風あかるいその四月の日曜を漂ふといふがごとくに街を来られ、今日は君は父を訪ふにあらず君と語らんと思ふなど仰せられました。すなはち私あなたにならび村へと行けば、町の外の橋の上であなた波立つ雪融の水の玲たる青を賞せられ、私楊の花芽をあなたの郷送られなばとひそかに思ひ、あなた一れつ崖上の日にかざやかなごぶしの花をのぞまれました。そはそも何の花ぞと問へばわたくしかれはマグノリアまことこの地の郷花とも呼ぶべきなど申しあげましたとき、すでに橋つきて川水の音後へにありました。あなたにはかに声高くSpringといひFrühlingと呼ぶ、さもPrintempはるといふ、いづれかかゝる水いろの季節の首部にふさへるや、きみはいづれをとらんとすると叫ばれました。そこで、髪緒いうなみの子いさかひにもと怪しんで立ち、クリスチャンなる雑

舗の主人、屈んで瞳をこらしめました。
しかもあのころ私は心素直ならず人を怒り

途中で途切れているが、昭和二年、佐伯は在任中に賢治に会うために訪れ、昭和六年頃になって賢治の病状を見舞う手紙が届いたのだらう。佐伯については父から、また、岩手毎日新聞等に頻繁に投稿していたことから、動向は知っていたものの、「思へば昭和二年の春でありましたか」として、「あのころ私は心素直ならず人を怒り」と書いていることから、その後に書簡のやり取り等があったわけではなさそうだが、気にかけていたことは伝わる書簡である。ちやうど独居自炊でギリギリの生活をしており、花巻温泉が大々的に開発される時期でもあったので、社会批判めいた言辞を漏らしたことを反省しているのかもしれない。

儀府成一（後掲）は賢治との交流があり、自分の創作童話についてのコメントを賢治からもらった人物だが、佐伯とも直接交流があったようで、貴重な証言を残している。

文学青年だった儀府は、大正の末年から「岩手日報」や「岩手毎日新聞」などに投書していたが、それを讀んだ佐伯が、儀府に手紙を送ったことから交流が始まったという。佐伯から儀府へは、「分厚い手紙がドンドン届けられて、私は何度郵税不足分を支払わされたかしのれない」くらいで、しかも「コマメに手紙をくれ」たらしく、内容は「叱咤あり、激励あり、慰撫あり、同情ありだった」という。

佐伯は、昭和五年八月二十六日の『岩手毎日新聞』紙上で「若き友の消息」という九首からなる短歌を儀府に捧げるが、これは次のようなもので、たいへんな入れ込み方である。

我をしも恩師慈父と呼ふ友のこころ愛なしみ消息をよむ
この友のふみ来し途は険しけれど光れる詩を生むべくよき途
詩に生るよき若人をみこみなしとそむかひ去りしをみなご哀れ

世に生くるつたなきこころは詩に生くる光れる心と知らでさり
しか

ふるさとに泣くと題する長き詩を月てらす丘の家にかくとふ
盆踊りの太鼓のとは音きく宵は屋根にしのぼり人をしのぶと
雨のふる林の中に泣きぬれて養父と別れしこの子かなしも
詩筆とる手にまきをわり豚を飼あせながしゐるこの子さきかれ
血をわけぬまな子を我にあたへたる岩手国原たたへやまずも

それなのに儀府の方は佐伯と会うこともなかったという。理解
しがたい気もするが、「弱気の私は、過大な評価や期待に勇躍し感
奮して、創作意欲を駆り立てられるタイプではなかった。むしろ
そんな空気はさもなく、はしたない気がして、逃げ出したかった
のだ」と言われれば、わからないでもない。

そんな儀府の佐伯に対する印象を決定的なものにしたのは、儀
府の親類が経営する盛岡市内の旅館での経験である。儀府がうと
うとしかけた頃に隣室に酔漢がやって来て、詩吟を始め、江差追
分、鴨緑江節、しののめ節になり、吠えるように泣き出し、つい
には悲憤慷慨調の演説を始め：結局、一睡もできなかったとい
うのだが、それが佐伯正だったのだという。「これまでこの人の私
に対する好意、支持、激励は、金銭ではあがない得ないものであ
ることはよく理解できるけれども」、「友情は友情、これはこれ、
たとえ忘恩の徒とそしられても、自分を殺してまでこういう人物
とはつきあいかねる」と思うに至る。
さて、「社会主事」のタイトルのある下書稿(一)は、次のようなも
のだ。

すでに所志を やぶりては
たゞ水いろの 日曜を
まんさんとこそ 漂はめ

一つらひかる 辛夷花アツシヤ
はた葱ネギいろ 雪代ユキしろを
たゞきてけぶる ねこやなぎ

風はあかるし この郷さとの
ひとは鈍鈍きと いまさら
春を忿いかりりて なにかせん

橋のたもとの 装蹄工かなぐつや
しろき火花を 撃ちやえて
こなたに瞳を こらすなり

賢治が書いた書簡下書を見る限りでは、ただ、春先ののどかなやり取りを描いただけのようにも見え、儀府の証言をこれに併せると、風流すぎるが故に気持ちが高ぶって大声になつてしまうような人物（熱情のあまり周りが見えなくなる人）といったイメージが浮かんでくる。しかし、この下書稿（-）の段階でも、よく読んでみると、社会主事は「すでに所志をやぶりて」とあり、芸術談義をするためだけに賢治に会いに来たのではないようだ。ことに三連目では「風はあかるし この郷の」と、春先の花巻の美しさを称揚しているかに見せて、「この郷の／ひとは鈍きと」、つまり、この花巻の人間は愚鈍であると言わせ、「春を忿りて」いるわけで、橋のたもとの人々も、大声よりも内容に驚いてこちらを見ているように読める。書簡下書きは文語詩と似ているように書いて、実は決定的な部分で相違がある。

儀府は、佐伯と賢治の会見について、

この人物は何のためにわざわざ盛岡から汽車に乗つて、この風のあかるい花巻の町へやつて来、けわしい目付をし、何やらぶつぶつと憤懣をぶちまけながら、体だけはまんさんとして漂う

が如くに歩いているのか。何のためでもない。ただ酒にありつきたいばかりに来たのだが、あてにして来た宮沢政次郎は不在、ほかのこの町の有志たちも、居留守か何か知らないが、快よく招じ入れてもてなしてくる家が一軒もなかったのだ。「人はおぞまし」「やぶさかと」は、この町の連中ときたら鈍感だし、けちくさくてどうにも話にならない。止むなく自腹を切つて酒屋でモッキリ（コップ酒）を一、二杯ひっかけたが、所詮、美味しい酒という訳にはゆかず、むしろ舌打ちせずには居られないくらい、にがにがしく辛い酒だったにちがいないのである。

と解釈するが、少し悪意が先走っている気がする。社会事業主事は昭和十四年の高知県のものだが、俸給の年額は一、三三〇円。知事の四、九二〇円には及ばないものの、警部補の年俸が六六〇円、巡査が五四七円であったことを参考に考えれば、わざわざ酒を奢らせるためにやつてきたとは考えにくい。さらに、

それから作者は、どこにもそんな気振りは見せていないが、この文語詩はひよつとすると、童話『ポラーノの広場』に於る酒癖の悪い山猫博士と、県議ボーカント・デステイパーゴヤや、上演当時コミック・オペレッタと愛称したらしい『飢餓陣営』のバナナン大將や、『植物医師』の爾薩待正といった物語の主人公といった物語の主人公たちと、同質異種の人物、もしくは同体、分身として想が練られ、相手をキリキリ舞いさせんばかりに面白がりながら描いた作品（或るいは手紙）かもしれない。と私はふと思った。——元よりアテズツポーに過ぎない。

とするが、これも思い込みが先行しすぎている気がする。そもそも儀府にしても、旅館での一件さえなければ、佐伯のことを少々暑苦しいくらいの情熱家だとしか捉えていなかったわけで、さすれば旅館で隣同士になった経験を共有していない賢治が、佐伯の

ことを貶めるつもりがあったとは思いいにくい（暑苦しい人だというくらいには思ったかもしれないが）。

岩手県立図書館蔵「岩手毎日新聞」のマイクロフィルムを昭和初年の文芸欄を中心に目を通したところ、ことに昭和五年は佐伯が儀府のどちらかの名前が、五、六日に一つは必ず掲載されているといった状況で、それは先の書簡下書きで賢治が「ご消息、父よりまた生々岩手毎日等より始終承はり居ります」と書いていたとおりであった。ことに儀府が月丘きみ夫名義で発表した私小説的作品「闇」（昭和五年二月二十一日）の掲載後の論争は目を引いたに違いない。三月六日に佐伯正は「退耕漫筆 月丘きみ夫君の小説」を書き、「君の受けた教育の程度は極めて低からうが」、「月丘君の芸術家としての素質はかなり良いものだ」と認め、しかし、作品の冒頭のこなれない表現については「改竄」を勧めている。三月二十、二十一日には高須賀正が、「月丘きみ夫氏の『闇』を評す」で、難解に見えるあの表現こそが重要なのだと書く、佐伯は四月六、七日に「退耕漫筆 小説『闇』の再検討」を書いて反駁し、五月一日には儀府が「漫ろ言(7)」で、「佐伯氏の云ふ通り改竄の必要は発表と同時に自分ながら気付いてゐた」と書くことよって、一件落着している。

長々と書いてきたが、儀府は自分の作品を巡って論争が繰り広げられたことを、論文（後掲）では全く語っていない。いくら盛岡の宿で一睡もできなかったという事件があったとしても（「漫ろ言(7)」によれば、儀府はその日、「永い間別れ〜」になつてゐた初恋人にやつと邂逅して、その夜思ひきり泣きあつた）のだというが、論文にそのことは書かれていない、彼の人物評のみで佐伯について判断すること、さらに文語詩の読み方の参考にまでしてしまうのは問題が大きいように思う。

たしかに佐伯は、春の呼び方は何語がふさわしいかといった話を大声でして、町の人に訝しがられるようなところもあるが、無名の青年詩人に「分厚い手紙」を「コマメに」出し続け、また、

岩手を去った後の昭和六年になつても、わざわざ賢治に宛てて病状を聞いてくるような繊細さや情熱があり、賢治が邪険に扱つたとは考えにくい。

ところで、佐伯は賢治についてどう思つていたのだろう。昭和五年十月八日の「岩手毎日新聞」に「退耕漫筆 地方の文芸(4) 岩手の詩人」があり、「花巻の私の道の兄たる宮沢政次郎氏の令息宮沢賢治君」について「岩手には空前の詩人」として称揚している。『新校本全集』にも未収録の生前の賢治に関する評言なので、「賢治研究117」（資料紹介「岩手毎日新聞」から 生前発表・文芸関係記事）宮沢賢治研究会 平成二十四年四月）に発表したがあまり知られていないようなので関連する箇所を引用しておきたい。

佐伯は「地方の文芸」というタイトルながら、「三年前に君から『春と修羅』の恵与にあづかり、反復熟読した」が、難解でよくわからなかつたということなので、佐伯の賢治評は文芸以外、社会活動の方に向いている。

この詩人は疑ひもなく岩手には空前の詩人であると同時に稀有の人道主義者であらう。空前のヒューマンタリアンである。郷土第一の富豪を外祖父として生れながら、彼は外祖父一家の生活態度が外祖父一家が自己の主義理想に遠きの敬を以て、断じて足を向けないといふ徹底した理想家である。花巻の町外れの丘陵に掘立て小屋を建て、そこに起臥して畑を打ち晴耕雨読の生活を営み、附近の児童を集めては、蓄音機を鳴らし、童話をもしたり、農夫達の教師としては土質改良や施肥上の指示者となつたりして来た。私は此の人に於て、来るべき新時代の理想的人物の面影を見る。彼には殆ど私欲がない。名利の念がない。彼にあるものは、仏者の所謂利他の念と、濟世の熱意と、高雅清純な芸術的享樂だけであらう。彼にはまた若人の心に燃えがちな、異性に対する欲念すらも超克してゐると見え、近

親が結婚をすゝめても、「私は早熟の人間で、性の問題は既に通過しましたから、幸に安心せられよ」と答へたといふ実に彼は稀有の麒麟児であり、「無比なユニツクな人格の持主である私は信ずる彼は盛岡高等農林学校が産した最も光つた人物の一人である」と私は天が彼に与ふる健康と長命を以てして、農聖の域に進み且つ後世にのこすべき輝かしい幾多の詩を生ましめんことを熱望せざるを得ない。私は岩手の文学青年達や、プロレタリア詩人を以て任ずる人々に対し、この人を見よ、この人の芸術と生活態度と実行とを見よ、と寄語するものである。この人を見て、而して猶東京辺のガサツな躁狂的なプロレタリア人や、プロレタリア詩人の悪影響を脱し得ざる者は、恐らく真の芸術からの追放者たるを免れぬであらう。

そもそも社会事業主事とは社会的弱者を救済するために駆け回っていた存在で、賢治の元を訪ねたのも、ただ賢治が詩人であったためだとばかりは言えないと思う。いや、むしろ昭和二年一月三十一日の「岩手日報」の夕刊に、写真入りで賢治の記事が載り、「農村文化の創造に努む／花巻の青年有志が／地人協会を組織し／自然生活に立ち返る」と羅須地人協会のことが報じられたこと。そして昭和二年三月頃に花巻警察署長に事情聴取を受けたことが佐伯の興味を引いたのではないかと思われる。これは佐伯の任期直前だが、方面委員であった政次郎の長男でもあったことから、佐伯が賢治からこうした話を聞きたいと思った可能性は十分にあると思う。

そして昭和二年春と言えば、賢治が花巻温泉の花壇設計をきっかけに、ここを「賤舞の園」(「歳は世紀に會て見ぬ」)「未定稿」と指弾し、「詩ノート」の「一〇三四 「ちぢれてすがすがしい雲の朝」 一九二七、四、八、」で、「遊園地ちかくに立ちしに／村のむすめらみな遊び女のすがたとかはりぬ／そのあるものは／なかなかなれるポーズをなし／あるものはほとんど完きかたち

をなせり」と書いて批判していた時期とも一致する。

昭和六年四月十三(十五日)に「岩手毎日新聞」に連載された佐伯正の「社会事業と薄倅詩人」には、耳が聞こえず、眼もほとんど見えないという「薄倅歌人」の下山清に対して、「自分の社会事業主事としての職分の上から、斯の如き高い天分の歌人をして安らかに病痾を養ひつゝ学芸に遊ばしめる途はないものかと、様々に調査を重ね中央の社会事業場の権威者達にも相談をしたが、私の社会事業的施設のどこにも修養してもらふ所が無いので、私は非常に失望せざるを得なかつた」と書いている。

初対面の賢治は、いきなり大声をあげるような佐伯に驚きもしただろうが、社会事業主事としての佐伯の情熱にほだされ、自分からも羅須地人協会や花巻温泉のことなどで鬱積した思いを伝えることがあつたのではないだろうか。

また、佐伯は昭和七年八月に創刊され、賢治が初めて文語詩を掲載した「女性岩手」の第二号(昭和七年九月)から七号まで寄稿しているが、第二号掲載の「女性岩手に筆を執るに臨みて」では、「昭和二年三月より足掛三年間の不遇を極めた県の役人生活を終つた後でも、常に温かい想ひ出を以て不断に岩手の自然に対し同朋に対し文を草し歌を詠みつつ今日まで四年間細々ながらも県の学芸と社会事業に貢献を続けしめられた原動力も此等の女性方に対する感謝より生れ出て来てゐる」と書いており、女性に関する社会事業についても、岩手を離れた後になつても取り組んでいたことが窺える。

儀府(後掲)は、「ポラーノの広場」のデステアップーゴに佐伯をなぞらえたが、マルキシズムやプロレタリア文学に安易に走ることなく、着実な社会改良を実践しようとしていたところなどは、むしろレオーノ・キューストの方に似ているというべきではないだろうか。しかもキューストも官職を離れ、今はイーハトーブから遠いところに住んでいるという設定を考えれば、案外、佐伯がモデルだったということもまじめに考えられてよいかもしれ

ない（ちなみに、佐伯は「女性岩手に筆を執るに臨みて」の中で、「私の新しい友人ではあるが同じ芸術上の同志も亦花巻で今活躍してゐられる」と書いているが、賢治のことを指すのかもしれない）。

佐伯正が、実際にどんな仕事をしていたのか、また、賢治と何を話し合っていたのかを示す資料までは見つからないが、「岩手毎日」などの新聞や岩手県内の文芸誌などを、もつと細かく探していけば、このあたりの経緯ももっと明瞭に浮かび上がってくるかもしれない。いずれにせよ、儀府の佐伯観を鵜呑みにするのが危険であることは疑いのないところで、文語詩において、佐伯が花巻の人々の吝嗇さ、愚鈍さを嘆いていることを、タダ酒にありつけなかった腹いせだという風に解釈して済ませることは許されないと思う。

文語詩において役職名と実在の人物の本名までがタイトルに刻み込まれているというのは異例だが、賢治としては、ともに社会の不平等を憤り、「この郷の土」の吝嗇さに対して憤った人物として、佐伯正の名前を記念碑的に刻み付けたかったのではないかとも思えるのである。

先行研究

儀府成一「社会主事 佐伯正氏 宮沢賢治の文語詩を繞って」

（「啄木と賢治12」みちのく芸術社 昭和五十四年十一月）

谷口忠雄「宮沢賢治作品「林学生」及び「社会主事 佐伯正氏」

（「春日丘論叢29」昭和六十年四月）

信時哲郎「社会主事 佐伯正氏」（「宮沢賢治学会イーハトーブセン

ター会報44 琥珀」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成

二十四年三月）

① 丹藤^{タンポ}に越ゆるみかげ尾根、
うつろひかればいと近し。

② 地藏菩薩^{ジツサ}のすがたして、
栗を食^たうぶる童^{わらわ}と、
鏡欲^{かがみほ}りするその姉と。

③ 丹藤^{タンポ}に越ゆる尾根の上に、
なまこの雲ぞうかぶなり。

大意

丹藤川を越えるように花崗岩質の尾根がそそり立ち、陽光が差し込むと思いのほか山が近くに見えて驚かされる。

市日の今日は地藏菩薩のような真ん丸な頭で、栗を食べている男の子と、
縞の粗麻布の着物をぎゅつと胸でしばって、そろそろ手鏡が欲しくなってくる年頃の姉とがいる。

丹藤川を越えるような尾根の上には、層積雲が長く伸びてうかんでいる。

モチーフ

北上山地の集落での市日における姉弟の姿を書いた作品だが、関連作品の「一百篇」所収「腐植土のぬかるみよりの照り返し」と比較してみると、本作は北上川の東側（左岸）を描いているのに対し、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」では西側（右岸）を描いていることがわかる。東側は経済的にも立ち遅れているが、西側は硫黄鉱山の開発により潤っている。「鏡欲り」しながら買うことができない東岸の「姉」に対して、西側の「みめよき女」は「二銭の鏡あまたならべ」られながらも、買う気もなさそうだ（「売るゝともなし」）。しかし、賢治が文語詩制作中の昭和初年、

東洋一の硫黄鉱山と言われた松尾鉱山では鉱毒問題が深刻化していた。経済的な安定を求めることが鉱毒事件を生んだのであり、賢治はここに文明の皮肉を感じていたかもしれない。

語注

丹藤 タンド 岩手郡川口村（現・盛岡市）の集落の名前。丹藤川が北上川に注ぐあたりにある。ただし、本作においては丹藤川のことを差すのだと思われる。「初期短篇綴」に「丹藤川」（後に「家長制度」）がある。盛岡高等農林学校時代の賢治の友人であった高橋秀松（「賢さんと私（一）」）『宮沢賢治とその周辺』川原仁左エ門 昭和四十七年五月）は、これを「丹藤川の上流」を歩いていた時の記憶にもとづくものだとしているが、本作における「丹藤」のイメージも、この経験に基づく部分があると思われる。高橋は「姫神の下あたりを通って夜道となった。山道は尽きて広い野原に出た。先途に、ポーツと明るい一面が見え言い香りがしてくる。花盛りの鈴蘭群生地帯であった。二人は嬉々として花の上に寝転んで考えた。賢さんは、今夜は松の大木の下に寝るとしようかと、松の大木は暗くて見付からなかったが三・四反もある耕地を発見した。賢さんはしめたと一言いうて畑があれば近くに人家がある筈だと畑地通いの小道を辿つて谷に下りた。しかし、流れがあるばかりで人家が見当らない。土橋の上でねる事にきめていたら川下の方から一老人が現われた。「オメエサンダチ、ナニシテル、こん処で寝たら狼にやられるぞ、オラノウチサオデンセ」と親切な言葉に導かれて、二人は老人について川上に上つたら、大きな一軒家があつた」と書いている。その家で経験したことを、賢治は「丹藤川」で書いたようだが、ここでは家長の絶対的権力と、山中での生活の逼迫ぶりが描かれている。「火皿は黒い油煙を揚げその下で一人の女が何かしきりに仕度をしてゐる。どうも私の膳をつくつてゐるらしい。それならさつきもことはつたのだ。ガタリと音が

して皿が一枚床の上に落ちた。主人はだまって立ってそつちへ行った。三秒ばかりしんとした。主人は席へ帰つてどしりと座つた。どうもあの女はなぐられたらしい」。

みかげ屋根

岩手郡一帯は堆積岩で形成されているが、そこに島のように孤立している花崗岩帯があり、これが姫神山（一一二四m）である。岩手山、早池峰山とともに岩手三山に数えられ、石川啄木がこよなく愛した山としても知られている。「丹藤に越ゆるみかげ屋根」はわかりにくい表現だが、丹藤川は姫神山のすぐ東側を水源にしながら姫神から南方にある外山の方に向かう尾根（「詩ノート」の「二〇三四」「ちぢれてすがすがしい雲の朝」一九二七、四、八、）に「姫神から盛岡の背後にわたる花崗岩地」とあり、これを「みかげ屋根」だと認識していたようだ）を越えることができずに東方に流れる。しかし、今度は北上山地を越えられないためにほぼ一八〇度進路を曲げて西に流れ、丹藤で北上川に合流している。水源地から北上川まではわずかな距離だが、その川を「越ゆる」ように姫神山とその尾根が立ちはだかっていると書いたのではないかと思う。

地藏菩薩のすがた

栗を食べていた子どもの頭が坊主頭だったので、赤いよだれかけをしていたのかもしれない。岡沢敏男（「賢治の置土産 七つ森から溶岩流まで」盛岡タイムス 平成二十年六月七、十四、二十一、二十八日、七月五、十二日）は、地藏菩薩に親しみを持っていた賢治の宗教性を読み取るうとしているが、子供の守り神として地藏菩薩を出した側面もあるかもしれない。

なまこの雲

佐藤栄二（後掲）は、「尾根まで見渡せる快晴の空にぼつかり浮かぶ、なまこの形をした積雲」とするが、「うつろひかればいと近し」というのは、山がどれくらい近くにあるか気づかなかつたということであるうから、快晴ではなかつたように思う。また、雲の形も、畑の畝のように層になって長く伸びる層積雲（うね雲）を指すのであろう。

評釈

黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(タイトルは「市日」。鉛筆で⑤)、「二百篇」所収の文語詩「腐植土のぬかるみよりの照り返し」の下書稿に重ねて毛筆で書かれた習字稿(断片)、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。『新校本全集』にも指摘があるように、文語詩「腐植土のぬかるみよりの照り返し」は字句に共通性があり、関連作品であろう。

丹藤やみかげ尾根が登場していることからおおよその舞台は想定できるが、関連作品である文語詩「腐植土のぬかるみよりの照り返し」とあわせて考えると、舞台はよりはっきりしてくる。

①腐植土のぬかるみよりの照り返し、 材木の上のちいさき露店。

②腐植土のぬかるみよりの照り返しに、 二銭の鏡あまたならぬ。

③腐植土のぬかるみよりの照り返しに、 すがめの子一人りと立ちたり。

④よく掃除せしランプをもちて腐植土の、 ぬかるみを駆夫大股に行く。

⑤風ふきて広場広場のたまり水、 いちめんゆれてさぐめきにけり。

⑥こはいかに赤きずぼんに毛皮など、 春木ながしののいちれつ。

⑦なめげに見高らかに云ひ木流しら、 鳶をかつぎて過ぎ行きにけり。

⑧列すぎてまた風ふきてぬかり水、 白き西日にさぐめきたり。

⑨西根よりみめよき女きたりしと、 角の宿屋に眼がひかるなり。

⑩かつきりと額を削りしすがめの子、 しきりに立ちて栗をたべたり。

⑪腐植土のぬかるみよりの照り返しに 二銭の鏡売るゝともなし。

岡沢敏男(「賢治の置き土産 七つ森から溶岩流まで」盛岡タイムス 平成二十年六月七、十四、二十一、二十八日、七月五、十二日 <http://www.morioka-times.com>)によれば、この舞台は橋場線の橋場駅(現在の田沢湖線の前身である橋場線の終着駅だが、昭和十九年に休止されたまま現在に至る)だとのことだが、おそらくは東北本線の好摩駅が舞台であろう。

腐植土について、岡沢は「初期短編綴」の「秋田街道」に、「フイマスの土の水たまりにも象牙細工の紫がかつた月がうつりどこかで小さな羽虫がふるふ」(フイマスは腐植土のこと)とあることから、モデルをこの沿線だとするのだが、火山灰の上に腐植土が集積したクロボクツチは、岩手県内に広く分布していたため、一か所に特定するのはむずかしい。ただ、賢治は盛岡高等農林の得業論文において、実験用の土壌を高等農林学校の実験農場のあった上田、同じく経済農場のあった御明神、自宅にほど近い根子村大谷地、そして好摩(岩手郡渋民村好摩駅南端ノ原野ノ土壌)

の四か所から採取しており、御明神も「腐植質七・〇%」とされているが、好摩も「腐植質九・三%」とされているので「腐植土のぬかるみ」と書かれる素質は十分にあったと思われる（ことに好摩の場合は「好摩駅南端」とまで書かれている）。

また、岡沢は「春木ながし」を「御明神地方の山村民俗」だとしているが、春になって谷川が増水した頃、冬の間に伐採した木を流し出すことを「木流し」と言うのは一般的な名称で、御明神に限定できない。

「市日」における「丹藤」は、御明神からは三十五キロも離れており、地理的に言って遠すぎるのも気になるし、橋場駅付近からではどうも望むこともできない。

さらに、「西根よりみめよき女きたり」について、『定本語彙辞典』でも、岩手郡雫石町（橋場線沿線）にある西根のことを指すとあるが、下書稿(二)に「硫黄山光るかたよりたゞひとり／みめよき女きたりし」とあることを思うと、雫石の西根では説明がつかない。

こうした諸点から橋場駅説には首肯しがたいのだが、好摩駅を舞台にしたものだと考えれば、「丹藤」も「みかげ尾根」も近いし、「みめよき女」は、岩手郡の西根町（現・八幡平市）を指すものだとと言える。西根の方角には、東洋一の硫黄鉱山と言われた松尾鉱山（岩手郡松尾村、現・八幡平市）があったことから、賢治がこれを「硫黄山」と呼んだのも納得できる。岡沢（前掲）は、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」における「みめよき女」のことを、西岩手火山から来たのだと捉え、女神を暗喩しているとしているが、おそらくはもつと現実的で、炭鉱の人々を相手にした酌婦といった職業の女性を指すのだと思われる（「短編梗概」等の「泉ある家」では、鉱山で働く「鉱夫」が「女こ引ぱり」を利用して書いたことを書いている）。

ただし好摩を舞台とした可能性が高いからといって、橋場線沿線の記憶、あるいは他の炭鉱町の記憶が混じったり、虚構が混じ

っている可能性もゼロだとは言えない。そもそも市日と露店ではだいぶ違うことから明らかかなように、全く共通のモデル、全く共通の経験から書かれたものだとは言えない。賢治の文語詩とはそのような性質のものだからだ。このような点があることを踏まえた上で、本作の主たるモデル地として好摩があることを念頭に解釈を始めようと思う。

さて、この二篇であるが、どちらが先行していたのか、また、どちらが実際の経験に近いのかといったことはわからない。ただ、栗を食べる子どもが、「市日」の地藏菩薩のような弟に造形されているのは明らかで、姉の方も「腐植土のぬかるみよりの照り返し」にある「二銭の鏡」という言葉と関連があるように思える。

「鏡欲りする」とは、美しくありたいと思うことだと解釈すれば、「みめよき女」が姿を変えて、「市日」の姉になった可能性も考えられよう。さらに、この姉に、いつの日か「みめよき女」、つまり酌婦として働くことになるという将来をも暗示させているのかもしれない（平成二十四年七月七日の阪神近代文学会で「宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」を読む

松尾鉱山をめぐる」として発表された際の森本智子の指摘）。

共通する詩句があり、同じ経験から出来上がったのではないかと思われる二詩を見ると、凝縮された「市日」と、五七五七七が重なるように連続する

「腐植土のぬかるみよりの照り返し」の手法の差ばかりが目立ってしまうが、「市日」が東側の北上山地を描いているのに対して、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」では西側だ



好摩駅構内から見た姫神山

けを描いていることも見逃せないと思う。

これはかなり徹底されており、「市日」で登場する丹藤も姫神山も東側。「なまこの雲」も東方に出ているのに対して、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」では、「西日」がさし、みめよき女も「西根」（地名に「西」が使われているだけでなく、実際に好摩より西に位置する）から来ている。松尾鉾山のあった「硫黄山」も西方にある。

さらに中身を読み込んで見ても、似ているようでやはり違う。どちらの作品でも、鏡が売れていないという意味では同じだが、「市日」の方では、おそらくは鏡が欲しいのであろう。「姉」が、「鏡欲りする」、つまり、鏡が欲しくて買うことができないのに対して、西側の「ちいさき露店」では、「二銭の鏡売るゝともなし」とあり、こちらは「二銭などの安物の鏡など売れるわけもない」といったニュアンスがあるように思える。

「丹藤」は山も深く、集落もほとんどない。賢治が土性調査の際に野宿しようとした時、そんなところではオオカミに食われてしまうとやられて、民家に泊めてもらった時の経験が「初期短編綴」の「丹藤川」（「家長制度」として収められているようだが、北上山中の人々には、鏡を買うほどの経済的な余裕がほとんどなかったことが背景になっているのだろう（ただし、弟が市日で粟を食べることができくらいには余裕があったようだ）。

一方、この頃の西側地域は、東洋一の硫黄鉾山が発展中で、たくさん釣夫が集まり、おそらくはそれを相手にした酌婦らも集まっていたのだろう。

本作の制作年代ははっきりしないが、松尾鉾山の従業員数は創業した大正三年には三百人ほどであったのが、大正十三年には五三五人、昭和十年には一七五三人に達したというので（早坂啓造「松尾鉾業株式会社成立と発展 第二次世界大戦期まで」「アルテス・リベラレス40」 昭和六十二年六月）、その家族や関係者を併せれば、相当の数がいたと思われる。

西方では駅前露店などで「二銭の鏡」など誰も買わない。もつと立派な店で買うことができたからだろう。すがめの子が、はたして東部の子なのか、西部の子なのか、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」を読むだけではわからないにせよ、東側と西側での経済的な格差、文化的な格差が生じていることに對する想いを、賢治は「鏡欲りするその姉」の詩句に込めていたのではないだろうか。

しかし、近代産業の発展に伴う西部地域の活況が偽りのものであったことを、少なくとも文語詩制作中の賢治は知っていたはずだ。中村俊一（「岩手県赤川・松川流域における水環境とその利用 酸性河川流域での農業水利に着目して」 「日本地理学会発表要旨集74」 平成二十年九月）によれば、八幡平市を流れる赤川は、pH4ほどの酸性河川で、この近辺では昭和初年から水田に水を直接引くのではなく、沈殿池を作って金属を沈殿させ、その上澄みを使っていたという（後にはヒ素やカドミウムも含まれていたことがわかっている）。この地域の農民たちは、昭和七年になって「大更村山子沢部落において冷害や農産物価格低落のために被害補償を獲得することにあるとして、知事あての嘆願書や、赤川用水と普通用水利用の試験田の成績表を提出するなどし県庁の発動を促した。これに合わせて洪民村でも補償問題が生じ、これらの情勢を東京日日新聞が岩手版でとりあげ、一方住民の投書により盛岡大衆党も動き出した」（『新版岩手百科事典』）という。

文語詩作成中の賢治がこうしたことを知らずに好摩の詩を書いたとは考えにくい。聖書の創世記には、ソドムとゴモラの街が神の怒りに触れて「硫黄の火」によって滅ぼされたことが書かれているし、また、硫黄は戦争で大量に使われる火薬の原料でもある。硫黄で繁栄する町に、賢治はこうしたイメージを抱いていた可能性もあるのではないだろうか。

このように考えてくると、近代化のプラス面とマイナス面が直

撃した西部市域に比べて、東部に住む姉弟は決して裕福とは言えないながらも幸せな生活をしているように見えてくる。

盛岡高等農林学校で科学を学び、農村でそれを生かそうと考えた賢治が、単純に脱科学・脱近代を目指していたとは言えないにしても、「市日」では、貧しい中でも幸せに暮らす姉弟が描かれているように思える（姉が「みめよき女」として働く日も遠くないかもしれないが）。最悪レベルの原発事故がおこった以降の時代に生きる私たちにとって、気になるところの多い作品である。

先行研究

佐藤栄二「市日」『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ
平成十四年七月

38 廃坑

① 春ちかけれど坑々の、
事務所飯場もおしなべて、
祠は荒れて天霧し、
鳥の宿りとかはりけり。

② みちをながるゝ雪代に、
錆びしナイフをとりいでつ、
さびしく水をはねこゆる。

大意

春ももうすぐだというのにどの坑もどの坑も、霧のかかった空の下で祠は荒れ果て、事務所も飯場もどこもみな、鳥の棲家が変わってしまった。

みちをまたいで雪融水が流れているところに、錆びたナイフを見つけて取り出し、しばらくそれを調べてから守衛は、一人さびしく水の流れを飛

び越えた。

モチーフ

早春の和賀仙人を訪れた際に見かけた廃坑からインスピレーションされた作品だろう。安全祈願の祠も荒れたままで、事務所だったところも飯場だったところも鳥の棲家になり、人のいなくなった鉱山を一人で守る守衛が錆びたナイフを拾い上げるという内容。岩手は鉱山が多く、近代化とうまくマッチできたところもあるが、危険にさらされ、よるけ（粉塵を吸い込むために呼吸機能が衰える病気）などの発病のおそれもあった坑夫という仕事へのオマージュともいうべきものだろう。下書段階では「わがもとむるはまことのことば／雨の中なる真言なり」といった宗教的モチーフが削除されているが、本作定稿では、こうした宗教的モチーフが削除されている。同日の取材を文語詩化したと思われる「一百篇」の「早春」の方に、宗教的テーマはゆだねた形である。

語注

坑々 下書稿に降られたルビより「すきすき」と読みたい。

祠は荒れて 安全祈願のための祠があったのだろう。本作の下書稿には「わがもとむるはまことのことば／雨の中なる真言なり」ともあったが、定稿においては、宗教的なテーマが見えないようにされており、わずかに「祠は荒れて」の語の中のみ、宗教がほのめかされることになっている。

天霧し 空に霧がかかっている様子。読み方は「あまぎらし」。万葉集にも用例があるが、入沢康夫（後掲）は、何が空を曇らせただのかについて書いていないので、むしろ「天霧らひ」とすべきたったのではないか、という。

まもりびと 廃坑の守衛であろう。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」第十二葉の第三・四章を元にしたものを下書稿(一)、黄野(260行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(二) (藍インクで①)、その裏面に書かれた下書稿(三)、黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(四) (タイトルは「廃坑」、鉛筆で④)、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。

「〔冬のスケッチ〕」第十二葉の第三章から「一百篇」の「早春」が、また「〔冬のスケッチ〕」の同一日の取材より「一百篇」の「化物丁場」、「未定稿」の「二川こゝにて会したり」が書かれている。

賢治が和賀川の上流にある和賀仙人鉦山あたりをめぐった際の記述が「〔冬のスケッチ〕」に記されているが、文語詩の下書稿(一)は次のとおり。

※

わがもとむるはまことのことば

雨の中なる真言なり

あめにぬれ 停車場の扉をひらきしに

風またしとど吹き出でて

雲さへちざりおとされぬ。

※

崖下の

旧式鉦炉のほとりにて

一人の坑夫

妻ときたるに行きあへり

みちには雪げの水ながれ

二疋の犬もはせ来る

されど 空白くして天霧し

町に一つの音もなければ

「〔冬のスケッチ〕」第十一葉も同一日の取材と考えられるが、

ここには「赤さびの廃坑より／水しみじみと湧きて鳴れり」や「げに和賀川よ赤さびの／けはしき谷の底にして／春のまひるの雪しるの／浅黄の波をながしたり」といった部分もあり、これらも下敷きになっていると思われる。

下書稿(二)は次のようにまとめられる。

そら白くして天霧し

町には音も影もなし

古き鉦炉のほとりをば

雪融の水は流れたり

一人の坑夫その妻と

ほのかにわらひ歩み来て

水をわたりて過ぎ行けり

わがもとむるはまことのことば

雨の中なる真言なり

しかし、①印が付けられる前に最終行の「わがもとむるはまことのことば／雨の中なる真言なり」が削除される。これは同日に取材されたと思しき「早春」や「二川こゝにて会したり」にも出てくる言葉だが、「早春」が代表して引き継ぐことになったようだ。「早春」の定稿は次のようなものだ。

黒雲峽を乱れ飛び 技師ら亜炭の火に寄りぬ

げにもひとびと崇むるは 青き Gossan 銅の脈

わが索むるはまことのことば

雨の中なる真言なり

ここでは「わが索むるは」と、文語詩の通例に従わず、作者その人と思われる「わが」が登場し、「まことのことば」や「真言」といったストレートな宗教語が登場し、これがテーマとなってい

る。もちろん「法華文学」を志した賢治が、自らの宗教観を語って不思議ではないが、異例のことではあると思う。

一方の「廃坑」は、宗教的なテーマをほとんど全て「早春」に託し、観察者である賢治自身の影を匂わせることなく、廃坑を守る人の日常を描くという、文語詩定稿らしい世界観に落ち着いた作品となっている。

廃坑を訪ね、その兵どもの夢の跡を見た際の作品だと言えば言えようが、文語詩制作中の賢治は積極的に「たはれめ」を題材にしたが、男性たちにとって苦しい仕事として坑夫を扱ったところもあつたのではないかと思う。というのも、夏目漱石の「坑夫」(『草堂』所収 春陽堂 明治四十一年九月)には、「世の中に労働者の種類は大分あるだらうが、其のうちで尤も苦しくつて、尤も下等なものが坑夫だ」という言葉があり、佐野学の『全国坑夫組合叢書 第一編』(全国坑夫組合本部 大正九年二月)にも、

今日の坑夫の生活を幸福にして楽しみ多しと謂ひ得やうか。労働は物価の騰貴に伴はず、労働時間は長きに過ぎて、家庭的平和を楽しむ隙も無い。坑夫特有の勇敢な精神も生活の苦しみの前にはしまれるであらう。或はよろけとなり、或は廃疾となつても資本家は充分の扶助をしない。安全燈を便りに暗黒の坑道に労働する諸君の生活は楽しみよりも苦痛多しと謂はざるを得ないのである。

と書かれているからだ。労農党の運動やプロレタリア文学に、賢治自身は共感するところがありながら、同じ道を辿らなかつたことは知られているとおりだが、それは賢治がかつて鉱山で働いた人たち、そして今も働いている人たちに對する思いがなかつたということにはなるまい。「早春」に宗教的テーマを委ねた賢治は、本作においては、「まず牛から馬、馬から坑夫という位の順」(漱石「坑夫」)であつたという坑夫にスポットをあてることに集中し

たのだと考えたい。

ところで、下書稿(二)の手入れで⑦印を付した後、賢治は欄外に「桂沢金山/金を洗ひ示す」「預言者」と書いている。『定本語彙辞典』には、「桂沢」は豊沢川上流の山沢。古くは金鉱があり、今も採掘跡が山に残っている。「桂沢金山」は南部藩の隠し金山だつたという説がある」とあり、対馬美香(後掲B)も同じ見解のようだが、九州大学工学部所蔵の明治初年の鉱山・精錬史料「諸国巡回諸鉱山略図」に「閉伊郡下宮守村ノ内/桂沢金山」と載っている(<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/kouzani/index.html>)ことから、こちらであると考えた方がよいように思う。ただ、対馬(後掲B)の、「下書稿の中には「旧式鉱炉」や「鑄物工場」といった詩句があり、そのような施設を持つ規模の鉱山となると、近辺では、和賀郡の秋田県に近いところに位置する和賀仙人鉱山しかない。従つて、登場人物の設定のし直しと同様に、ここでは複数の鉱山のイメージの重ね合わせ、言うなれば虚構化の手法が取られたとみるべきで、本詩のモデルとなつた鉱山も一つにしぼることはできないように思われる」という指摘は当たつていると思う。

先行研究

小野隆祥A「賢治の和賀時代の恋 大正八年成立仮説の幻想的展開」(『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッチ」探究』洋々社 昭和五十七年十二月)

小野隆祥B「幻想的展開の吟味」(『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッチ」探究』洋々社 昭和五十七年十二月)

対馬美香A「宮沢賢治・「疾中」詩篇の総括的研究」(『雪渡り 弘前・宮沢賢治研究会会誌7』弘前・宮沢賢治研究会 平成二年十二月)

島田隆輔A「冬のスケッチ」現状に迫る試み/現存稿(広)グループ・標準型(一)における『宮沢賢治研究Anna18』宮沢

賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月)

対馬美香 B 「廃坑」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラローノ

平成十二年九月)

島田隆輔 B 「原詩集の輪郭」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立

鉛筆・赤インクへ写稿Vによる過程』 [未刊行] 平成二十二年

年六月)

小林俊子 「詩歌」(『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』 勉誠

出版 平成二十三年八月十日)

入沢康夫 「ああ、紛らわしい」「天霧し」(『賢治研究 119』 宮沢賢

治研究会 平成二十四年十二月)

古沢芳樹 「更に紛らわしい」「天霧し」(『賢治研究 120』 宮沢賢治

研究会 平成二十五年四月)

39 副業

① 雨降りしづくひるすぎを、 青きさゞげの籠とりて、

巨利を獲るてふ副業の、 銀毛兎に餌すなり。

② 兎はついにつくのはね、 ひとは頬あかく美しければ、

べっ甲ゴムの長靴や、 緑のシャツも着くるなり。

大意

雨が烈しく吹き付ける昼過ぎに、青いさゞげの籠をとって、大きな利益を得ることができるといふ副業の、銀毛の兎にエサを与えている。

兎の飼育などでうまくいくはずもないのに、その人は頬を赤く染めて美しく、

鼈甲色のゴム長靴をはいて、緑色のシャツも着るといった出で

立ちだ。

モチーフ

大正末年から昭和初年にかけて岩手県下では副業が奨励された。兎の養殖はその一つだが、ここに登場した人物は、豪雨の日でも熱心に兎にエサを与えるものの、美しく赤い頬、鼈甲色のゴム長靴に緑色のシャツという出で立ちからして、どうも本業である農業の方はしていないようで、先行作品では「さっぱり仕事稼がないで／のらくらもの」とささやかれるような人物として描かれる。養兎は大正末年に価格が暴騰し、このためか楽をして巨利を得ようというイメージが定着し、それを煽るメディアもあったようだ。こんなことでうまくいくわけもないという思いが「兎はつひにつくのはね」に託されているのだろう。農業の直面する問題が、決して自然災害や制度のみによるものではないことが書かれた作品だと思ふ。

語注

副業 明治末年の凶作や日露戦争後恐慌によって岩手県の農業経営は悪化し、これを取り越えるための方法の一つとして論じられるようになったのが副業である。馬鈴薯・燕麥・トウモロコシの栽培、蚕・羊・豚・鶏の養殖、木綿織り・あけび蔓細工などが勧められ、また出稼ぎも奨励され、大正十四年には副業奨励規程が出された。大正十四年末のデータ(『副業参考資料 第24 副業ニ関スル団体調査』 農林省農務局 昭和二年九月)によれば、岩手県下における養兎の副業関係団体数は八、団体員数は一、〇六〇人(団体員数は全国で五位)。全国一位は長野県の三十五団体、三、六三二人であったという。大島丈志(後掲 B)は昭和二年には岩手県の養兎組合は一つ(組合人数二一人)で、組合数が三十以上あった福島とは違って小規模であったという。

さくげ 豆の一種。アフリカ原産の大角豆。さやが十〜三十センチほどになり、豆は直径一センチほど。食用・飼料用に用いられる。

銀毛兎 「ぎんけうさぎ」と読ませるのだろう。ウサギはペット用・毛皮用・食肉用に育てられたが、「銀毛兎」という名前のものはいないようだ。蜂谷宝富登『体験から見た実利養兎法』（二宮村養兎組合出版部 昭和九年九月）には、「有色フレミー種」の「体色」として「鼠色がかつた銀色であるから、銀兎とも云ふ」とある。

つくのはね 「償のは」＋「ね」（打消の助動詞「ず」の已然形）。埋め合わせることができない、の意。意味を強めるつもりがあつて、已然形としたのだろう。

べつ甲ゴム 鼈甲色のゴム長靴。

評釈

「春と修羅 第三集補遺」の「このひどい雨のなかで」を文語詩に改作したもの。黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「副業」。鉛筆で⑤）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。「春と修羅 第三集」の「二〇九〇」「何をやつても間に合はない」一九二七、八、二〇、」は先行作品の逐次形。また同日に書かれた「二〇八九」「二時がこんなに暗いのは」一九二七、八、二〇、」は関連作品。まず「このひどい雨のなかで」を引用してみる。

このひどい雨のなかで
しづかに兎を飼つてゐる
いゝ兎なので

顔の銀いろなのもあり
めじろのやうになくのもある
そしてパチパチさくげをたべる

けれどもこれも間に合はない
間に合はないと云つたところであ
ああいふふうに若くて

頬もあかるく
髪もちぢれて黒いとなれば
べつかうゴムの長靴もはき
オリイウいろの縮みのシャツも買つて着る
そしてにがにがわらつてゐる
かぐらのめんやうなところがある
なにをやつても間にあはない
その親愛な仲間のひとりだ
くらく垂れた桑の林の向ふで
南のそらが灰いろにひかる

兎の飼育は明治四年頃に大流行したが、主に愛玩用であつた。ブームがあまりに過熱したため、兎市が禁止されたり、兎の毛を染めて売るといった不正事件も起こり、東京市では兎税が導入されたため、一挙に飼う人が減つたという（『明治事物起源』）。大正期には、アメリカへの輸出が盛んになり、農林省農務局『副業参考資料第23 東京市場及大阪市場ニ於ケル生豚及生兎ノ取引状況ノ横浜市場及神戸市場ニ於ケル兎毛皮ノ取引状況』（昭和二年七月）によれば、その事情はおよそ次のようなものであつた。

最近ニ於テ養兎業ノ漸ク盛シナラントスル原因ハ戦後米國ニ於テ兎毛皮ノ流行ニヨリ本邦ヨリ其ノ輸出ヲ増加シタルニ因ルモノニシテ輸出ハ大正九年頃ヨリ始マリ大正十一年十二年ヲ経テ十三年ニハ益々増加シ大正十四年春期ニ於テ最盛期トナリ価格ニ於テ大正九年頃ニハ白兎毛ハ一枚四、五十銭ノモノ大正十三年ニハ八、九十銭トナリ次テ一円五、六十銭ヨリ同年末ニハ二円ヲ称スルニ至リ尚大正十四年春期ニ至リテハ貿易商ニ於テ外

国注文ノ責任数量ヲ充ス必要上白兔毛皮上物一枚三円ヲ称スル
ニ至リ最高価ノモノニハ四円二十銭ヲ払ヒタルモノアリト云フ

大島丈志(後掲A、B)が指摘するように、川原仁左エ門(「羅須
地人協会時代」『宮沢賢治とその周辺』昭和四十七年五月)は、
賢治が「種畜売りの投機色のあるチンチラ兔はどうかとか、田圃
に新潟の様にチューリップの球根を植えましょう。之を大いに奨
励してください。私も大いにやりますからと云つて県農会に来た
つた」と書いているが、兔の皮が高く売れていることを知って、
賢治はチンチラ兔にも目を付けたのだろう。

「詩ノート」の「一〇九〇」 「何をやっても間に合はない」に
は次のようなものだ。

何をやっても間に合はない
世界ぜんたい間に合はない
その親愛な仲間のひとり

また稲びかり
雑誌を読んで兔を飼つて
その兔の眼が赤くうるんで
草もたべれば小鳥みたいに啼きもする

何といふ北の暗さだ
また一ぺんに叩くのだらう

さうしてそれも間に合はない
貧しい小屋の軒下に
自分で作った巣箱に入れて
兔が十もならんでゐた
外套のかたちした
オリーブいろの縮のシャツに
長靴をはき
頬のあかるいその青年が

裏の方から走つて来て

はげしい雨にぬれながら
わたくしの訪ねる家を教へた

わたくしが訪ねるその人と
縮れた髪も眼も物云ひもそっくりな
その人が

わたくしを知つてるやうにわらひながら
詳しくみちを教へてくれた

ああ家の中は暗くて藁を打つ気持ちにもなれず
雨のなかを表に出れば兔はなかな

所在ない所在ないそのひとよ
きつとわたくしの訪ねる者が

笑つていふにちがひない
「あゝ、従兄すか。」

さっぱり仕事稼がないで
のらくらもので。」

世界ぜんたい何をやっても間に合はない
その親愛な近代文明と新たな文化の過渡期のひとよ。

農村経済を安定化させるための方策の一つとして、副業が奨励
されており、賢治はここで養兔をしている人について書いている
わけだが、大島(後掲B)は、「米や麦を作るのではなく、儲けを
狙つて、兔の飼育に過度に入れ込むことに対しては、当然世間の
冷やかな反応が予測されよう」としながら、「親愛なる仲間」と
賢治が共感を送っており、文語詩では、その共感の言葉こそ削除
されるものの「世間から浮いた存在ではありながらも、不定形の
未来への希望を持つ農夫像」を描いているのだとする。

しかし、「詩ノート」によれば、この一九二七年八月二十日には、
大豪雨があり、「一〇八七」〔ちしぼりの蔓〕一九二七、八、二
〇、一では、「もう働くな／働くことが却つて卑怯なときもある／

夜明けの雷雨が／おれの教へた稲をあちこち倒したために／こんなにめちやくちやはたらいて／不安をまぎらさうとしてゐるのだ」「青ざめて／こはばったたくさんの顔に／一人づつぶつつかつて／火のついたやうにはげましてあるけ／穫れない分は辨償すると答へてあるけ」と書きつけるような日であった。「二〇八八 祈り 一九二七、八、二〇、」にも、「倒れた稲を追ひかけて／これからまだ降るといふのか／一冬鉄道工夫に出たり／身を切るやうな利金を借りて／やうやく肥料もした稲を／まだくしゃくしゃに潰さなければならぬのか」ともあり、兎を飼う青年の家に賢治が来たのも、緊急事態の中でできごとだ。

賢治自身、自分のやるべきことが何なのかも判別がつかないまま、がむしやらに家を訪ね続けることしかできず、それを「不安をまぎらさうとしてゐる」だけの「何をやっても間に合はない」「卑怯な」行為だとしたのだから、そんな折に、オシヤレないでたちで、自分に対して笑みをたたえながら、親切に道を教えてくれる青年は、無駄にオシヤレで、無駄に親切で、それは自分と同じように、農村に何の幸いをもたらすことのない存在に見えたのではないだろうか。

「親愛な仲間」や「その親愛な近代文明と／新たな文化の過渡期のひとよ」という言葉は、皮肉で言っているものであり、大島が言うような新しい時代の青年に向けての励ましの言葉ではないように思う。

この一ヶ月ほど前の「二〇八二 「あすこの田はねえ」 一九二七、七、一〇、」で、賢治は「これからの本統の勉強はねえ／テニスをしながら 商売の先生から／きまった時間で習ふことではないんだよ／きみのやうにさ／吹雪やわづかな仕事のひまで／泣きながら／からだに刻んで行く勉強が」「それがあたらしい時代の百姓全体の学問なんだ」と書いていたが、その賢治が「雑誌を読んで兎を飼って」、そしてオシヤレな恰好をしているような人物を、称賛したとは思えないのである。

そもそも、この青年は「詩ノート」の「二〇八九 雨中謝辞」に、「まるであらゆる人を恐れて棲んでるやうだ」と書かれ、また、同日の「二〇九〇 「何をやっても間に合はない」」には、「貧しい小屋の軒下に」住んでいたと書かれるような存在で、経済的な困窮度も相当なものであったようである。それなのに「外套のかたちした／オリブいろの縮のシャツに／長靴をはき／頬のあかるいその青年」とされているのである。農民がオシヤレであつていけないことはないのだが、本業よりも副業に専念し、自らの置かれた立場も心得ずに身の丈に合わないオシヤレをするあたりに、賢治は違和感を感じたのではないだろうか。

「わたくしが訪ねるその人」は、彼に対して「さっぱり仕事稼がないで／のらくらもので」と言うだろうとするのだが、服装と物腰こそ立派であつても、マトモな人間ではないということをお知らせしたいのだろう。

先に引用した『副業参考資料 第23』は、このように続ける。

大正十四年冬期ニ於テハ価格ノ下落ヲ生シ十四年十二月ニハ白兎毛皮ハ一枚一円四、五十銭トナリテ取引ノ緩慢ヲ生シ漸ク滞価ヲ生セントスルニ至レリ
之レカ原因ハ為替相場ノ変動ニヨリ円価ノ昂騰ハ輸出品ノ本邦仕入相場ヲ低落セシメ兎毛皮ニ於テモ之力為一枚ニ対シテ三、四十銭方ノ低落ヲ生セシムルニ至レリ而モ一方米國ニ於ケル兎毛皮ノ流行ニモ幾分ノ変動アリ且ツ一時本邦兎毛皮ノ相場昂騰ハ本邦輸出品ノ需要ヲ抑制シタルモノ、如ク大正十四年ヨリ十五年一月ニ亘リテ幾分輸出ヲ減少シタル傾向アリ現在ニ於テハ兎毛皮商況甚タ振ハサルノ状況ニアリ然レトモ兎毛皮ハ一枚ノ相場二円以上三円内外ニ及ブコトハ寧ろ異常ノ現象ニシテ本邦ノ輸出相場一円四、五十銭ヨリ一円二、三十銭程度ナレハ今後トモ相当輸出ノ見込アリ

賢治がこうした事情まで知っていたかどうかはともかく、為替相場にも左右され、投機的な色彩の強かった兎の飼育に全力を傾注する存在など、とても奨励できるようなものではなかった。

昭和五年十一月に刊行された浅野喜八郎『小金儲けの手順 文なしから千円まで』(白鳳社)には、看板ブローカー、電話ブローカー、麻雀倶楽部開業、薬用サフランの栽培、食用蛙の飼育、蜜蜂の飼育などに並んで、「小金を設ける手段」として兎の飼育の章があり、次のように紹介されている。

これは飼料には大抵の植物を利用する事が出来、而も動物質の給与と云ふ事も省けるし、又子供にも老人にも誰にでも世話する事が出来る、且つ地積も余り広い所もいらぬ。日当りさへよいならば縁の下でも物置の隅でも差支ないので極々気楽に飼ふ事が出来るのである。

尚その生産物は、肉は兎肉とし勿論利用が出来るし、毛皮の様な物も、此頃需要の道が広くなつて来て、今の所では外国等にも大分沢山輸出されてゐるので、その生産物の販売利益と云ふものは販売方法が上手行きさへすれば、十分得られるのである。

また、賢治没後の出版物ではあるが、長谷川幹男『資本五十円 インテリ向き新利殖法』(文啓社書房 昭和十年一月)には、貯金や株、債券の運用方法の他に「競馬にもこれだけの儲け方がある」、「流行の犬を飼へばこれだけの儲け」、「内職に受験パンフレット」、「一部屋貸して基会所経営」などの章があるが、それらに並んで「卅円の資本で廿円儲かる養兎 女子供にできるうさぎの飼養」が置かれている。

家庭の副業で、相当利益のあがるものもなか／＼多いが、前述した通り、あまり専心それに性根を打ちこまずに、それ

でみて相当の利潤を得やうといふのであるから、かなりむづかしいが、中でも養兎などは、最もよくこの注文に嵌るものであらう。

もちろん、兎の飼育をしようとする者すべてが、浅薄な理由で養兎を志したわけではないだろう。農村の副業として有望だと説く書物も多くあり、当時の新聞にも「前途洋々たる養兎業の将来」(「中外商業新報」 昭和五年三月一日)や「農家の副業に養兎事業が有望」(「岩手毎日新聞」 昭和六年六月十九、二十日)と報道されており、おそらくは真面目に取り組むものの方が当時も多かっただろうと思う。

しかし、「さつぱり仕事稼がないで／＼のらくらもの」と噂されるような従兄が、「雑誌を読んで兎を飼」うことにしたというのは、どうやら真面目ではない方のタイプの言説に影響されているように思えるのである。当時の新聞にも養兎を勧める広告が数種類確認できたが、例えば左にあげたのは昭和初年の「岩手毎日新聞」に何度も載っていた広告だが、この文面を見ても、「年益千円」「頗る容易」「生兎は本会永久買入」「不景気打開策」「速に試みられよ！」などと、なんとも威勢がいい。今日でも貸しマンションを買うようにという電話がかかってきたり、新聞や雑誌、ネットでは、外国為替、原野商法、未公開株、絶対に得する株情報など

農林省推薦の



千円益 兎を養へ

飼料は藁の雑草で成長、養方は頗る容易、繁殖は年八頭出産、生兎は本会永久買入、用途は肉は豚肉、毛皮は海外へ輸出、養兎は不景気打開策也、速に試みられよ!!!

詐見はハガキをお出し下さい

東洋養兎奨励會

が溢れている。これら全てがインキキであるなどと言うつもりはないにせよ、こうした威勢のよい広告に飛びつく人が、どれだけ自らの経済的環境について真剣に考えているかは疑わしい限りだ。そもそも定稿には「巨利を獲る」という言葉があったが、岩手県の農村を窮乏から救う「副業」に精魂を傾けた人物であったとしたら、「巨利」などという言葉は出てこなかっただろう。

「何をやつても間にあはない」下書稿(二)には、「カタログを見てしるしをつけて／グラヂオラスを郵便でとり／めうがばたけと椿のまへに／名札をつけて植え込」とも書かれていたが、ここで書かれているカタログというのも、先にあげた広告と似たり寄つたりのものであるような気がしてならない。

「グスコープドリの伝記」でも、ブドリが赤鬚の主人の家に行くと「こんどは毛の長い兎を千足以上飼つたり、赤い甘藍ばかり畠に作つたり」していると書かれていたが、ここにもしつかりと「相変わらずの山師」という言葉が付け加えられていた。

賢治は「一〇八七 「ぢしぼりの蔓」」で、「働くことが却つて卑怯なときもある」と書いたように、働いてさえいればそれで済むわけではなく、それは「不安をまぎらさうとしてゐる」だけなのだとして自己批判していたが、かといって明るい未来だけを信じ込んで生きている人間に対して、すがすがしい気持ちで眺めることができたとは思えない。

とはいえ賢治が養兔に甘い期待を抱く青年を全面的に非難したわけでないことは、大島の指摘を待つまでもなく、皮肉こそ込められてはいるものの「親愛な仲間」と呼びかけていることから明らかだ。しかし、それだからこそ、農村を変えていくことがいかに複雑で難しいかを痛感したのであり、ここにはそうした困惑が書かれていたように思えるのである。

先行研究

大島丈志 A 「副業」 『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ

平成十四年七月)

島田隆輔 「原詩集の輪郭」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク』) 写稿 V による過程」 [未刊行] 平成二十二年六月)

大島丈志 B 「農夫へのまなざし 文語詩「副業」を読む」(『宮沢賢治の農業と文学 苛酷な大地イーハトーブの中で』 蒼丘書林 平成二十五年六月)

40 幻礼心写す直六

① 学生壇を並び立ち、 教授助教授みな座して、
つめたき風の聖餐を、 かしこみ呼ぶと見えにけり。

② (あな虹立てり降るべしや)
(さなりかしこはしぐるらし)
……あな虹立てり降るべしや……
……さなりかしこはしぐるらし……

写真師台を見まはして、 ひとりに面をあげしめぬ。

③ 時しもあれやさんとして、 身を顛はする学の長、
雪刷く山の目もあやに、 たゞさんとして身を顛ふ。

③ ……それをののかんそのことの、 ゆゑにはかに推し得ぬ、
大礼服にかくばかり、 美しき効果をなさんこと、
いづちの邦の文献か、 よく録しつるものあらん

④しかも手練てなれの写真師が、三秒ひらく大レンズ、千の瞳のおのおのに、朝の虹こそ宿りけれ。

大意

学生たちが壇上に並んで立ち、教授や助教はみな座って、つめたい聖餐のような風を、謹んで呼んでいるようにも見える。

「ああ、虹が立った、雨が降ったのだろうか」
「ほんとうだ、あそこでは雨が降っているようだ」
……ああ、虹が立った、雨が降ったのだろうか……
……ほんとうだ、あそこでは雨が降っているようだ……

写真師は台を見まわして、一人に顔をあげさせた。
そんな時に光がさつと差し込んで、校長は身を震わせ、雪をかぶった山がきらびやかであるのにも劣らず、校長も光を浴びて身を震わせた。

……校長がなにゆえ身を震わせたのか、その理由はすぐには想像できないが、
大礼服にこれほどに、人を美しくみせる効果があるのだと、
どこの国の文献に、これを記録してあるだろうか……

そのうえ仕事なれした写真師が、三秒間だけ開放する大レンズには、壇上にいる人の千の瞳のそれぞれに、朝の虹が映りこんでいる。

モチーフ

盛岡高等農林学校で何かの式典の通りに記念写真を撮影した際の記憶にもとづく作品。短歌にあるように記念撮影の際にちょうど虹が出たことがあったようだが、「短篇梗概」等の「大礼服の例外的効果」のモチーフも合流している。瞳に映った朝の虹と共に、賢治が写真におさめてほしいと思っただのは、校長の体の震えによって「美しき効果」を生む大礼服だったようだ。

語注

聖餐 キリストの最後の食事を思い起こす儀式。キリストの血と肉を表す意味で、パンと葡萄酒が分け与えられる。ここでは風を聖なる食事だとする比喩。

推し得ね 「推し量ることはできないけれど」の意。音数の関係から「すいしえね」と読みたい・次行の「美しき効果」も、音数から「はしきこうか」と読みたい。

身を顫はする ふるえというのは、大日本住友製薬 (<http://kan-ja.ds-pharma.jp/health/hurue/krisool.html>) のサイトによれば、①生理的振戦（精神的緊張や寒さなどによる）、②甲状腺機能亢進症（バセドウ病）、③アルコール依存症、④本態性振戦（理由が説明されていない）、⑤パーキンソン病があるというが、おそらく校長は②⑤のなんらかの病的な理由によって顫えていたのだろう。なぜ①ではないかと言え、これならば「ゆゑにはかたに推し得ね」と言わせることはなかったと思うからだ。壇上であいさつする必要があったり、極端に寒かったのなら、近くにいればわかったはずである。

大礼服 『新修百科事典』（三省堂 昭和九年二月）にはこうある。「大礼服制により其方式を定められてある儀式上服装中最上のもの。大礼服には文官大礼服・判任官及非役大礼服・有爵者大礼服・朝鮮貴族大礼服等がある。これを着用するのは新年礼拝・元始祭・新年宴会・伊勢両宮例祭・紀元節・神武天皇祭・天皇節・明治節・大正天皇祭・外国大公使参朝の節其他の場合であ

る。陸海軍に於ては大礼服に相当するものを正装といふ。
三秒ひらく 写真を撮る時に、フィルムがレンズを通った光を浴
びる時間が三秒間（シャッター・スピードが三秒）だったとい
うこと。

評釈

「〔歌稿B〕」の短歌³⁷⁹を文語詩化したもの。「短篇梗概」等
の「大礼服の例外的効果」も関連作品。無野詩稿用紙に書かれた
下書稿(-)、黄野(222行)詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(タイ
トルは「記念写真」。鉛筆で⑤)、定稿用紙に書かれた定稿の三種が
現存。生前発表なし。

まずは「〔歌稿B〕」の短歌³⁷⁹をあげてみる(「〔歌稿A〕」も一行
書きなだけで、内容はほぼ同じ)。

379 みんなして
写真をとると台の上に

ならばば朝の虹ひらめけり。

歌稿には、この歌の直前に「◎朝の写真 詩体に直す」と書き
込みがあるというが、『新校本全集』にあるとおり、文語詩への改
作を指すのだろう。この歌は「大正五年十月より」という項に収
録されており、次の項は「大正六年一月 一九一七年」であるこ
とから、『新校本全集 第十六卷(下) 補遺・資料 補遺・伝記
資料篇』の二九〇ページに収められた盛岡高等学校農学科第
二部の教職員と学生の写真が、この時に撮られたものだろう。文
語詩のみを見るととてもたくさんの人間が集まっているように見
えるが、実際は学生四十二名、教員六名で、「千の瞳」はかなり誇
張された表現であるようだ。『新校本全集』では、「この写真に関し
て「服装や足下の草の状態から、冬から早春にかけての時期では
ない。校長が大礼服を着用するのは、入学式・卒業式・元日・紀

元節・天長節・後続奉迎時であるが、これらのなかで本写真の撮
影時期として可能性のあるのは、入学式・天長節・後続奉迎時の
いずれかに絞られる。大正五年度入学式は、校長は出張のため
参列していないので、岩田元兄(賢治と寮で同室だった一学年下
の学生・信時注)の記憶を一年繰り上げて、大正五年秋の撮影と
するのが最も妥当であろう。天長節か奉迎時かは不明である」と
あり、³⁷⁹の短歌には触れていないが、ピツタリと一致している。
『年譜』を見てみると、十月二十二日に「皇后、皇太子の御真
影を盛岡停車場に奉迎し、一〇時半第一講堂で奉戴式」とあり、
十月三十一日には天長節、また、岩田元兄の回想にはないが、『年
譜』では、十一月三日に「立太子礼拝祝儀式、八時半第一講堂で
挙行。夜、市主催の提灯行列に参加」ともあるもので、この日に写
真が撮られたのかもしれない。文語詩には「つめたき風の聖餐を、
かしこみ呼ぶ」という表現があるが、大正天皇の御真影を迎え
ることから、「かしこみ呼ぶ」といった言葉が出てきたのかもしれない。
いずれにせよ皇室に関わる行事の際の写真撮影であること
は確かなようだ。

文語詩の下書稿(-)の初期形態をあげる。

(そのうしろにて朗らかなる

藍の山脈なみはいつかたぞ)

(そは七雨時 陸中と

陸奥を堺へる地塊なり)

(げに虹立てり 晴るらんや)

(さなり朝虹 暗ければ)

写真師はつと気を充て、
レンズの蓋をはづさんと
さらに一たび見まはせば
こはそもいかにまなかなる

その黄金色の校長は
さんらんとしてうち顛ふ

それ身ぞふるふそのことの
故は何ともわかねども
大礼服にかくばかり
美しき効果のあらんとは
いづくの国の文献か
よく記し置けるものあらん

写真師気をばとり直し
三秒ひらくレンズには
五百の口とかゞやける
千の瞳ぞうつりける
そのおのおのの瞳には
千の虹こそ映りけり

写真師レンズ蓋なして
いとへりくだり礼すれば
俄かに何かけはひして
校長もたち教授らも
みな立ちあがり学生ら
どつと壇をば下りけり

短歌からすんなりと発展しているように思えるが、大きな変化は大礼服を着た校長の登場、すなわち関連作品である散文「大礼服の例外的効果」のモチーフが紛れ込んでいることである。短い作品であるし、梗概を述べるのみではニュアンスが伝わりにくいと思うので、全文をあげてみる。

こつこつと扉を叩いたのでさつきから大礼服を着て二階の式場で学生たちの入ったり整列したりする音を聞きながらストウヴの近くできうくつに待ってゐた校長は 低く よし と答へた。旗手が新しい白い手袋をはめてそのあとから剣をつけた鉄砲を持って三人の級長がはいって来た。校長は雪から来る強い反射を透して鋭くまっさきの旗手の顔を見た。それは数週前いきなり掲示場にはりつけられたわれらはわれらの信ぜざることなさを といった風の宣言めいたものの十幾人かの連名のその最後に記された富沢であった。

それについてのごたごたや調査で校長はひどく頭を悩ました。ところがいま富沢は大へんまじめな様子である。それは校旗を剣つきの鉄砲で護るわけがちゃんとわかったやうでもありまた宣言通り式場へ行つてからいきなり校旗を投げ出して何か叫び出すつもりをやうでもありどうも見当がつかなかった。

みんなはまっすぐにならんで礼をした。
校長はちよつとうなづいてだまって室の隅に書記が出して立て置いて校旗を指した。

富沢はそれをとつて手で房をさばいた。校長はまだちよつと富沢を見てゐた。富沢がいきなり眼をあげて校長を見た。校長はきまり悪さうにちよつとうつむいて眼をそらしながら自分の手袋をかけはじめた。その手はぶるぶるふるえた。校長さんが仰るやうでないもつとごまかしのない国体の意義を知りたいのです。と前の徳育会でその富沢が云つたことをまた校長は思ひ出して。それも富沢が何かしつかりしたさういふことの研究でもしてゐてじぶんの考へに引き込むためにさう云つてゐるのか全く本音で云つてゐるのか、或は早くもあの恐ろしい海外の思想に染みてゐたのかどれかもわからなかった。卒業の証書も生活の保証も命さへも要らないと云つてゐるこの若者の何と美しくしかも扱ひにくいことよ 扉がまたことごとく鳴った。校古いその学校の卒業生の教授が校旗を先導しに入つて来た。校

長は大丈夫かといふやうにじつとその眼を見た。教授はその眼を読み兼ねたやうに礼をして「お仕度はよろしうございますか。」と云った。「よし」校長は云ひながらぶるぶるふるえた。教授はじぶんも手袋をはめてないのに気がついて あ失礼と云ひながら室を出て行った。

校長は心配さうに眼をあげてそのあとを見送った。

校長の大礼服のこまやかな金彩は明るい雪の反射のなかでちらちらちら顫へた。何といふこの美しさだ。この人はこの正直さでこゝまで立身したのだ。と富沢は思ひながら恍惚として旗をもったまゝ校長を見てゐた。

「記念写真」とは季節がずれているが、どちらか一方が他方を取り込んだか、あるいは似た体験が複数回あったのかわからないともあれ、盛岡高等農林学校の校長室で、富沢を彷彿させる富沢なる学生が、無事に式を終えたい校長を動揺させているという書き出しだ。しかし、この対立は、富沢が校長の着ていた大礼服の「例外的効果」によって一挙に崩れ、良くも悪くも平和な作品に落ち着いてしまっている。

「大礼服の例外的効果」における「雪から来る強い反射」という言葉を信じれば、校長が大礼服を着るのは元旦、紀元節、卒業式というあたりになるが、亀井茂（「宮沢賢治と盛岡高等農林学校断片（七）」作品「大礼服の例外的効果」をめぐって）「早池峯22」早池峯の会（平成八年三月）の「新年の場合は冬休み中で市内や周辺在住学生のみ出席であったろうし」、「三月中旬頃ではどの程度雪が残っているか、また残った雪ももう薄汚く反射力も弱くなっているような気もする」という意見を容れれば、紀元節のできごとであったとするのが妥当だろう。

賢治と学校側の意見が対立したということについてだが、保阪庸夫・小沢俊郎の『宮沢賢治 友への手紙』（筑摩書房 昭和四十四年六月）に従って考えれば、大正五年に大山巖元帥を国葬にし

ながら夏目漱石を国葬にしなかったことを文化軽視であるとして抗議し、学校の許可なく掲示板に張り紙をしたという事件があり、また、農学科第二部を農芸化学科に改めようとしたことに対する反対から、学生たちが教授宅に押しかけたという事件があったという。

また、古屋敬子（「大礼服の例外的効果」 「四次元200」 宮沢賢治研究会 昭和四十三年一月）は、大正六年九月に設置された臨時教育会議により学校における国家主義体制の本格化に対する反対運動が全国的に起こり、賢治もその動きの中にいたのではないかとする。

さらに大正七年三月に、アザリアの同人であり賢治の親友だった保阪嘉内が、卒業式直前に除名処分になったことがもあげられよう。除名の理由は明らかでないが、「アザリア5」（大正七年二月二〇日）に保阪が発表した「社会と自分」に、「ほんとうにどうかい力。力。力。おれは皇帝だ。おれは神様だ。おい今だ、今だ、帝室をくつがえすの時は、ナイヒリズム」といった言辞があり、そのためではないかとわれている。短歌や文語詩「記念写真」は大正五年秋のできごと、「大礼服の例外的効果」は紀元節のできごとだとすれば、直接の関係はないにしても、高等農林に対する不穏な気持ち共通していることだけは確かである。

「大礼服の例外的効果」における「徳育会」については、亀井茂（前掲）が、盛岡高農には「品性を修養し親睦を謀る」ことを目的とした徳育部があり、賢治は大正六年度には委員を務めたのだという。徳育部では、時に品性修養に関する講演会を催し、それを徳育会と言ったのだというが、もしかしたら校長をはじめとする教員も列席したこの会で、賢治は本場に「もつとごまかしのない国体の意義を知りたいのです」と問い詰めるようなことがあったのかもしれない。

そもそも本作自体が大正十五年、あるいは昭和六年以降に書かれたとも考えられているので、事実そのままであったとしても記

憶違いはあるだろうし、工藤哲夫（「短編梗概」等）『宮沢賢治の全童話を読む 国文学 解釈と教材の研究 2月臨時増刊号』学燈社 平成十五年二月）のように「全体が創作の可能性がある」という論者もあるので、文語詩のモデルを考える時と同じような慎重な姿勢が求められよう。

古屋（前掲）は、校長との意見対立を中途まで描きながら、校長に同情してしまうという結末に対して「この賢治のもろさにもどかしさを覚え」とするが、たしかにそんな気もする。

ただ、伊藤眞一郎が「宮沢賢治の小説的作品について」（『近代文学試論14』 広島大学近代文学研究会 昭和五十年十月）で指摘しているように、この作品における富沢と校長は深刻な対立的関係にあるようだが、「それもあくまで背景であり、「例外的効果」というユーモアを生むための道具立てとしての設定にすぎ」ず、「各作品に描かれている人物の、自他の関係における主体の在り様という点に絞ってみるならば、彼らが、申し合わせたように、他者の様態に過度に敏感な、心理的に影響を被り易い存在であることは確かであり、そのことから、彼らを、他者に対しての主体性の稀薄な受身的な存在と見做すことは十分に納得のゆくことであろう」という指摘は重要だと思う。どうしても校長との対立の方に目を奪われがちだが、実は賢治にその方向で追究しようという意識は薄く、それは「大礼服の例外的効果」というタイトルがついていることにも示されていると思う。

さて、ここで文語詩「記念写真」に戻ろう。「大礼服の例外的効果」を読んだことのある人間ならば、ついつい賢治と校長の対立といったようなことに関心が奪われがちである。しかし、ここでは、校長との対立といったイメージが見事に切り落とされている。定稿は字数が二百五十以上もあるのに、ギリギリまでに字数が凝縮されたために削除されたといった説明はできない。とすれば、もともとあまり書くつもりがないからだと考えた方がよいのではないだろうか。

では、「大礼服の例外的効果」と文語詩に何が共通しているのかと言え、校長の大礼服の「こまやかな金彩」が「ちらちらちらら顫へた」ことである。文語詩でも、この「顫へ」だけは生きている。それどころか、「身を顫はする学の長」、「たゞさんとして身を顫ふ」、「それをののかんそのこと」と、三度も登場していることから考えると、大礼服を美しく見せるために本来に必要な金彩がふるえることだったようなのである。

「大礼服の例外的効果」に書かれたような事実があつて、そこから一部がカットされて「記念写真」にまとめられたようにも思えるが、逆に「記念写真」の方が実際の経験に近く、これにもつともらしい説明が付け加わったものが「大礼服の例外的効果」であつたという考えも成り立つかもしれない。

いずれにせよ、記念写真の撮影中にちやうど虹が出て、人々の瞳にその姿が映つただろうという美しい詩に、さらに中央に座つた校長の金彩をふるえさせることによつて、いっそう絢爛豪華な美しさを描こうとしたのがこの詩なのであると思う。

もちろん、実際の写真に全員の瞳に虹が映りこむ現象は起こりえないし、大礼服の金彩の微細な動きをカメラが収められるわけではない。しかし、だからこそ、括弧書きや字下げ、ダッシュなどを使いながら立体的に描こうとしたのがこの文語詩なのではないかと思う。近代技術である写真の素晴らしさは認めながら、古来より伝来の文語詩は、そこでは実現できない効果も盛り込むことができる。それが十分に発揮されているかどうか、今は問わないにしても、少なくとも賢治はそんな意気込みで本作を書いたように思うのである。

先行研究

森荘巳池「賢治の短歌」『宮沢賢治の肖像』 津軽書房 昭和四十九年十月）

中村稔「疾中」「文語詩篇」その他（『宮沢賢治ふたたび』 思潮社 平成六年四月）

須田浅一郎「宮沢賢治の文語詩に拠る挑戦」（『宮沢賢治に酔う幸福』 日本図書刊行会 平成十年三月）

41 塔中秘事

① 雪ふかきまぐさのはたけ、
丘裾の脱穀塔を、

玉蜀黍畑フキ漂雪は奔りて、
ぼうぼうとひらめき被ふ。

② 歓喜天そらやよぎりし、
なにごとか女のわらひ、

そが青き天あめの窓より、
栗鼠のごと軋りふるへる。

大意
まぐさ畑は今や雪深く、玉蜀黍畑にも吹雪が激しい、
丘のふもとにある脱穀塔を、吹雪はぼうぼうと音を立てて吹いている。

歓喜天が空をよぎったのだろうか、一瞬青く開いた天の窓から、
なにがあったのだろうかか女のわらい声が、栗鼠のようにふるえて聞えてきた。

モチーフ

吹雪の吹く或る日、小岩井農場にあった倉庫から女の笑い声が聞えてきた。男女が抱き合う像で知られる歓喜天が空をよぎったようだ、という。晩年の賢治は性を積極的に描こうとしていたのだという証言があるが、本作は農村の性を肯定的に描こうとしたものだろう。

語注

秘事 他人には知られたくないひめごと。学問や芸術の奥義のこととも言う。ただし、ここでは男女の密会を指すのであろう。「秘事」とえば、文語詩には、花巻近辺では一大勢力であった浄土真宗系の隠し念仏（秘事念仏）を扱った「（秘事念仏の大師匠）」「（一）」「（二）」があるが、島村輝（後掲）は、本作の持つ本源的な神秘性に目を向けるべきだとし、真言宗の異端の一つである立川流における「性的なエクスタシーを法悦状態への段階として神聖視する発想」とも通底するところがあるとする。

玉蜀黍 とうもろこしのこと。「五十篇」に「玉蜀黍を播きやめ環にならべ」があるが、こちらにはルビがない。

漂雪 吹雪のこと。方言でフキ。

脱穀塔 本作の舞台である小岩井農場に脱穀塔と呼ばれるものはなかったらしいが、元小岩井農場展示資料館館長の岡沢敏男（後掲A）によれば、耕耘部にあった四階倉庫のことであるらしい。当時の場長がオランダで見たものを参考にして、大正五年に建築されたもので、本邦唯一の木造四階建て倉庫なのだという。賢治は下書稿（一）（三）で大豆倉庫、下書稿（四）（六）では玉蜀黍倉庫、下書稿（七）と定稿で脱穀塔と書いているが、飼料となる燕麦、大豆、玉蜀黍などを乾燥・貯蔵させるために用いられたという。また、賢治は下書段階で、一貫して「三階」と書いているが、実際は四階建てで、建設された順序が三番目であったことから「第三倉庫」とも呼ばれており、賢治は二つを混同したのかもしれないと岡沢は書いている。四階倉庫では、各種の作業が行われた他、「従業員の踊りの稽古、花見・月見の宴、展望台、火の見櫓としても利用され」、「重労働に耐えない妊産婦の補女（従業員の妻女）たちが、四階倉庫において冬の仕事として大豆の撰種をした」らしい。道路から四階倉庫までは五メートルほどであったので、「女のわらひ」とあるのを男女の密会の際の声だとは考えにくく、「雪籠りの日々の気晴らしの気楽さ

から罪のない猥談に興じたとしてもふしぎではありません」とする。ただ、モデルはあくまでモデルであり、男女の密会という見解を否定するだけの理由にはならないように思う。島村（後掲）は、「塔」にも宗教的な意味があるのではないかということ。毘那夜迦天、聖天、天尊とも称される。『広説仏教語大典』によれば、「形象には象頭人身の単身と双身（夫天は象身、婦天は猪頭もある）とがある。双身には夫婦の抱く像があつて、財宝・和合の神とされ、水商売の尊信が厚く、民間信仰がさかんである」とのこと。

評釈

無罪詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、その左方余白に書かれた下書稿(二)（鉛筆による⑦が右肩にあるが、下書稿(一)と(二)のどちらに付けられたものか不明）、その裏面に書かれた下書稿(三)、下書稿(三)に×印を付し書き直された下書稿(四)（タイトルは「農場」）、下書稿(四)に×を付して書きなおした下書稿(五)（断片）、下書稿(五)を○で削除したのちに書かれた下書稿(六)、黄罨（240行）詩稿用紙に書かれた下書稿(七)（藍インクで⑧）、定稿用紙に書かれた定稿の八種が現存。生前発表なし。

本作については小岩井農場の歴史と地理に通じた岡沢敏男（後掲A、B）が詳細に論じている。まず、岡沢は下書稿(一)では、「岩崎と呼ぶ／大ブルジョアの農場」とあつたものが削除され、博物館や脱穀塔という実際には存在しなかったものを登場させ、「小岩井農場における実在の素材は、あくまでも借用であつて、逐次それをデフォルムしながら非現実（虚構）的な架空の農場世界へと再構築したのが定稿の「塔中秘事」だった」とする。

また、「栗鼠の軋り」について、『春と修羅（第一集）』の「噴火湾（ノクターン）」には、「車室の軋りは二疋の栗鼠」、「鳥のやうに栗鼠のやうに／そんなにさはやかな林を恋ひ／（栗鼠の軋りは

水車の夜明け／大きくなるみの木のしただ）、」（「車室の軋りはかなしみの二疋の栗鼠」というように、栗鼠には亡妹トシのイメージが重ねられており、「明け方になると「車内の軋りは天の楽音」と化し、△兄妹のかなしみ▽は浄化されてしまうのである。「塔中秘事」の「歓喜天そらやよぎりし」は、この△天の楽音▽と相對し、「栗鼠の軋り」の浄化に導入されたものに違いない」（後掲B）という。

さらに岡沢（後掲A）は、ユング心理学におけるアニメ・アニメスの論を援用しながら、「塔中秘事」の「女のわらひ」を解釈すれば、その「女」とは賢治自身の「内なる異性」であつて、賢治の深層にあるアニメの投影であつた」とし、「賢治の主題は「小岩井農場での事件」をスケッチすることにあつたのではなく、「女のわらひ」に密着する自己の性欲（エロス）のスケッチにあつた」とする。

いずれにしても「塔中秘事」は、賢治が悩みもだえたエロスについて、その「秘めごとを直感させる題材を繰り返し推敲し」「隠微なみだらなものとしてではなく」「現実的な抽出をやや象徴的、天上的なものに」（栗原敦（後掲）・信時注）表現するために八段階もの推敲を重ねながら定稿にいたつた、その念入りな経過にもつと注意をほらうべきでしょう。この詩を、単に「農場に働く若い男女の△真昼の情事▽である」（小倉（後掲B）・信時注）といいきつては、賢治が透明なエロスを描こうとした病床からのメッセージが、みだらにゆがんでしまうのではないでしょう。

岡沢のいう「自己の性欲（エロス）のスケッチ」や「透明なエロス」は、たしかに『春と修羅（第一集）』の時代ならそうだったかもしれないが、文語詩においては、私性を排除する方向に推敲していくというのが大原則であつたはずで、ましてや農民の性を

描く現場に立ち会っていないながら、自分自身の性意識の問題に引きつけて作品を書くことがあったかについては、もう少し注意して考えてみる必要があるように思う。

また、賢治自身の性意識は透明で、農民たちの実際の性行為はみだらでゆがんでいるとでもいうような見方にも違和感が残る。そもそも岡沢（後掲B）は、賢治が晩年になって森莊巳池に語った「人間は、もつともつと生き物として、木や草やとりやけだものと一緒に見られてよいと思う。性行為なども人体生理の調整上、どうしてもなくてはならない自然の行為で、これをいやしめるものは、もつとも悪い思想だ」という言葉を引用しながら、「農場に働く若い男女の＼真昼の情事＼」は「みだらにゆがん」だものだと批判しようとしているのは矛盾しているように思う。

小倉豊文（後掲B）は、戦前から賢治作品研究の為に花巻に赴き、その自然と民俗を知るために花巻近郊の農家などにも泊まったことがあるというが、その際に「農村では私の少年時代を過ごした関東地方の農村と同じように、野合やヨバイ（夜這い）等の性風俗が普通であったこと、花巻地方に数多くある温泉には自炊宿があり、農閑期には家族ぐるみの温泉行が習慣化していて、ここにも性風俗のつきまとっていることなどもわかったのである」と書いている。また、「栗鼠のごと軋りふるへ」たのは女の「よがり」の声である。それを賢治が「歓喜天そらやよぎりし」とズバリうたったのである。農村で「真昼の情事」の広く行われていたことを賢治はよく知っていたに相違ない。私は少年時代の関東平野の見聞からそう思ったのであるが、関登久也に話す^{おいて}と、こともなげにその通りであると肯定した^{おいて}とも書いている。生出泰一が『実説みちのくよばい物語（正・続）』（昭和五十年、昭和五十二年六月 河童仙）に花巻の周辺で集めたよばい譚を書き留めているとおりでである。菊池忠二（後掲）も、『春と修羅（第一集）』の「小岩井農場」（パート七）の中で、若い農夫が「うな いいおなごだもな」と大声で叫んだという記述を残していることにも触れ

ながら、「若い男女の従業員が四階倉庫の中で、上司の眼を盗みながら密会するということも、何かありそうなことのように思われる」とし、「作者自身のエロスをスケッチすることに主題があったとは、少しも感じられない。むしろ賢治が、人間におけるエロスの実態を不潔なものとか、いやらしいものなどとは少しも考えずに、それらをおおらかにうけとめ、そうした営みをする人間の姿を、自然の猛威と対比しながら象徴的に暗示して、その賛歌を描こうとしたもののように、私には思われる」とする。

このようなことは柳田国男の『遠野物語』（柳田国男 明治四十三年六月）には出ていないではないかという批判を受けるかもしれない。が、柳田の民俗学は性を人為的に排除したところで成り立っており、赤松啓介はそれに反発して、非常民の民俗学を提唱し、『夜這いの民俗学』（明石書房 平成六年一月）等を著している。もちろん、小谷野敦（『江戸幻想批判 「江戸の性愛」 礼讃論を撃つ』（新曜社 平成十一年十二月）の指摘を待つまでもなく、夜這いが日常的だった時代が、男女が対等に向き合い、フリーセックスを謳歌できたユートピア時代であったなどとは言い切れない。しかし、森栗茂一の『夜這いと近代売春』（明石書店 平成七年十月）の帯に書かれているように「日本の都市化は、男を夜這いから買春へとはしらせた」という側面があったことは、大筋では事実だと言うべきだろう。

賢治は昭和六年に森莊巳池を訪ね、「草や木や自然を書くようにエロのことを書きたい」（森莊巳池「昭和六年七月七日の日記」）

『宮沢賢治の肖像』 津軽書房 昭和四十九年十月）と語ったときれるが、実際、「五十篇」の「そのときに酒代つくと」のように農村における性を肯定していると捉えられる作品も書いている。その一方で、賢治が文語詩の中で一貫して否定的に描き続けているのは、花巻温泉などに代表される売買春に対してである。賢治は「日本人の性に関する文字のきたないのは、徳川時代の儒者がきたなくしたのではないでしようか」、「ハバロック・エリスの

性の本なども英文で読めば、植物や動物や化学などの原書と感じはちつとも違わないのです。それを日本文にすれば、ひどく挑発的になって、伏字にしなければならなくなりますね」（森前掲書）とも語ったというが、さすれば賢治は、農夫たちの性をみだらでゆがんでいるとしたのではなく、徳川時代以前から延々と続く政治的・経済的な強者と弱者の間で、個々の感情とは別に金銭のやりとりを行うような性こそを「きたない」としたのであり、「農場に働く若い男女の眞昼の情事」については、空をよぎる歓喜天になぞらえたような天上的なものなのだとしていたと解すべきではないだろうか。

芥川龍之介（「あの頃の自分の事」 「中央公論」 大正八年一月）は白樺派の小説家・武者小路実篤について、「武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、爽な空気を入れた」と書いたが、賢治がこれをふまえていたかどうかは定かでないにしろ、歓喜天が横切り、「青き天の窓より」女の笑い声が聞えてくるとした本作は、農村の性を描く際に「爽な空気を入れ」ようとしていたという意味で、通じるところがあるようにも思うのである。

先行研究

- 小倉豊文A 「塔中秘事」（『農民芸術4』 農民芸術社 昭和二十二年八月）
小倉豊文B 「宮沢賢治の愛と性」（『宮沢賢治9』 洋々社 平成元年十一月）
栗原敦 「『文語詩稿』 試論」（『宮沢賢治 透明な軌道の上から』 新宿書房 平成四年八月）
天沢退二郎・西谷修 「賢治、あるいは夜と戦争」（『現代詩手帳 39』 11 思潮社 平成八年十一月）
榊昌子 「宮沢賢治と小岩井農場」（『秋田県立西仙北高等学校校紀要』 秋田県立西仙北高等学校 平成九年四月）
岡沢敏男A 「塔中秘事」を現場から読む」（『ワルトラワラ12』

ワルトラワラの会 平成十一年十一月）

- 宮沢健太郎 『文語詩稿一百篇』（『国文学 解釈と鑑賞65』 1-2） 至文堂 平成十二年二月）
岡沢敏男B 『塔中秘事』（『国文学 解釈と鑑賞66』 1-8） 至文堂 平成十三年八月）
島村輝 「塔中秘事」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ 平成十四年七月）
菊池忠二 「小岩井農場紀行」（『私の賢治散歩 上巻』 菊池忠二 平成十八年三月）
島田隆輔 「原詩集の発展」（『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク』 写稿による過程」 『未刊行』 平成二十二年六月）

42 「われのみみちにたゞしきと」

われのみみちにたゞしきと、 ちちのいかりをあざわらひ、
ははのなげきをさげすみて、 さこそは得つるやまひゆゑ、
こゑはむなしく息あへぎ、 春は来れども日に三たび、
あせうちながしのたうてば、 すがたばかりは録されし、
下品ざんげのさまなせり。

大意

自分だけが正しい道を進んでいるのだとして、父の怒りを嘲笑い、母が嘆くのをさげすんで、そうした親不孝の結果に得た病気なので、声もむなしく息も絶え絶えに、春を迎えることはできただけでも一日に三度は、汗を流しながら床でのたうち回っていると、この姿は經典に書

かかれている、「下品ざんげ」の状態そのままだ。

モチーフ

昭和四年春頃（あるいは昭和七年春？）の賢治自身の心境を書いたものだろう。文語詩定稿で自分自身を、しかも文語詩制作時に近い時期の心境を、ここまで赤裸々に綴ったものは少ない。ただ、重点は必ずしも宗教的な告白に置かれているわけではなく、本人の意思はともかく、経典に書かれた「下品ざんげ」の様子を呈したということの発見に重きがあるように思える。

語注

録されし 下書稿(二)に「しるされし」とルビがある。経典に書かれておるとおりだということだろう。

下品ざんげ 犯した罪を仏の前に告白すること。『定本語彙辞典』によれば、「下品懺悔は三品懺悔と呼ばれるものの一（他に上品懺悔、中品懺悔）。唐の善導の『往生礼讃』によれば、上品懺悔とは「身の毛孔の中より血流れ、眼の中より血出づる」を言い、中品懺悔とは「遍身に熱汗毛孔より出で、眼の中より血出る」を言い、下品懺悔とは「遍身に徹り熱して、眼の中より涙出づ」を言う。上品、中品、下品の区別は、人の機根（教法を受け修行する能力↓気根）の差によるもので、懺悔そのものの価値の差ではない」とある。下書稿(一)では「下品あるひは中品の」としていたが、対馬美香（後掲）の言うように、「眼から血が流れる」という「中品」の表現に的確さを欠くとみため「下品にあらためたのだろう。」

評釈

黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(二)（タイトルは「病相」。鉛筆で⑤）、

定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。定稿に丸番号の表記はない。

島田隆輔（後掲B）は、内容の連続性から「翁面 おもてとなして世経るなど」を連作稿、兄弟稿とみている。『新校本全集』等で指摘はされていないが、対馬美香（後掲）のいうように、「疾中」詩篇との関連があり、中でも「あゝ今日ここに果てんとや」は、語句や内容の一致から関連が深いように思える。

「あゝ今日ここに果てんとや」の初期形態は次のとおり。

あゝ今日ここに果てんとや
燃ゆるねがひはありながら
はた色声にまぎらひて
十年むなしく過ぎにけり

あゝちゝはゝはわれに老い
ひとびとわれをたすけしに
まことのみちを行くなくて
なにをおもひてわれや来し

懺悔の汗に身をば燃し
自責の血をば吐きながら
たゞねがふらく蝕みし
この身捧げん壇あれと

さてはふたゝび生れんに
かゝるねがひを忘るなく
こたひの恩をひとびとに
むくひ得んほど強かれと

病中の作であり、両親が登場し、「懺悔の汗」や「自責の血」と

あることから、本作との距離は近いと思う。ただ、この「あゝ今日ここに果てんとや」が発展して「われのみみちにたゞしき」と「」になったとすれば、途中には数度の改稿があったと考える必要があるだろう。

文語詩の制作時期について、対馬（後掲）や長沼士朗（後掲A、B）は昭和四年春を取り、島田隆輔（後掲A）は、昭和七年春であった可能性を指摘するが、いずれにせよ賢治は親の恩を仇で返し、慢の骨頂、その故に病を得たという認識であったことに大きな違いはないようだ。

解釈上の鍵になるのは、「すがたばかりは録されし、／下品ざんげのさまなせり」だと思うが、小桜秀謙（後掲）は、「自分は「下品ざんげ」のさまながら、真にその罪を懺悔しているのかと反省している」とし、長沼（後掲A、B。引用はB）は、「すがたばかりは」の「ばかり」という語句には、当然「外見的には懺悔をしていない姿になっているが、胸の内には懺悔をしてもすつきりしない思いが残る」というような意味が込められている」とし、「このような自分の懺悔は、それによって罪が流されしまうような上等な懺悔ではなく、下等という意味も含めて『下品ざんげ』と呼ぶのがふさわしい」とする。また、島田（後掲B）は、「ざんげ」がその外面には明らかにみえようが、それが本心にまでは到底達してはいないのだ、ということであろう。彼の懺悔は、果てなくつづく自責・自戒の業として暗示されている」と書いている。ニュアンスはそれぞれ異なるが、自分自身の懺悔の念の不徹底を責める方向での解釈だと言っているだろう。

また、対馬（後掲）は、「ざんげのさま」の「さま」は客観的にみた場合の姿、様子をいうものであるから、『疾中』の「わたくし」「われ」「おれ」という一人称は賢治自身と等身大であるのに対して、ここでの創作の視点は、自己を素材としても超自我なものであるといえよう」と、賢治自身が分裂していることに注目する。島田（後掲A）も、「これは作者の姿であるか。けれどもそれ

を「ざんげの相^{さま}」そのものだ、と見つけている詩人がいるのではないのか。「われ」は、宮沢賢治という個人を突き破って、「罪深き人間」として現出している」とし、本作が、ただ小さな「われ」を描くだけでなく、「人間」を描く詩篇になっているのだとする。これらは「われ」の二重性に着目した論だということができるよう。

さて、ここで付け加えておきたいのは、仏説の信憑性を確認し、畏れ敬う賢治の姿についてである。「春と修羅 第二集」の「三二四」「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」一九二四、一〇、五」に、「わたくしは神々の名を録したことから／はげしく寒くふるえてゐる」とあることは知られるところだが、自らの感覚として、こうしたフレーズに共感できる人はあまりいないのではないだろうか。しかし、賢治は神々の名を書き付けたことに対して、おそらくは本当に畏れ、ガタガタと身が奮えていたのだと思う。

花巻農学校での教員時代に「種山ヶ原の夜」を生徒たちに演じさせた際にも、賢治は、

雷神になった生徒が次ぎの日、ほかの生徒のスパイクで足をザックリとやられましてねえ、私もぎよつとしましたよ、偶然とはどうしても考えられませんし、こんなに早く仇をかえさなくともよかるうになあと、呆れましたねえ。

と語ったというが（森莊巳池「賢治が話した「鬼神」のこと」『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和四十九年十月）、こうしたエピソードは他にも多くあり、賢治がどのような感覚で日々を過ごしていたかを考える際の参考になろう。

賢治をこうした意味での信心深い人間であったと考えれば、本作の前半で「われのみみちにたゞしきと、ちのいかりをあざわらひ、／ははのなげきをさげすみて、さこそは得つるやまひゆゑ」という詩句も、慣用的に表現されているのではなく、賢治

が真剣にそう思っていた可能性について考えてみるべきだと思ふ。例えば「ぼちが当たった」というような表現を、我々も日常生活でよくするが、真剣にそれを「ぼち」（神仏が与える罰）であると考え人は少ないように思ふ。関東大震災を軽佻浮薄な文化に対する天の怒りだとする天譴論が口にされた時期もあり、東日本大震災についても同じようなことを口にする人もあったが、雷神のエピソードにもあるように、賢治はそうしたことを真剣に言っていた可能性がある。

賢治の書いた最後の手紙として知られる柳原昌悦宛の書簡（昭和八年九月十一日）にも、この「ぼち」について書かれている。

私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだに付いたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲り、いまにどこからかじぶんで所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸く自分の築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。

賢治は自分の病が、どうも「慢」によるものだと思つていたふしがあり、また、その姿も『往生礼讃』における「下品ざんげ」に書かれていた内容と一致していたことを発見して驚いたのだらう。古い仏典等に書き記されていたことが、恐ろしいぐらいに正確であつたということを見出し、その卓見と超時代性に驚かされた経験を書いていたのではないだらうか。もちろん先行論文で指摘されているような親不孝の認識や、懺悔の気持ちと否定するつもりはない。しかし、本人の意志をも越えた天の法則と

でも呼ぶべきものが、自分に「下品ざんげ」の形を取らせたことを書くことこそが主であつたように思ふのである。

最晩年に使つていた「雨ニモマケズ手帳」にも、賢治は「調息秘術」として「咳、喘左の法にて直ちに之を治す」と書き、法華経の如来通力品に由来する国柱会の道場観を書き、「次に左の分にて悪き幻想妄想尽く去る」と書いて、法華経の見宝塔品を引用している。病床で病と闘つていた最晩年の賢治だが、法華経の法力や呪力について真剣に考えていたことも忘れてはならないと思ふ。

先行研究

- 小倉豊文「カノ肺炎ノ虫ノ息ヲオモヘ」（『雨ニモマケズ手帳』新考）東京創元社 昭和五十三年十二月）
- 山口達子「賢治「文語詩篇定稿」の成立」（大谷女子大学紀要 2012）大谷女子大学志学会 昭和六十一年一月）
- 小桜秀謙「雨ニモマケズ」考（『宮沢賢治と親鸞』 弥生書房 昭和六十一年二月）
- 対馬美香「われのみみちにたゞしきと」小考（『弘前・宮沢賢治研究会会誌6』 弘前・宮沢賢治研究会 平成元年五月）
- 長沼士朗A「狐は最期に何故笑うのか 童話作品「土神と狐」より」（『風船2』 大谷利治・戸崎賢二・長沼士朗 平成十一年一月）
- 長沼士朗B「われのみみちにたゞしきと」（『宮沢賢治 文語詩の森』 柏プラーノ 平成十一年六月）
- 島田隆輔A「八写稿論」（『宮沢賢治論 文語詩稿叙説』 朝文社 平成十七年十二月）
- 島田隆輔B「原詩集の輪郭」（『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク八写稿による過程』 〔未刊行〕 平成二十二年六月）

